
八匹の殺人種 下巻

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八匹の殺人種 下巻

【Nコード】

N1963E

【作者名】

P 琢磨

【あらすじ】

待ち侘びた殺戮の宴が長き微睡みの中より具現する。望みを託して臥す無力な老兵、亡者を追い求めた支配者の妃。悠久を生きる人外の姫、それを護り続け解放を望む侍。全てを掌握し俯瞰を続ける謀略将、僅かな希望を粉碎する逸脱者。絶望を塗り替えようとする進行者、それに護られた極運を持つ娘。彼らは皆、唯一つの未来を信じていた。生き残る。それすらも叶わぬ地獄で、遂に八匹の宴は終焉を迎える。【八匹の殺人種】の完結編をここにお届けします。

【宵討 巻】 流天（前書き）

題の通り下巻です。上巻を読んだ後にお読み下さいー（・ー（・ー

【宵討 巻】 流天

月の映える夜だった。

雲は全く無い訳じゃないが、月を隠す時の雲と言い、何だか風流な趣を演出していた。そんな時に向かった場所が悪かった。今日は何だか……いや、今日も何だか碌な眼に遭わない気がしてならなかった。

キルトを置いてきてしまったが、その前に襲撃してくるであろう飛島を押さえるつもりだった。飛島さえ潰せば、目下の問題は取り敢えず片づけられる。今後起こり得る襲撃を完全に絶やすには、大本を断てばいいはず。その間にキルトが狙われないとは勿論言い切れないから、即行で済ませるつもりでもいた。

「ここが、飛島の城か」

見たところ、少し立派なだけ。他に特徴らしい物と言えは門ぐらいで、それ以外は何らその辺に在る一戸建てと変わらない。門構えは確かに素晴らしい。その門が今、開け放たれ、いかにもな雰囲気醸し出している。さあ中に入れと言わんばかりだ。

奥に見える玄関に何か変わった機構が施されてるようではなく、どう考えても普通の家だ。ただ、棺藤が案内した通り、表札には《飛島》の文字。……やっぱここなんだろうけど、どうにも拍子抜けするな……。

極道の家つてのは、武家屋敷みたいなモンを想像してたんだけど……その考えは些か古いのかも知れない。

「……つかおまえ、飛島の家知ってんなら、テメエの事務所の所員全員向かわせりゃ済む話だったんじゃないかねエのかよ？」

識沢の訳の分からない話を聴いていたら、棺藤にも共に戦える仲間がいるらしいじゃねエか。そいつらをどうしてここに向かわせない？ そういう意味で尋ねた。

立派な門構えにも臆せず、棺藤は懐から煙草を取り出すと、ジッ

ライターで火を点ける。俺を見るでもなく、飛鳥家を見ながらポツリと返してきた。

「……そんな事、できる訳無いじゃないですか」

「何でだ？ まさかテメエ、自分の仲間殺人をさせたくねエだとか吐かさねエよな？ 俺に人殺しを強要しといて、仲間の殺人は許せないだとか」

「逆に聴かせてください。仮に君がどうしても私を殺したいとしましょう。ですが君の力では何を以てしても私を殺せない。でも、君の母親ならば私を殺せる。君は、自分の母親に私の殺害を頼めますか？」

「……こいつ、胸糞悪い事をサラリと言いやがって……！」

確かに棺藤の言うとおり俺は、生きていたらの話だが、母さんに殺害を依頼する程、腐ってはいない。だが、もしも頼める相手がキルトだったら？ ……その時は……いや、どうしてそんな人を殺さなきゃならない話になる？ それは究極の話であって、そこに至るまでに問題を解決させれば何の問題も無いじゃないか。……では、問題がそこに至るまでに解決できなかつたら？ ……俺は、キルトに……

黙ったままの俺を見て、棺藤は煙草を啜えながら柔らかかな、まるで保父を連想させる笑みを浮かべて、視線を再び飛鳥家へ向け直す。「それでいいんですよ、柎坂くん。……君はまだこちら側へ来るべきじゃない。私のような大人になるべきじゃない」

「……テメエな、一つ言つとくが、俺を子供扱いすんな。殺すぞ」

「ええ、分かっていますとも」

「……こいつ、いい加減に腹立つな。胸糞悪いつたらありやしねエ。胸がムカムカしてきたが、何とか堪え、俺は一步前へ踏み出す。

何はともあれ、俺はこの中の主を殺さなきゃならない。そうしなければ、俺の身の安全は保障されない。結果的に俺はキルトを除いた六人の参加者を殺さなきゃ終わらないんだ。

門を潜り、飛鳥家へと侵入する。呼び鈴を鳴らすべきか悩んだが、

俺は別に飛島茅夏と遊ぶためにここに来た訳じゃない。できれば知られずに、眠ってる飛島茅夏を見つけて、腰に差してある拳銃の弾丸を一発ブチ込んで終わらせた。それが最上の幕切れだ。

棺藤が後から入って来た時、どこに隠れていたのか、門の前に何十人も人間が現れ、逃がさないと言わんばかりにこちらを睨みつけ、門の内側にいた人間がゆっくりと門を閉ざしていく。

俺と棺藤はそれを黙って見据え、門が閉じきるまで身動き一つしなかった。周りを、構えてこそいないが銃器や日本刀で武装した人間が取り囲み、動きようが無かった事もある。

「何者だ……？」

ざり、と砂利を噛む音が聴こえて、周囲を取り囲む連中の中から一人、三十代半ば程の男が出て来た。棺藤とどっこいかも知れない歳だが、向こうの男の方が何倍も精悍な顔つきをしており、生気が漲っているように見えた。……ただ、堅気の生気じゃないのもまた、確かだ。

俺は頷きもせず男を見据え、吐き捨てるように応じる。

「テメエこそ誰だ？ 人に名を尋ねる時や自分から名乗りやがれ」

「……俺は鬼城。このシマの元締め補佐だ」

鬼城と名乗った男はそれだけ告げると、右手に提げていた日本刀を握り直し、ゆっくりと俺を睨みつける。まるで蛆虫でも見るような目つきに、俺は苛立ちを感じた。こいつも、棺藤と似てやがる。俺を人として見ていやがらねエ！

この島の元締め補佐だとか吐かしやがったな、こいつ。……つまりは飛島茅夏 あいつの補佐みたいなモンか。そいつがここに現れるって事は、茅夏とは逢わせられないって事か？ ……まあ、妥当だな。殺し合いに自ら出向くルールが在る訳じゃないなら、下っ端に殺させるのが一番本安全な方法ではある。

ただ、んな無駄な事をしなくても、最終的には殺すんだ、何人束になるうが俺は死なねエってのによ。

思いながらも、あくまで相手には今、俺は普通の人間……頭を撃

たれたら死ぬその辺のガキと思わせとくのは都合が良さそうだ。後々、殺害が楽になるかも知れない。

……ちつ、これじゃまるであいつと同じじゃねエか。胸糞悪イ。

「鬼城つ言ったか？ テメエの頭を出せ。話が在る」

「……おい、棺藤。話が違つぞ。俺は、逢魔キルトを連れて来いと言つたんだが？」

はア？

俺は思わず棺藤に振り向き 銃声が鳴り響き、弾丸が足を穿つていた。蹠よちめついて、その場にすつ転んでしまふ。

「ツつ。……んだ、おい、棺藤テメエ……？」

「……済まないねえ、柎坂くん。私には、私なりの考えが在るんだ」
棺藤は全く済まなさそうな顔をしたまま、鬼城に向き直る。足の怪我は物の数十秒で治るだろうが……ここはそんなに明るくない、今は動けない振りをしておく。

俺に見向きもしない棺藤は、鬼城に向かって言葉を発する。

「彼も、茅夏嬢が殺したがってる人物の一人だと、私は断言しよう」

「……何故分かる？ いや、待て。棺藤、何でお嬢が殺したがってるぞと知ってる？」

鬼城の顔に訝いぶかる色が浮かび、眼光に鋭さが増すが、棺藤は齒牙しがにもかけず、話を続ける。

「私が茅夏嬢と同じ立ち位置にいるからだよ、鬼城。君は知らないだろうが、彼女と私は某ゲームに参加している。新味無い、殺人ゲームにね」

「……本気で言ってるのか、棺藤？」 鬼城の視線に隙は無い。

「ええ ……何なら、茅夏嬢本人に聴けばよろしいのでは？ 序

でに言えば 私の条件は完遂クリアしたはずです、次は君が果たす番ですよ、鬼城？」

……条件？ それは、キルトの代わりに俺をここに連れて来た事か？ ……つまり、こんな事を言うのも今更だが、棺藤は飛島茅夏と共同戦線を組んでいたと、そういう事か？

嵌められた、と思わず舌打ちしそうになるが、これはこれで良いと考え直した。どの道、棺藤も殺すべき敵だ、いつ殺す対象になるうが俺にとっちゃ何の問題も無い。単に、現時点で殺すべき対象が一人増えたに過ぎないのだから。

棺藤の進言に対し鬼城は醒めた目つきのまま、どこか感情の起伏が無い平坦な声音で返した。

「……寝惚けた事を吐かすな棺藤。俺はこう言ったはずだ。『逢魔キルトを連れて来い。生死は問わない』とな。こんな何の価値も無いクソガキを連れて来て条件を完遂しただと？ 巫山戯るのも大概にしるよ棺藤。ここでその体をミンチにされなくなかったらとつと逢魔キルトを連れて来い」

激情に走るでもなく、あくまで平坦な声音で告げる鬼城は、逆に胆を縮み上げる効果が在るように思えた。その辺のゴロツキのように、やれ殺すだの死ねだのと物騒な言葉遣いをするよりも、遙かに恐怖心を掻き立てる。

「やっぱ本家は違うか、と変に感心した。

だが、棺藤に怯んだ様子は無く、寧ろこちらも堂々としていた。

「……これが大人か、と不意に脳裏を変な想念が過ぎった。

「……交渉決裂、ですか。残念ですねえ、とつても」

と言う棺藤に残念そうな表情は窺えない。……食えない野郎だ、と口の中で呟く。

「……一つ、提案させてください」と言つて棺藤が人差し指を立てる。

「……言ってみる。ふざけた内容吐かすとどうなるかよく考えてからな」

無機質に返す鬼城に頷き、棺藤は言葉を紡ぎ出した。

「取り敢えず、茅夏嬢に伝えてもらいたいです。……そうですね、こう言えば分かると思います。『高校襲撃でテロリスト犯を殲滅した少年』と」

瞬間、鬼城の瞳の色が変わったのが分かった。俺を見る眼が、ぎ

らついていた。多少の困惑と疑問は在つただらうが、それも殺意と敵愾心てきがいしんに切り替わる。

鬼城を見上げる形で見据えたまま、俺はゆつくりと背中に手を回し、拳銃に指を触れる。刹那、背後で撃鉄ハンマーの作動音が聴こえ、銃口が向けられている事を悟る。当然、俺を囲んでる奴ら全員に狙われてる状況だ、下手に動けば蜂の巣になるに違いない。

「そのガキが……？」鬼城が戸惑いと怒りの絢ない交ぜになった声を発する。

「この少年をどうするかは貴方方にお任せしますよ。ただし、交換条件を出します。茅夏嬢と面会させてください。どうです？」

とても君に有利な条件だとは思いませんか？ 鬼城」

棺藤の巧みな話術を聴いていて、思う事が在る。大人つて汚エ。それだけは確かだ。

俺をここに連れて来た理由は、これだったんだ。棺藤にしてみりや、俺はとても都合のいい札カードだったんだろう。俺を差し出せばかなり有益な交渉が望める。そう踏んで、俺を交換条件トレードに持ち出した。……こういう奴が世渡り上手なのは、いけ好かねエな。

「……小僧、それを証明する事は言えるか？」確認だらう、鬼城が尋ねる。

……証明、ねエ。俺は鬼城を睨んだまましばらく黙考していたが、ふと思ひ出した。だけど、あいつは本当に……

「……灰崎瑞平はいさきみずいへいは、本当にテメエらの仲間だった、のか？」

些細な変化だが、鬼城の顔色が変わった。疑惑が、困惑に変化したような感じだ。本当に敵なのかと疑っていた相手が本当に敵だと気づいた時の顔だった。

そしてそれは俺の心にも感情を渦巻かせた。……やっぱり、あいつは……。舌打ちしそうになったが、齒を食い縛って耐える。

「……小僧、テメエの名は？ 名乗れ」

「何でテメエに名乗る必要が在る？ 　ここで、テメエは死ぬ

のによ！」

拳銃を引き抜き、銃口を向け

どちゃッ、

少し離れた所で、泥袋どろふくろが落ちたような音が聴こえ、俺は思わず瞳どう目もくした。

腕が、無い。

「えッ？」

右腕の肘ひじから先が消失し、気づいた時には鮮血が先端ほんばしから迸り、辺りに噴水のように撒き散らす。

その視線の先には、日本刀を振り抜いた格好で構える鬼城の姿が在った。

斬られたのか。

痛みが後から暴れ出し、あまりの激痛に視界が白熱した。

「ッがアアアアアアアアッ！」

声が喉のどを迸り、痛みもたに悶えながらもその場に踏み止まる。倒れる訳には、いかなかった。根拠は無い。ただ、俺は痛みくるに狂い出しそうになりながらも、鬼城を睨みつけていた。

鬼城は腕の無くなった俺を見下し、一度白刃を振るって血糊ちのりを飛ばす作業をする。

「……ガキが喚わめくな。叫さけんでも助けは来ねエぞ。ここの屋敷内は完全防音機構になってる。音は外部に一切漏れねエよ」

何を言っただのか、自分の断末魔の叫び声で掻き消され、完全に聴き取れなかった。

ただ、俺は腕をぶった斬られながらも、残された左手で鬼城に殴りかかっていた。

ぞぶ、と冷たい感触が胸を貫いた。

「げぶッ」鮮血が口から噴き出る。

ダラダラと口から鮮血が駄々漏れ、気が遠くなるような寒さを感じながら、俺は緩やかに地面へ平伏した。……心臓を一突きか。こいつも人を殺す事に全く躊躇ちゅうじゆがねエ……どうしてこういう奴らばっ

かなんだ、俺の周囲は……。

視界が滲む中、咳き込みながら何度も喀血し、ゆっくりと意識が断絶していく……。

【宵討 貳】 流天

「……まさか、こんなにあっさり殺してしまうとは」
棺藤かんとうの無関心そうな言葉に、俺は意識が半分溶けたまま耳を傾けていた。

倒れ込んだ俺は、回復を待つて死んだフリをする事にする。……いや、フリじゃなくてほとんど死んだような状態だ、激痛やら失血やらで動けるまで時間が掛かる。

「何れは殺す相手だ、いつ殺そうが問題じゃねエ。……それより、聴かせろ。テメエは何でこのガキと一緒にいやがる？ テメエにはキルトを」

そこで、鬼城きじょうは理解したようだ。……察しが早エ。俺は内心舌を巻く。たったこれだけの状況検分で分かるモンなのか、と。

だが、鬼城は一切の容赦を持たず、棺藤を睨み据える。

「……テメエにはテメエの仕事を与えてやったはずだ、棺藤。逢魔おしまキルトを連れて来い。テメエはそれさえ守ればいい。それだけだ」
「嫌ですねえ、せめてポーナスくらい与えてもらいませんと、割に合いませんよ 茅夏嬢ちゅうなつと話をさせてください。……いえ、もう一つ、条件を提示していたはずです、それをお願いしますよ」

「……もう一つ？ ……こいつ、俺を出汁ダシに使ってまだ交渉しやがる気か……？ 碌ロクでもねエ野郎だな、おい。」

鬼城は黙ったまま棺藤を鋭い眼光で見据えていたが、……やがて舌打ちと共に視線を外す。鬼城が根負けするとは思わなかった。明らかに外見からして、棺藤が土下座するシーンのはずだ。大人って分からねエ。

「……俺がんな事知ってると思うか？ 俺は」

「ええ、君なら知ってるはずでしょう？ 飛島雪春としまゆきはる」

先代の腹心だった君なら」

「……」

……先代、つーと飛島茅夏の親父さんか？ ……鬼城つて奴、確か今は飛島茅夏の腹心やつてんだっただな……親子揃って腹心持ちたア、流石さすがだな。……だけど、そんな奴の何が聴きたい？ そもそもが、こんなヤクザモンから何かを聴き出すって時点で、穏やかな話じゃアねエな。……何だかキナ臭エ話になってきやがった。

「へえ。鬼城、あんたあの時の事、話すんだ？」

声。女の、甲高い、どこか嘲笑うしろめたいの響きが混じった笑声が、どこからとも無く聴こえてきた。

俺は動かないように気をつけながら視線を巡らす。と、姿が見えた。家屋から人が出て来たのだ。女。それもまだ子供だ。中学生、と言ったところだろうか。あどけなさの残る顔立ちに、色んなアクセサリを無駄に付けまくった衣装。

彼女が……奴が、もしかして……

「お嬢」「……出ましたね、茅夏嬢……！」

飛島茅夏か。

二人の声で確認した俺は、静かに息を殺し、その姿を網膜もうまくに焼きつける。……一見、どこにでもいそうな少女ではあった。だが……何と無く、分かる。彼女の漂わせている空気が、常人のそれとは違う事が。

それは普通ではない証拠。彼女は 普通 の人間ではない。

「やあおっさん、まだ生きてたんだ？ てつきり死んだと思ってたよっつーか死んでれば良かったのに何なら今死ねよ。臭いから早く消えればいいのに。……まあおっさんはウザいからいいとして、

鬼城。あんた、あの時の事話すつもりなのか？ なら教えてよ。

親父は何である時

「お嬢。その話は、禁忌きんぎです。触れてはならないと、言って聴かせたと思います」

鬼城の無感情な返答。……だけど、俺には分かった。鬼城は、何かを隠している。感情や言葉には浮上させないようにしているが、その空気が俺には伝わってきた。恐らく、この場にいる奴ら

棺藤や飛島茅夏には分かる位の、表情の機微きびに、俺も気づけた。
何を隠している？　そしてそれは、棺藤や、そして自らの頭領ボスで
ある飛島茅夏にさえ話せない事なのか？　……俺には興味の欠片カケラも
ねエが、それを聴けば少しは問題が解決するなら、静聴の価値は在
る。

失血した血液は大分戻り、体は指の先まで動く状態に回復した。
後は、時期を待つだけ。今は静かに時を見守る。

「禁忌？　ああ、そうだね。親父が死んだ事は、禁忌だねえ、確か
にさあ。でも、んな事どーでもいーじゃん、今更さあ。つーかどれ
だけ続ける気だよ、その禁忌ってさあ？　いい加減、あたしも知り
たいっつーの。あのクソ親父の言いつけ守って何か得は在るの？
ねえ鬼城。いい加減終わろうぜ、このくっだらねえ馬鹿げた言いつ
けをよお」

ゲラゲラと笑い始める飛島茅夏に、鬼城はあくまで機械的な表情
のまま、何も口に出さない。徹底した黙秘を続けるつもりだろうか。
……だけど、奴ら何かおかしい。

そもそも、何で腹心の鬼城が知っていて、頭である飛島茅夏が知
らないんだ？　先代の事に就いてなら尚更なおさらだ。若頭になった飛島茅
夏に逆らう事など、鬼城にできるはずが無いのではなからうか。な
のに……“禁忌”とまで呼ばれるそれは何だ？　先代　雪春の死
亡に纏まつわる何かなのか？

「……待ってください。何故、そこで雪春が死んだ事が出て来るの
ですか？　雪春が死んだのは、オトさんが死んで」
「その屑クズの死んだ日に、ウチのクソ親父も死んでんだよ」

……誰の事を言ってるのか分からないが……棺藤は明らかに動揺
してるようだった。何の話をしてるか知らねエが……分かったのは、
これを聴いても俺には何の益も無いって事だ。

ここには飛島茅夏もいやがるんだ、殺すなら今

「まさか、雪春も逢魔キルトにやられたのですか……？」
ポツリと零こぼれた、棺藤の一言に、俺は完全に思考が凍結した。

……今、何を、言ったんだ、こいつは……？
雪春……つまり、茅夏の親父さんだ。そいつを、あいつが殺した……？

あのバカが過去に何をしようと思っただが……本気でやりたい放題なのか、あのバカ……！

だが、その言葉を打ち消すように鬼城が変な勘繰りかんぐを入れてきたのを俺は聞いた。

「何を言ってる？ 先代は」

言いかけ、どもる。……違うのか？ 鬼城とかいう奴、絶対に何かを知ってやがる。それを棺藤は勘違いしてやがんのか？ ……何が何だかサツパリ分かんねエ。背後関係やら、過去状況がサツパリ掴めねエ今、推測は完全な妄想と同類だ。

黙っておく方が吉か。それでも俺はゆっくりと動き始めていた。

まずは 斬り跳ばされた右腕を回収しに、ゆっくりと体を動かす。組の者の眼は完全に棺藤に固定されてる。今動いても誰一人として気づくはずがねエ。何せ俺は、心臓を貫かれて殺された、ただの死体だ。んなクソ面白くねエモン見てる奴なんていやしねエ。

遅くはあったが、慎重に、音を立てない事に重きを置いて動き、少しずつ切断された右腕へと這はっていく。

「……鬼城、話は最後まで言えよ。はやく言え！ こーゆるーウザってえ時間があたしはいっちばん嫌いなもの！ 分かるか？ 無駄なんだよ時間がさあ！ 分からないか？ あんたどれだけ生きてると思ってるの？ あたしの二倍も生きてるくせにんな事すら理解できない程に愚かで稚拙ちせつで腐ってるの？ 何ならここで殺してあげてもいいんだぜっ？」

「鬼城、話してください。あの時の真実を。私は、それを知るためにゲームに参加したんですから」

取った。

俺は、ゆっくりと立ち上がる。近くにいた若い男が、変な悲鳴を上げたので、全員がそれに釣られるようにして、俺へと視線を巡ら

せる。

「……何で生きていやがる……？」鬼城が驚愕の表情で俺を見つめる。

「柘坂、くん……？」同じく、棺藤。

「おまえが、六人目か？」

一人だけ冷静に返したのは、飛鳥茅夏だった。奴だけは俺を人として いや、違うな。アレは 同族を見る眼だ。あの女は今、俺を仲間だと認識した。

俺は左手で右手の拳銃を掴み直し、右手を本来在るべき場所へ戻そうと、腕にくつつける。すぐにはくつつかないだろうから、そのまま持ったままの姿勢で応じる。

「フー事は、テメエはテメエを含めて五人のゲーム参加者を知っていやがるんだな？ 教える。それまで殺すのを待ってやる」

「銃を下ろせ小僧。死にたいか」

鬼城の冷徹な声を聴いても、俺には何の心理効果も無い。奴が殺せるのは普通の人間であって、俺じゃない。奴は、俺にとって何の脅威でもない。現時点では、だがな。

「テメエこそ俺に近寄るんじゃないぞ。序でに言っとくが、その辺の奴らも動くなよ？ 動いた瞬間、ボスの脳天吹っ飛ばすから覚悟しとけ」

舌打ちや罵声が聴こえた気がしたが、一々構う程のものでもない。俺は構わず飛鳥茅夏を見据える。

「さあ、応えろよ飛鳥。誰が参加者なんだ？」

「おーまえウザいなー。何あたしに命令してんの？ あんた何様？ バカじゃないの、銃は力であって権力じゃねえっつーの。その頭は何で付いてるの？ ポンド？ 糊？ 中身は在る？ 粕じゃ役に立たないけどなー」

……その口の悪さは人類平等なのか、クソツタレが。

思わず引鉄に力がこもるが、耐えて問い直す。

「テメエと口論してエ訳じゃねエよガキが。テメエが吐くのは四人

分の名前だけだ。さあ、吐けよ。それとも脳漿のうじょうブチ撒けてエか？」
「ウツザ！ だからあたしに命令すんなっつーの！！ 虫唾むしつが走るんですけどーつかキモーいー！！ おまえキモいよ！ 話しかけんな、キモいのが伝染うつるだろー？ 銃も下ろせよ、おまえ喧嘩ケンカ売り過ぎだっつーの、立場わきま弁えろバーカ」

「どっちが弁えてねエんだよバカヤロウ！ 死にてエのか！？」思わず怒鳴り返す俺。

「何？ マジであたし殺せると思ってんの？ それにさあ、あたしを殺せたとしてもこっから逃げ切れるとマジで思っただの？ 何十人いると思っただのよ、言ってみなさいよ、え？ 合計四十七人のあたしの配下があんたを原形留めずにブツ殺すわよ。それとも、あんた一人で立ち回ってみせる？ あたしと鬼城含めて五十人弱の間ブツ殺して逃げ切る自信あんのおんた？」

「 在る」

即答してやると、流石さすがの飛鳥も驚いたらしく、俺を見て瞠目まごしていた。……が、その眼まなこが徐々に同情の色に彩られていく。

「……あんな程の鉄砲玉テッポウタマ見るのも久し振りだわ。いいわ、やってみなさいよ。あたしを殺せるモンならやってみればいいじゃない。……あんたは簡単には殺してやらない、酷ひどい殺し方したげるわ。最後に泣いて詫わびる位にねえ！」

飛鳥茅夏は、恐らく俺が小心者の臆病者に見えたんだろう、絶対に俺が撃つてこないと断定したに違いない。奴は俺が応えるのを待たずして背中から拳銃を引き抜き、そして俺に向かって構えながら、弾丸をブチ込む算段くわだでも企ててたんだろう。……だけど、それは実に馬鹿げた仮定の話だ。

俺は、いつだって本気だ。テメエをブチ殺すのに、何を躊躇ためらう必要が在る？ 俺は奴が動く寸前には、引鉄トリガーを引き抜いていた。弾丸が、音速で掃き出される。

「 げふッ」

それは胸を食い破り、背中から赤い液を噴出させるに至る。俺の

放った弾丸は確実に殺傷できる位置を貫き、俺は奴が何をしようと思
間も無く死ぬ事を直感した。

奴は立ったまま吐血し、それでもまだ立ち塞がる。 飛島茅
夏を庇^{かば}つて。

「 鬼城！」「鬼城……！」 飛島茅夏と俺の怒号が凶らずも重
なる！

その後の展開は、俺にとって予想外でもなかったが、飛島茅夏を
殺害できなかったのは不覚だった。組の者が総出で拳銃やら短機関
銃^{ガン}やらを引っこ抜き、俺に向かって掃射 俺の体を余す所無く弾
丸が突き抜け、とても立っていられる状態でもないのに踊る
ように回転し続 け、俺は思 考が碎け るの
を 感じ

.....

【宵討 参】 棺藤

その日は、小雨のちらつく一日だった。

私は雨天が嫌い、という訳ではなかったけれど、概して好きという訳でもない。その日はそういう天候で始まり、そういう天候で終わるのだから、私のような者が好き嫌いを言ったところで変わるものではないし、同時に私がそうであってほしいと思ったり、そうであってほしくないと願ったりしたところで変わるものでもない。ハッキリと自覚していた。避けようの無いものは、概して自然が当て嵌まると、その時はぼんやりと考えていたと思う。

「カンさん」と私を呼ぶ声が聴こえて振り返ると、デスクに着いていたオトさん　音澄忠おとずみただしが私を見て書類を整理していた。その表情にはどこか落ち着いた趣おもむきが在る。

オトさんは一番の年長者で、ご意見番とでも言うべき立場を確保している、私達の先輩に当たる人物だった。確かに、この職場では私の方が階級は上で、私が上司で彼が部下に当たるのだが……それでも私は彼を尊敬していたし、よき理解者として付き合っていた。それはいつまでも不変的な関係だと、その時の私は、思い込んでいた。

「……カンさん、やっぱりダメだ、僕は諦めきれない」

オトさんはそう言って、私を真剣な眼差しまなざしで見つめた。私を問い詰めるとか、怒りに身を任せて怒鳴るような真似まねこそしないが、そこには確かに彼の強い意志が見え隠れしていた。

……オトさんが言ってる件は、事件そのものこそ解決していたが、彼は納得できないのだろう。それは夢成くんもそうだし、蛸ほたるくんも、魅織みおりくんだってそうだ。誰も納得なんてできていない。だけど事件は一応落ち着いた。それで終わったんだとは言えないが、解決はしていた。

殺人事件。とある家庭で起こった集団殺人事件に、私達は

首を突っ込んだ。

夫婦と二人の子供の四人家族の家庭で、夫が妻と子を殺害し、家に火を放ち自殺。……簡単な話、お粗末な一家心中だ。生き残りは皆無。妻と子は家が焼かれる前に刺殺されていると分かったし、焼失した家からは夫の焼死体と、夫の指紋付きの出刃包丁が見つかっている。

これだけ分かり易い事件にも拘らず、私達の見解は違っていた。

これは外部犯だ。だが、警察は捜査を打ち切り、これはそこで終結した事件だった。

証拠は無い。だが、私やオトさんの調査で明らかになったのは証拠ではなく、周りの環境だ。

夫は別に金に困っていたなど、そういう面では全く問題は無かった。ただ、職場に問題が在った。

彼は堅気カタキの人間ではなかった。

何でも、麻薬クスリを専門に扱う売人だったらしい。本人にも投薬の癖が付いていたという事は、周りの人間から証言を得ている。だが、それだけで家族を殺す理由にはならない。家庭環境が劣悪だったと言う話は聴かないし、問題が在ったという話も無かった。

では何か。　　そういう事を専門に扱う世界では、彼を始末したい連中がいた。それだけの話だった。

飛島組としま。この辺一帯を締める極道の人間が、彼の命を狙っていたのではないか。それを極秘裏に私達は捜査し、案の定、肯定せいかいだった。

そういう経緯から、私達は飛島組、その組長である飛島雪春ゆきはるを疑っていた。彼が殺害を部下に命じたのではないかと。

飛島組は警察やマスコミ関係、どこにでも太いパイプを持っていると聴き及んでいたし、何より内部の者、私の旧友と言すべきか、はたまた悪友とでも言うべきか、鬼城きじょうという男からそういう話は聴いていた。

鬼城も、私に警告していた。この件には関わるな。碌ろくな眼に遭わ

ねえ　と。

私も長年の勤、とでも言うか、そういうモノを感じて、この捜査には深入りしないと、部下にも伝えていたのだが　　どうにも、オトさんだけは納得してくれなかった。

「犯人が分かっているのに、それを放置するだけの包容力が僕には無いんだよ」

と聴いてくれないのだ。……私だって、完全に納得した訳じゃない。オトさんが言うとおり、犯人は確かに別にいるのだ。でも、それが飛鳥組だと、そのトップの飛鳥雪春だという証拠は無い。証拠は無いが動機は在る。……でも、それだけじゃ警察は取り合ってくれない。それに飛鳥組の関与が認められたら、最悪私達の身が危ない。それを、オトさんに分かってもらいたかった。

「……オトさん、そうは言っても証拠が拳がらなきゃ私達では手が出しようが……」

「その証拠を見つけないのが僕達の仕事じゃないかい、カンさん？　そのために僕達がいるんじゃないのか？」

決して責める口調じゃないのに、私は胸が締めつけられるような痛みを覚えた。彼の言っている事は、間違っていない。間違っているのは私なんだ。……でも、私は部下にそんな命令を下せない。私は彼らの保護者ではないにしろ、上司なんだ。部下の命を想って何が悪い。

私はオトさんを見つめ合い、……小さく首を横に振る。

「……カンさん！」

そこで始めて激情の混じった声が飛んだが、それきりオトさんは黙り込み、……しばらくして席を立った。擦れて色の薄くなったコートを肩に引っかける。

「……少し、頭を冷やしてくるよ」

オトさんが事務所を後にして、すぐに夢成くんが僕を見上げた。

「……所長。俺らの仕事って、何だと思えますか？」

「……お願いだ、こんな事を私の口から言わせないでくれ……」

夢成くんが齒を食い縛ったのが見えて、私は胸が軋むような想いで、その顔を見つめ続ける。

「……済みません」

済まなさそうに、でも本心は隠しきれない顔で、夢成くんが俯く。コンピューターに眼を戻し、静かにキーを叩く音が事務所に響き渡る。

「……悪い事をした、と私にも分かっていた。彼だって、分かっているんだ。私が臆病だという事を。それを受け入れて、……きつと上司と部下という関係を守って、言い返さない。それに私は甘んじているんだ。……済まない、そう思っても口には出せない今の状態が、辛い。」

「カンさんは思い詰め過ぎよ。もうちょっと私達の事を信用したっていいじゃないですか」

魅織くんが背伸びをしながらそんな事を呟いたのが聴こえた。こちらを見ると、魅織くんが穏やかな微笑を浮かべて、こちらを見つめていた。

「私達、まだ一人前に見えないかも知れないですけど、それでも一端の棺藤探偵事務所の一員なんですよ？ ここにいるって事は、それだけの覚悟が在るって事です」

「……ありがとう。でも」

「……やる時、は……やる」

ぼそ、と蛭くんの呟きが聴こえた。視線を移すと、ぼんやりと虚空を眺めたまま、蛭くんが再び口を少しだけ動かしたのが見えた。

「……あなた、の……部下、だから……」

「……」

言葉が咄嗟に出なかった。

感動とか、そういう感情を覚えたつもりは無かったが、……嬉しくは感じていた。こんな優秀な部下に囲まれて幸せだとも感じた。

だが、だからこそ、だ。だからこそ、そんな事を命じられるはずが無かった。

「ありがとう、皆。……だけどね、君達に危ない橋は渡らせられない、それが私の性分なんだ、分かってほしい……」

皆一様に黙り込み、言葉の無い空間が出来上がった。

魅織くんの持ってきたアニメの主題歌^{テーマソング}だけが、延々と鳴り響く……

……

しばらくして、私の携帯が鳴り始めた。着信音を設定していないので、いつもの無機質な呼び出し音が鳴ったのを聴き、私は液晶画面に眼を落とす。音澄忠。そう表示されていた。

「もしもし」

通話ボタンを押して耳に押し当てると、……何だろう、酷く^{ひど}乱れた呼吸音が聴こえてきた。それに、私への返答が無い。

「……もしもし？ オトさんかい？ どうしたのかな？」

「……はあ……っあ」

ゴトゴトと少しばかり背後で物音が走る音声の中、オトさんらしい人の呼吸音だけが聴こえる。……どこか咽^{むせ}び泣いているような響きも在って、私は何か異常な事態を連想した。

「オトさん？」思わず声が大きくなる。立ち上がり、椅子に掛けていたコートを手には掛ける。「今どこだい？」

「……あない……」酷く^{かす}掠れた、オトさんの声。

「え？」

「済まない……しく……じった、よ……う」

掠れて、しかも酷く聴き取り難い声で、オトさんは確かに、そう言った。

私は何の事を言ってるのか一瞬分からなかったが、瞬時に察した。最悪の、事態を。

「オトさん、場所はどこだい？ 場所だけでいい、後は何も言わない方がいい」

「……本当に……ごぼっ！……済まない……最後までっ……迷惑を、

掛けました……っ」

「オトさん！ それはもういいんだ、どこにいるのか応えてくれ！」

「……本当に……済まな」

声が遠ざかり、通話が切れる。残ったのは、ツーツーという、無機質な音声のみ。

事務員の誰もが臨戦態勢に移っていて、私もすぐに飛び出そうとして、メールの着信音が鳴ったのに気づく。慌てて取ると、

オトさんからだった。

『羽月高等学校近く高架下公園』

内容はその一文のみ。

だが、それだけで充分だった。そして、私は即座に気づいた。これは、オトさんが打ったものではないと。

犯人の、仕業に違いなかった。

「棺藤さん！ 車、回してきます！」

言うや否や事務所を飛び出していった夢成くんに、蛍くんも専用のグローブを手に嵌めつつ、私に視線を向けてくる。

「……出番……だよ？」

「……私の責任だ、……何としてでも助けるぞ、皆」

その言葉に全く力が無い事を自覚しつつも、言わずにいられたかった。

犯人が何のためにメールをしたのか、よく考えてみればいい。愉快犯なら、まだオトさんが生きてる可能性は在るだろう。……だが、相手は恐らくそんな類ではない。殺害が完了した事を伝えるために、メールを送信したんだ。

何の希望も無い場所へと今、私は赴くんだ……

【宵討 肆】 棺藤

「……………」
小雨のぱらつく、少しだけ霧状になって辺りを白く隠した世界に、それは在った。

高架下に在るその公園は、近くに住宅街が並んでいる事も在り、子供達が集まる事は多いのだが、それも時間帯による。授業時間の終わる放課後、ここは子供達の格好の遊び場となるのだが、まだ昼の休み時間にも満たない時刻、ここは閑散とした無人地帯と化す。主婦や散歩の歩行者もあまり寄りつかないような、或る意味では子供達の秘密基地とも言えるような場所だった。

そこに

「……………オト、さん……………？」

変わり果てた、人間の末路が、無造作に、……………転がっていた。

それも、オトさん一人ではない。周りには大勢の死体。それも恐らくは銃殺……………オトさんがやったんだと思うが、全員が射殺されていた。虫の息の者すらいない、完全な沈黙の領域が降臨を果たしていた。

その中に、ボコボコに殴られ、見るも無残な状態で寝転がっているオトさんに、私は歩み寄って、体を抱き上げる。

まだ、温かかった。

「オトさん……………お願いです、眼を……………眼を、開けてください……………！」
揺すっても、摩さすっても、抱き締めても……………彼は、何の反応も示さない。

分かっていたんだ、私も。分かっていたのに、本能が認めようとしない。私の中に在る意志がその現実を許さない。頑かたく々な心が事実を歪ゆがめようと必死にもがく。

……………大人の定義はどこにあるのだろう。ふと、思った事がある。

人間はどこからどこまでが『子供』で、どこからどこまでを『大人』と呼ぶのか。客観的に自分を見つめる事ができるようになったら？ 物事をちゃんと割り切って行動できるようになったら？ ……だとしたら、私はまだ子供だ。

私は、この現実を受け入れるには、心が持たなかった。

私は 無力だ。

「オトさん……ッ！」

徐々に冷たく、そして硬くなっていく体を抱き締めながら、私は声も無く慟哭した。

何度怨んだらう。自身の配慮の無さや、思考の甘さを。私がかも少し考えて行動していれば、彼がこんな目に遭う事は無かった。

全ては私の責任だ……！

「……棺藤さん。今、警察を呼びました」

携帯電話を握り締めながら、夢成くんがやって来るのが聞こえて、私は涙も出していないのに顔を拭くと、歯を食い縛ってオトさんいや、もうオトさんではない、ただの骸を、アスファルトの地面に寝かせた。

蛭くんは辺りに寝転がっている死体の群れを調べていたようで、夢成くんが戻って来たのを機に一度こちらへ歩み寄って来た。

「……飛島組……だった、よ……」

「……見りゃ、分かるけどよ……だったら、やっぱりこの間の件は……」

「済まない、二人とも……少しの間だけ、一人にしてくれないかな」

私の発言を、二人とも咎めたりはしなかった。ただ、眼を伏せて肯定の意志を込めて無言でその場を離れていった。

ただ一言、

「……車で、待ってます」

ポツリと聞こえた夢成くんの言葉に、私は何故だか救われるような想いを懐いた。

死体だけが並べられた公園の中で、私は死体に成り果てたオトさんと向き合つて座つた。ここに魅織みおりくんがいたら「カンさん、ズボンが汚れちゃうつて！」などと小言を言われそうだな、と思つた。「……ん？」

ふと、視線が寝転がったオトさんに近づいた事で気づいた。オトさんの右手が握り拳を握つたまま固まつている事に。

既に死後硬直すてが始まつたんだらう、などと言う事ではなく、何か紙切れのような物が握られている事に気づいたのだ。

私は硬くなつた指の関節を折り曲げ、何とか紙切れを抜き取る。殴り書きで、たつた三文字。

『キルト』

たつたそれだけ。何の意味か分からないし、何を指すのかも分からない。ただの単語だとしたら……掛け布団、もしくはスコットランドの民族衣装になるが……どちらにしても意味が分からない。

ただ分かるのは、それが以前から書いていた物を取り出して握り締めたのではなく、つい先程……そう、彼が死ぬ間に書いた物だという事だ。まさか、わざわざ血を使って文字を書いてそれを持ち歩くとは思えないし、何よりその血はまだ乾ききっていない。

ダイイングメッセージ、という訳だ。

私はそれを素早くポケットの中に押し込み、その場を後にした。

……それから一年、私は片時もその単語を忘れた事は無い。ただ盲目的に、その単語を示す存在を探し続けた。

そして、昨夜。私はそれを見つけた。

逢魔あまキルト。

私は早速その彼女に就いて調べてみた。本来なら、あの場ですぐに聴けば良かったのだらうが……何分、突然の事で混乱していた。手紙には『七人の中にあなたが殺すべき相手がいる』と書いてあったが、それがどういう意味なのかイマイチ理解できていなかった。

手紙の主が亡きオトさんだというのも、どうにも胡散臭い話だと思
っていたのだ。そのために、どうすべきか対応が遅れた事も在る。

逢魔キルト。その本名……漢字で書くと『逢魔殺人』となる。『
殺人』と書いて『キルト』と呼ぶらしい。これが盲点だったんだと、
私は今朝愕然とした。現に、その瞬間までキルトと言う単語が何を
示すものなのか、ほとんど解読できていなかったのだ。名前だと気
づけなかった自分が愚かしく思えてならなかった。

それでも、だ。まだ自分の捜査に自信が持てなかった。何故か。

……今の今まで気づかなかった自分だ、まだ何かを見落としている
気がしてならなかった。私は何かを見落として、再び過ちを犯そう
としている……二度目は無い、あの時で最後にするんだ。

「……鬼城、お願いだ、応えてくれ……！ 君は、何を知っている
んだ！」

「……」
茅夏嬢に抱かれる形で倒れている鬼城は私を見上げ、生気の無い
表情で不規則な呼吸を繰り返していた。何も言わずに。

「鬼城！」

「……棺藤。世の中には……知らなくていい事も……在る」

「私はそんな論理を聴きたいんじゃない！ 応えないか！」

恐らく、あの事件の真相を知る者は彼以外にいない。彼が死んで
しまえば、事件は完全に闇に葬られる。それだけは絶対に許せない。
私の全存在を懸けて、オトさんの仇を討つと決めたんだ！

それを、おまえなんかには止められてなるものかッ！

「……鬼城、あたしにも聴かせる。親父を殺したのは……誰だ？」

茅夏嬢が、私に辛うじて聴こえる音量で呟いた。雪春を殺した人
物？ 確か雪春の死は、公式の発表ではどこかの組の鉄砲玉にやら
れ、その後飛鳥組が雪春を殺害した犯人に対して世間には発表され
ない殺し方をしたと、聴いている。

茅夏嬢は、何を知りたがっている？ まさか、その件にも裏が

「……どんなゲーム……に、参加されてるかは、……あ敢えて聴きません……」

弱々しい声音で返す鬼城に、最早力など残っていないなかった。私の、そして茅夏嬢の声が届いているのかどうかも、定かではないように見えた。

「……ですが、約束……して、くださ、い……」

「……何だよ、言ってみるよ」

「……生き抜いて……ください……」

生気の無い、まるでガラス玉のような瞳に、既に意志は宿っていなかった。虚ろうつろに開かれた瞳は、永劫えいじゅうに続いていそうな空の闇に吸い込まれていく。

「お嬢は、俺達を見捨てなかった……俺達も、見捨てるはずが無いんです……俺達は、いつだってお嬢の味方で、……良き理解者でありたい……皆、そう思っています……です、から……絶対……生き抜い……て……く……」

……声は、それ以上聴こえなかった。

私はその時、人として最低な事を考えていた。

ああ、手掛かりが無くなってしまった、と。

鬼城 旧友の死など、私にはまるで関係が無かった。最早、その死体は情報源の成れの果て。何の価値も無い、ただのゴミに相違無い。役に立つ事は永久に無くなったんだ。

だが、情報源になるべきモノは、まだ在る。

「……テメエ、誰に向かってそれ向けてると思っていやがる？」

おっさん

拳銃を持ち上げ、茅夏嬢に銃口を据えると、酷ひどく面倒な気分になったが、一応は口を開く。

「茅夏嬢。君が知ってる情報を教えてもらえないか？ ……いや、そう言つとまるで私が下位にいるみたいに聴こえるね。 吐け、茅夏」

「てめえ……！」

歯を噛み砕くような形相で睨んでくる茅夏嬢は、最早脅威に感じなかった。私は、オトさんの仇を討たなくてはならない。こんな所で終わる訳にはいかないんだ！

茅夏嬢が、不意に表情を和らげ、蔑んだ声音で、告げた。

「……おっさん、あたしはあんたが嫌いだ。何故だか分かるか？」

「……さあ？ 私は嫌われる要素が多過ぎるから、一々憶えていられないな」

「大人だからだ。あたしはな、大人って奴が大嫌いだね、脳天搗ち割りたい程に憎んでるのさ、 てめえら全員をな！」

体に衝撃が走ったのを機に、一斉に周りの人間が飛びかかってきた。

撃たれた音はしなかったし、この衝撃は 打撃。誰かが飛び蹴りをかましたのだろう、それを契機に組の若い連中が次々に私に殴りかかってきて、すぐに私は山の底へと叩き沈められた。

殴られ、蹴られ、打たれ、突かれ、折られ、砕かれ……全身が隈なく打撲痕だらけにされ、動けなくなるのに然程時間は掛からなかった。意識を保つのがやっとの状態で、私を見下ろすその影を見つめても、既に何の気力も湧いてこなかった。

「どうだ、おっさん？ 痛いか？ 苦しいか？ 辛いかな？」

「なら上等。……だけどなあ、おっさん。てめえはこんだけじゃ死なせねえ、死なせるかってんだ。いーい殺し方教えてやるよ。何も苦しめって言うてんじゃねえんだ、よく聴けよアンポンタン」

茅夏嬢の配下だろう若い男が歩み寄り、私の体を仰向けに倒し、首を絞めるように手を掛けてきた。このまま絞め殺されるのだろうか……そう思いながら、若い男を仰視する。今なら、この男をも呪い殺せそうな気がした。

若い男は私の首に何か……金属製の首輪のような物だろうか……を巻きつけ、カチリと音がなって首に締まった。ぴったりと喰い込み、少しばかり息苦しい思いをした。

「それはねえ、 爆弾だよ」

……爆弾。

何とも馴染みの薄い、現実味の無い言葉だ、と脳裏に思考がこびりつく。

何の音もしないし、息苦しさが無ければ付けてる事さえ忘れそうな軽さだ。……本当に、爆弾なのか。

全身に蟠る熱を発した痛みを感じつつ、私は顔を覗かせる茅夏嬢を、ただぼんやりと見つめていた。その、憎たらしい憎悪に充ち満ちた顔を。

「その爆弾、時限性なの。でも、いつ爆発するかは教えてあげない。あんたはいつ爆発するか、いつ死ぬか分からない時を過ごすの楽しいでしょ？ ねえ、楽しいでしょ！？ あと何時間、いや何十分？ 何秒？ 何も教えてあげない、あんたは自分が死ぬ瞬間を想像しながら、死ぬまでの時間を過ごすの！ 傑作だろ！？ あはははははは
！！」

……やっぱり、彼女は人間じゃない。人間じゃない、何かだ。どぐツ、と鳩尾を踏みつけられる感触を感じた後、私は意識を失った。

もう目覚める必要は無い。私は、約束を果たせなかった、愚か者だ。

済まない、オトさん。私も今、そちらへ向かうよ………

【宵討 伍】 茅夏

「茅夏ちなつ。転校が決まったで」

その日もいつもと同じだった。いつもと同じ家で、いつもと同じあいつに、いつもと同じ台詞セリフ。もう聴き飽きた、二度と聴きたくなかった台詞。

「……何で？ もう転校しないって言ったじゃねえかよ、おい！」
「バンツ！ と鞆カバンをテーブルに叩きつけて怒鳴りつけても、そいつは微動だにせず新聞を広げたまま、興味も無さそうに返答を寄越してきやがる。」

「せやかて、儂ワシにも都合が在るんや。おまえも分かっとなるやろが」「分かるかボケ！ てめえの都合にあたしを巻き込むなヤツ！」

吐き捨て、話にならんわと部屋を出て行くと、追従するように、お付きの鬼城おにぎが話しかけてくる。

「お嬢うら、頭を冷やしてください、頭かしらの言ってる事が分からない歳でも無いでしょう？」

「ざけんなアホが！ あいつが約束したんだぞ？ もう転校せえへんって、あいつが言ったんだぞ！？ あいつが破りさくつたんじゃねえかカスが！」

「お嬢！」
「付いて来んなボケが！」

ぱんつ、と障子を閉め、……大きなため息いきを零す。

これで何度目だ。「転校しない」 そう約束して学校に通った数は。あいつが「転校しない」と約束してそれを破った数は！

……あたしだって聴き分けの無い餓鬼ガキみたいな事を言うつもりは無い。どうせ、あたしが今、何を言ったところで転校は必然的に行われるだろうし、元の学校に戻るうにも恐らく既に居場所すゝは無くなっている。そういう事を平気でしゃがるんだ、あの屑クズは。

そう、あのバカは自分の都合であたしを転校させやがる。

どうせつまらない理由だ。抗争ドンパチが近くなつたから、安全のために学校を変える。それだけの事だ。あいつは自分の都合　自分の娘の安全のために、自分の娘の都合なんざ欠片カケラも考えねえで勝手に決めやがる。憎悪の塊みてえな野郎だ。本気でブチ殺したくなる。

そうやって何度も転校している内に、あたしはとある技術スキルを体得した。何でも無い、誰でも持てるようなチンケな技術だ。それは、

友達を短期間で作る術すべ。それを体得しなければ、あたしは友達ができないまま、再び転校する事になる。転校する事が分かつていても、あたしは友達が欲しかった。話し合える友人が必要だった。あたしの身分を知る友人は流石さすがに少なかつたが、何も聴かずに話し合える友人が欲しかったんだ。そのためには、短期間で作る必要が在る。時間を掛けて友情を築こうとしても、築き上げる前に転校に陥る事が多々在つたのだ。そんなの、嫌過ぎる。あたしはすぐに友達が欲しくて、会話の技術、馴れ合いの技術、色々学んで体得した。そして、環境がそうだったために、あたしはすぐに友達を作れる人間になつた。

友達が多い方がいい。多い方が力になる。そう、あたしは学んでいた。いつだつてそうだ。力が多い方に勝利が約束される。最たるモノで言えばイジメだろう。イジメは、多い方が勝ちなんだ。例えばの話、教室にヘンタイが一人しかいなかったら、そいつが苛いじめられるのは当然と言える。逆に、教室にヘンタイじゃない奴が一人しかいなかったら。その場合、ヘンタイではないのに孤立した一人がイジメの対象になるのだ。要は、数が多い方に天秤てんびんは傾く。強い弱いじゃない。多い少ない、それしかない。どれだけ強い人間が一人いても、一万人の弱者が集まれば勝てる訳が無いのだ。

あたしは誰にも負けたくない。特にあのクソバカ親父には。負けたいためには数がある。それも途轍とてつもない数が。あたしは友達を作る一方で、それを纏まとめるチーム……グループを生み出す事も進めていた。所詮しよせん世の中を動かしてるのは力……権力だろうが暴力だろうが同じ。『力』だ。『力』とは何か。強く巨大なモノ……

それは違う、単にそう見えるだけだ。実際の『力』とは弱いモノの集まった塊に過ぎない。ならば、やはり数は多い方がいい。力を示すには、まず数量だ。

あたしの頭の中では常にシミュレーションが行われていた。

あのバカを殺す段取りを。どうやったらあのバカ　もとい、あのバカ親父が擁する組を潰せるか、必死で考えた。そのためには、こちらもそれ相応の軍隊が要ると分かって、あたしはさっきも言ったように、友達の寄せ集め　軍隊　を作る事に精を出した。

それは夢だったんだ。あのバカはあたしをただ『自分の娘』としか見ていない。だから見返すために、あたしはあのバカの軍隊を潰す。そうして、　自分では認めたくないが、　あのバカに認めてもらいたかったんだと思う。何より、自分の力を。

そうして着々とあたし個人の軍隊は作られつつあり、あのバカと直接対決する日も近い、　そんな時期だった。

「……………は？」

あたしは思わず間抜けな表情を浮かべ、鬼城の顔を覗き込む。その顔に嘘や偽り、冗談のような類が見当たらない事を確認しつつ、もう一度問いかける。

「　　今、何言った？」

「……………頭が、亡くなりました」

冷淡な、いつもどおりの無表情で告げる鬼城の言葉には、何の現実味も含まれてなかった。まるでゲームの中の音声^{リプレイ}が告げてるみたいで、一瞬笑いが込み上げてきた。

あのクソボケ親父が、……………死んだ？

「……………どこで？」声が妙に強張っているのを自覚しながら言った。

「……………移動中に襲撃に遭ったそうです。襲撃犯は組の者がやりましたが、……………頭は、助かりませんでした」

悔しそうとか、苦々しいとか、そんな苦悶の表情も浮かべず、ただ淡々と告げる鬼城に、あたしは一瞬、こいつから初めて聴いた冗談がこれか？　と疑ってしまった。真面目腐った顔して何つーえげ

つない冗談吐くんだこいつは、と。

だが、鬼城はのつぺりとした顔のまま、先を続ける。

「鉄砲玉の始末は鮫川さめかわに一任しました。葬儀は明後日行いますから、その準備を……」

「待てよ。……本気で言つてやがんのか、おまえは？」

「……はい。それとお嬢。あなたには頭から遺言状が在りました」

「あたしに？」

素直に驚いた、
がすぐにそれも気分を害するものに代わつた。

遺言状の中身は、至つて単純シンプルだ。あたしに遺産の半分を明け渡す事、あたしに色んな面倒を掛けた事を詫びる事、そして、あたしに組を相続させる事！

殺意が芽生えた。既に亡き人間に、あたしは殺意を覚えずにいられなかった。

あの屑は、死んでまであたしに都合を押しつけるのか？ それが、どうしようもなく殺意を生じさせた。どこまであたしに迷惑を掛ければ気が済むんだ、あの屑は。あの屑は！ あの屑は ツツ！！

……だけど、あたしには断る権利なんて無かった。あたしが相続しなければ、組の連中は全員路頭に迷う。それは、嫌だった。幾らいくあのクソ親父の配下とは言え、あたしも何度と無く世話になつていく。そんな奴らを見放したくなかった。

結果 あたしは、組を継ぐ事を決意した。

それから一年、ひたすら組の継続のために尽力した。それはもう、戦争と言えた。争い事なんてする必要は無い、話し合いと誠意さえあれば何とでもなる。その事は、あの屑のお陰で確しっかりと学んでいる。余裕は無かったが、資金も何とか繰れるようになり、すぐに経営は保てるようになった。

そうして経つた日々を思っていたあの日、唐突にそれは見つかった。

あたしが部屋に戻つて泥のように眠りに就こうと布団を敷いてい

ると、それは落ちていた。

手紙。古めかしい便箋に認められたそれは、封を破ってみると、

あのクソ親父からの物だった。

訳が分からない。誰かの悪戯だろうか？ そう思いつつも、逸る

気持ちを抑えられずに中身を検めた。

中身は、単純にこう記されていた。

雪春 あたしの親父を殺した人物が、その日集まる七人の中

にいます。そして、その七人全員を殺し尽くした時、あたしを組の長として認める、と。

正直に言えば、興味は無かった。親父を殺した奴なんてどうでもいい、とさえその時は思っていた。だが、時間が経つに連れて気になる気持ちを抑えられなくなり、気づけば家を飛び出していた。

そして集まった四人の男女。

始めからいた棺藤詩樹文は、あの探偵事務所のおっさんだと気づいた。こんな奴が親父を殺せるはずが無い。すぐに無視を決め込み、次に現れる人物を待った。

そうして現れたのは、断花家の当主、断花士清。まさか、とは思

ったが、彼なら親父をやれなくもないだろうと推考した。断花の家系は剣術に秀でてると聞いた事がある。そして、忌まわしい噂に就いても。

次に現れたのが、逢魔キルトとかいう、目立つ要素とえば少し顔貌が整ってる位の女子高生。彼女が殺したとは考えられなかったが、少しずつ考えを改めていく事にした。この場に集まるのは、恐らく普通の面々じゃない。断花の時点でそういう考えに至っていた。最後に現れたのが、これまたあたしの知らない人物、狂木十式とかいう男。身形は目立つモノがあるけど、それ以外は何て事は無い、どこにでもいそうな……まあ、あんな雰囲気どこにでもいたら困るけど……そんな奴だ。

この四人の中に親父殺しの人間が？ ……とてもそうは思えなかったが、それでも数撃ちや当たる寸法で、帰宅した後すぐに鬼城に

四人の殺害を依頼しておいた。彼ならばこれ位の仕事、楽々こなせると踏んだのだが、結果その日の夜になっても芳しい結果は得られず、現在に至るまで誰一人として殺せなかった。

だが、鬼城は鬼城で旨い具合に働いてくれた。何より良かったのは、六人目を見つけてきてくれた事だ。何の手掛かりも無しに犯人を探すのは難しい。それを少しでも楽にしてくれた事は褒められる事だ。こればかりは鬼城に助けられた。

その鬼城も、たった今、死んだが。

「……はあ、誰かそいつどこかに捨てて来てよ。もう見たくも無いわ、そんな屑」

おっさん　棺藤が気を失ってる姿も見たくなくて、あたしは眼を背けて肩の骨を鳴らした。汗を掻いた。シャワーを浴びたい。浴びたらカクテルでも作って、思いつきり煙を吸って、泥のように眠りたい。そうして明日には鮫川と狗飼の仕事に就いて話を聴くでしょう。

そう思って歩き出すと、ガンツ、と衝撃が走り、一瞬前のめりに倒れそうになった。腹の辺りが熱く痛む。触ると、ぬるつとした感触と共に、赤い液体が付着した。

「……………何、これ」

「ごぼつ、と咳き込み、手を当てなくても口から粘っこい液体が飛び散ったのが分かった。血だった。

息遣いが急に荒くなって、視界も霞むような感じを覚えながら振り返ると、そこに化物の姿が在った。

「……………あなた、何で生きてんのよ……………」

「……………ひゅー、……………ひゅー、」

真っ赤に染まった体の少年は、拾った拳銃を無骨な手で掴み、銃口から硝煙を靡かせていた。動きは定まっておらず、フラフラと頭を揺らし、立っているのもやっとだと言わんばかりの状態で、あたしを見ていた。

あたしが撃たれた腹を押さえて吐き気を抑えていると、周りの組

員が悲鳴を上げながら発砲したのが聴こえてきた。化物少年の体が一瞬、傾ぐ。確実に撃たれたはずなのに、少年は倒れず、まだ立っ
たまま拳銃の銃口をこちらに向け続けていた。

「ひゅー、ひゅー、」と、喉から呼吸が漏れ出る音だけが、聴こえてくる。

怖い、とは思わなかった。あたしの理性も、本能でさえも、こう告げていた。 欲しい。あいつが、欲しい。

あの、死をも恐れない、いや、何にも縛られないあの男を、我が手に納めたい。

「……あんだ、あたしの仲間……いいえ、あたしのモノになりなさいよ」

手を差し伸べて、あたしは新品の玩具オモチャを見つけた顔で、呟つぶやいた。少年はしばらく黙り込んだままあたしを睨にらみ続け、銃弾で、

返答した。

胸に吸い込まれた銃弾は背中を抉えくり取り、吐き出される。思わず咽返むせるように喀血かっけつし、その場に蹲すくまったが、それでもあたしの欲求は変わらなかった。

あいつが欲しい。あの男が欲しい。アレが欲しい！

咽返りながら視線を上に向けると、そこには聳そびえるような影が立ち塞ふさがっていた。拳銃の銃口が、ゆっくりとあたしの額に据えられる。

「……ねえ、あんだ、あたしに」

「断る」

引鉄トリガーが絞られる音が聴こえて、

……親父に、認められ

意識が消

【侍邸 壱】 キルト

夜の濃厚な気配を感じつつ、走るでもなく事件現場から遠ざかっている、不意に何の意味も無く頷いた。すると、空振る音と共に何かの頭上を擦過した。咄嗟に身を低くして振り返ると、

小さな少女が踵を振り下ろして立っていた。

「……あんたも、参加者？」と短く疑問を口にしてみる。

「……」

少女は無言。私よりも小さいから、もしかしたら中学生かも知れない。顔立ちも幼いし、体つきもまだ幼稚だ。これで私よりも年上だったら笑ってしまいそうだ。実際は笑わないけれど。

少女から感じる気配は 殺気。私には人の気配を汲むとか読むとか、そんな芸当はこなせないが、それでも分かる程に、相手は私に敵意を懐いていた。それは表面的 瞳がぎらつくとか、額に青筋が走つてるとか、そんな様相ではなく、あくまで雰囲気だ。彼女は何か私を殺したがっている。それも問答無用で。

勿論、ここで殺されてもいいとは思わないし、殺されるつもりも無い。相手が敵ならば、私に害を為す敵だと言うのなら、それを屠る以外に手は無い。そもそも、私を狙うような連中にマトモな相手など期待する方が間違っている。恐らく殺さなければ殺される、そんな状況だ。殺す以外の手が残されているはずも無い。

特殊警棒を、構えるでもなくスカートに引っかけたまま指に触れさせ、そのまま動かずに少女と対峙する。温かそうなセーターにホットパンツ姿の少女も、私を見るだけで格闘術の構えなどは一切無い。無防備。見た目で判断するならそうだが、私にはとてもそうは思えない。あれは、構える必要が無いから構えていないのであって、戦うための準備は既に整っているのだと私は判断した。

「……逢魔、キルトさん。……だよ、ね？」

何の前触れも無く掛けられた声は、紛れも無く小さな少女からの

ものだった。

私は先刻も同じような質問をされたな、と思いつつ、返答に惑まどつた。

「……応える義理は、……無い」結果、いつもと同じ返答を寄越よこした。

「……あなたは、人を殺した事が……在りますか？」

また聴いた事のある質問だ。その時点で、私は何と無く相手の素性が分かった気がした。

敢あえて間を置き、質問に対する返答を遅らせた。

沈黙を与えると、少女は無表情のまま、ゆっくりと小さく口を動かす。

「……人違いだったら、……ごめんなさい。あなたを、殺します」

それからの動きは洗練されたモノだった。

流れるような足運びで接近し、小枝のように細い腕を振り被ると、少女はライフル弾のような拳を飛ばしてきた。私の肉体が反射的に動き、半歩跳び退すまり 特殊警棒で少女の腕を叩き折る！

が、特殊警棒は少女の小さな手のひらに驚掴わじつかみにされ、一切の動きが停止する。ピクリとも動かなかつた。まるで万力ばんりきに嵌はめられたように、微塵みじんも動かせなくなる。

動きが封じられた瞬間 少女の空いていた左手が拳を固めて、私の鳩尾みぞおちに

「ちと、待て」

ぎッ と、まるで鋼同士が衝突したような音が響き、

私の鳩尾には一切の痛覚だめーじが付加されなかつた。

視線を横にスライドすると、不意ふいに囁ささかれた澄んだ声の主

私よりも背の高い青年が立ち尽くしていた。よく見ると、彼は昨日……いや、既に一昨日か？……に逢あつた参加者の一人だと気づく。

断花士清たちばなこすぎ。今も着流しに草履ぞうりと、まるで花火祭りの時にでもいそうな格好だった。その手には、長物 日本刀が握り込まれ、そ

の刃先が私の鳩尾を守っていた。

日本刀の白刃が、少女の拳を完全に静止させていた。一見、断花士清が刀を持ち上げているだけのように見える体勢だったが、そこに付加された力はかなりのモノだと知れた。

「……邪魔、しないで……ほしい」少女が囁く声で抗議する。

「済まぬな、儂も此奴に用が在るのだ。貴様は退くが良い。今なら見逃してやっても良い」断花士清が尊大な声音で応じる。

「……邪魔する、なら……あなたも、殺す……よ？」

やけに機械的な瞳を断花に向けると、少女は特殊警棒を解放し、断花に向き直る。断花は日本刀を構えるでもなく、片手で握るに留め、尖端はアスファルトに据える状態で立ち尽くす。

「儂を殺めると吐かすか。……くっ、面白い。此の様な状況でなければ、貴様とも一戦交えたものを。……生憎、貴様と交える気は無いのだ、退け」

あくまで絶対的上位から物を申し立てるらしく、断花は偉そうな口振りで話している。その表情には余裕が満ち溢れ、まさかこの場で二対一の戦況になるとは思ってもみないのだろう。

私は何の前振りも無く特殊警棒を振り被り、断花の頭蓋を砕く

がッ、と。 「ふん、何の断りも無く得物を振り回すか。

まるで獣じゃの」

私の特殊警棒は、あっさりと刀で受け止められ、私は些か驚きを感じた。私には断花の刀の動きが見えなかった。いつの間にか特殊警棒の軌道上に出現し、進行を妨害した……そんな状態だった。とにかく速い。

彼が本気で戦ったら、私はその時、彼に勝てるのだろうか……。不安が心に影を落とす。

特殊警棒を振り払い、断花は刀を抜き身にしたまま、私に視線を投じてきた。

「時にキルトとやら。貴様、六人目の参加者を知りたくは無いか？」

「……六人目？」

六人目は既に知ってる。識沢智だ。七人目も分かっている。柊坂流天。それを踏まえた上での六人目ならばそれは 最後の参加者になる。

けど、私が知ってる人物と同じならば、そのカウントは無しだ。

私は特に興味を覚えるでもなく、断花を見据える。

「……六人目は知ってる」

「ほう？ 為らば其奴は七人目じゃ。儂の存ずる参加者は、儂以外の参加者が知り得ぬ御方での、貴様も知る筈が無い」

「……どうしてそう言いきれなの？」疑問点を率直に尋ねる。

「言った儘じゃ。儂しか知り得ぬ人物だからじゃ。……其処で今一度問う。六人目を知りたくは無いか？」

……もし仮に彼の言葉が正しいとすれば、私は最後の参加者を見つけた事になる。それはゲームの全体像を掴むという事に繋がる。全員の名前と顔さえ分かれば、後は何とかかなりそうな気がする。

畏かも知れない、という考えが無い訳じゃない。ただ、私はとても運が良い。簡単に殺される訳が無いと、私は断言できるのだ。それを踏まえるならば……彼の話に乗っても、何ら問題は無い。

私は素直に頷く。断花は、くつ、と短く笑むと、刀を納めた。ちんつ、と鏢と鞘が搗ち合う音がして、白刃が鞘に納まる。

「貴様を我が家に招じ入れようではないか、逢魔キルト。何、そう歩かせはせぬよ。直ぐ其処だ。 そうと決まれば、往くぞ」

「……あいつはどうするの？」

私は戦る気満々の少女を顎で示す。少女は我慢できなくなったのか、断花に踊りかかり

「影虎。後は任せる」

呪文のように断花が唱えると、 私は一瞬、寒気を覚えた。

少女の背後に、人の影が刹那的に出現したように見えたのだ。

少女もその気配を察したのか、即座に振り返って裏拳をかます。

背後の人影はそれをあっさりと受け止め、手首を掴み返すと、その

まま後ろ手に少女を拘束した。その時にはもう一方の手が短刀のよ
うな物を握り締め、少女の首筋に当てた状態で静止し、完璧に少女
の動きを封じていた。

断花はそれを眺めるでもなく歩き出し、既に背後に興味は無いと
言わんばかりに颯爽と移動を始める。

「早う付いて参れ、キルト。其奴は影虎に任せておけば良い。……
影虎、遅くなるなよ」

「御意」

影虎と呼ばれた人影　どうやら女　は端的に返答すると、少
女の腕を一切の容赦も無く　外した。ぼきん、とやけに乾いた音
が響いて、直後に短い悲鳴が漏れたのも、私は聴き取っていた。少
女が苦しげに俯き、引き締めた唇の間から荒々しい呼気を吐き出し
ている。

「　キルト。早くせぬか、置いて往くぞ」

「……」

別に置いていかれても構わなかったけれど、仕方なく断花の後を
渋々と追う。背中に殺意の混じった視線を浴びたけれど、角を曲が
るとそれを感じなくなつた。

【侍邸 貳】 キルト

《断花》と表札が出ていた。でかい門の上の方に。

中に入ると更にその敷地が巨大なものだと知れる。視界が霞むほど先に屋敷を囲む塀が見える規模だ。こんな大きな屋敷に入ったのは初めてだ。地面もアスファルトではなく、石造り。道を逸れると砂利が敷き詰められている。屋敷までの道程には石灯籠の姿も見受けられ、相当の金持ちの家だと分かった。敷地だけでちよつとした大学ほどの広さが設けられている。

石造りの道を進むと、どっしりと構えている平屋建ての屋敷のお目見えだ。その規模も無駄にでかい。視界に納まりきらない程の広さを有したその屋敷は、恐らく部屋数だけで二桁を軽く越えるだろう事は予測済みだった。中には二十畳前後の部屋も在るだろうし。

灯の入った石灯籠を抜けると、庭園　そこには小規模だが池も備わっている。月夜が水面に映り、幻想的な風景が広がっていた。雲間に覗く月が、屋敷の中を照らし出す。

「此方だ、付いて参れ」
少し離れた所で断花が呼ぶ声が聴こえ、私は意識をそちらに向け直す。こんな無駄に広い住居の何がいいんだろう、と思ったが、そんな事を口にするほど野暮ではない。

屋敷の中も当然広かった。玄関はまるで旅館のような広さを有していたのだが、その割には履物の数が極端に少なかった。在るのは断花の物と思しき草履のみ。客用の物というか、他に一切の履物が無いのには驚きを隠せなかった。あいつは雨の日も雪の日も草履なのか。

ローファーを脱いで廊下に行くと、一片の曇りも無い木目調の廊下は、どれだけ力強く踏み締めても軋みの一つも上げなかった。磨き上げられた廊下は明かりの無い状態にも拘らず、輝いているように映る。油断すると滑りそうな程だ。

廊下を抜け、右側が庭に通じる場所に出る。左側は壁ではなく障子で仕切られていた。その通路に出た瞬間、私は異様な気配を感じた。寒気……とは違う、怖気とでも言うべき感情が皮膚を駆け抜け、背中に冷たい棒をブチ込まれたような感覚を味わう。視線を庭に向け、その正体に気づいた。

女。

格好はドレス……基は純白だったろう、丈の長いドレスは、赤い斑模様まだらが描かれていた。背格好から私と同年代程だと知れる。とてもまるで人形のように静謐せいひつな穏やかさを備えた微笑を浮かべたまま、立ち尽くしていた。惨状の真只中で。

「……彼女こそ、儂わしが仕える姫であり、主でもあり、王でもある、月不見輝夜つきみす かくや。戯たわけが吐ぬかした遊戯の六人目の参加者じゃ」隣で感慨深げに呟つぶやく断花の声が聴こえ、私は我に返る。

庭には彼女以外の生きた人間の姿は無かった。皆が一様に平伏し、まるで彼女を崇あがめ奉たてまつっているかの如ごとく、頭こゝろを垂たれていた。……中には頭が千切り取られている凄惨な状態の死体モリも見受けられたが、共通しているのは全員が等しく事切れている事だろうか。

動くものが無い静止画のような光景に、皓々こうこうと降り注ぐ月光を浴びた鮮血の姫はパズルのピースのように力チリと当て嵌はまる。これ程までに完成された画えを、私は今まで一度として見た事が無い。それ程までに究極的に 虚無。そしてあまりに異常な画の癖に、その異常性が分からなくなる程、確かにそれは 美しかった。

「……………」

姫と、眼が合う。

刹那、私は『死』を容易に連想した。

殺されるはずが無い私が、彼女の前ではあまりに 無力 だと、気づかされた。

それはこのあまりに異常な光景を目の当たりにしたから、ではない。彼女の本質 彼女がそこにいる恐怖に、私は直面したんだ。勝てる、とか倒せる、とかそんな次元レベルじゃない。彼女は、私の上に

いる

「まあ座れ。眼を潰したくあるまい、あまり彼女を凝視するな。…少し、話をせぬか」

廊下の縁へりに立膝を突いて座る断花を見て、私も彼女から視線を逸らしてその場に腰を下ろす。

……だが、どうしても視界にあの異常な光景が喰い込んでくる。

……まるで、月が笑ってるみたいだ、と感想を懐いだいた。

「主ぬしは、何故なにゆえ此の遊戯に携たづなわっておる？」

断花が世間話でもするかのような気楽さで話しかけてきたけど、私はそれに対して素直に応えるほど間は抜けていないつもりだ。

「……教えるつもりは無いけど」特に感慨も無く返す。

「くっ」と短い笑声が聴こえ、「……まあ良い。だが、貴様が此の遊戯で勝ち残ったとして、貴様に何か得る物は在るのか？」

……得る物？ そんな物、在る訳が無い。私は別に何かを得たいがために人を殺している訳じゃないし、このゲームに参加した訳でもない。このゲームの参加の有無自体、私の意志あすかの与り知らぬ所で行われていた事だし、私自身このゲームに何の興味も湧かない。なら何故、このゲームの参加者として動いているのか。……私だつて一人の人間だ、簡単に殺されたいなどとは思わないし、殺されてやるつもりも毛頭無い。ならば、残された道は唯一ただつだけだ。

ゲーム参加者を全員殺害し、優勝して生き残るしかない。

そこで唐突にその事実気づいた。得る物、在るじゃないか。

「……命、かな」

自分の口から呟つぶやかれた言葉を噛み締めて、頷うなづく。

このゲームに参加している時点で、私の命は危うい状態にある。だが、勝ち残れば……全員を殺害して生き残れば、取り敢えず当面の命の安全は保障される気がする。……まあ、割に合わないと言えはそれまでだけ。

だけど、敵を殺し尽くさなければ生存は確保されない。それだけは確かだと思う。

生き残るために人を殺し、ゲームにも勝ち残る。私にとって、殺人とはその程度の事ではないし、人生もまた然りだと思っ。

「ほう……命、とな。……くっ、稚拙ながらも考えたのう」

何が面白いのか、……てか笑われるような事言ったかな？……断花が何故か陰鬱な笑声を漏らし始める。……本当に、何が面白いのかサツパリ分からない。私はマジメに応えたつもりなだけ。

すぐに笑声が途切れると、断花が庭に佇む血塗られた姫を眺めて言葉を紡いだ。

「……貴様にも、譲れぬ何かがある、という事にしておくれ。……儂にも、貴様と同じではないが、譲れぬ未来がある」

「……」口を挟む気も湧かず、その横顔から視線を逸らし、姫に視線を向ける。

「……ちと、話を変えるぞ。……我が断花の屋敷には、代々此岸に在らざる『モノ』を受け継ぐという家法が在つての。儂も先代から継承した。其れは 其奴は、存外恐ろしい『モノ』で、正に伝承で聴き及ぶ『化物』と似ておるのだ」

この時点で、私はその『モノ』というのが何なのか、大体想像が付いてしまった。

「……ただ……したら何か喰い違ふ。話を聴くに、その『モノ』は代々継承されてきた……ならば、もし仮にその『モノ』が人間だとしたら、相当な歳になる。だけど、私が見ているその『モノ』はどう鯖を讀んでも二十代にしか見えない。……若作りもここまできたら天才の域じゃないだろうか。」

私の疑問をどう思つたのか知らないが、断花は口許に歪んだ笑みを刷くと、一度区切つた話を朗々と再開した。

「貴様も既に分かつておるだろうが、その『化物』こそ 姫、月不見輝夜殿だ」

「……その話、おかしいんじゃない？ あいつ、どう見ても歳……」「ふっ、儂も初見の時は同じ想念を懐いたものじゃ。……姫は歳を喰わぬのだ。何時生まれたのか、先代ですら分からぬ事じゃった。」

分かる範囲でならば、姫は彼此五十年近くはあの姿の儘じゃ。儂の
与り知らぬ時代の絵巻にも、姫の画が載っておるが、見るか？」
「……遠慮しとく」

本当に、今の話が真実だとすれば……彼女は、真正の化物だ。
これ以上無いって位、人間離れ、常識離れた存在になる。

あの姿のまま何十年、下手すれば何百年と生きてきた……だとす
れば、一体どんな力を内包してるのか。知りたいと思う反面、恐怖
に近い感情を懐かずにいられなかった。

僅かに燦る恐怖心を見透かすように、断花が話を再び紡ぎ出した。
「何も、不老の力だけが姫を『化物』と定義する訳ではない。姫は
あの場を見れば分かると思うが、強大な……其れも、儂如き
ではとても太刀打ちできぬ、国を、下手すれば世界をも滅ぼす力を
持ち合わせておる」

「……だったら、何もしなくても優勝はあの人なんじゃないの？」
確かに、私だって生き残りたい。誰かに殺されてやるつもりなん
て毛頭無い。……だけど、あんな化物が参加してるのに、勝ち残る
うなんて思う事自体浅はかな想いだと、私でも分かる。

人間は傲慢だ。全てに勝負を挑み、全ての勝利を納めたいと思う
浅慮極まりない生き物だ。だけど、そんな愚かな人間でも勝てない
モノは確かに存在する。例えばそれは自然であったり、欲望だった
り、限界だったりする。何れにしても、何度も勝負を挑んでは完敗
を喫し、苦渋を飲んでも再び挑みかかる……何をしても、どんなに
努力しても、どれだけ失敗を繰り返しても、絶対に敵わない存在は、
確かに存在する。それを理解しても尚、愚かな人間は何度だってそ
の過ちを繰り返す。

あの化物は、『人間が絶対に敵わないモノ』の一つだと思う。私
の運がどれだけ良かろうと、彼女には潰される……それが、何と無
く分かった。……だけど、

私は、殺されるためにここまで来たんじゃない。

「貴様もそう思うだろう？ 儂とて、戒めさえなければ、姫の勝利

は揺るぎ無いと確信しておるのだ」

「戒め？」 私は耳聡く気になった単語を復唱してみる。

断花は小さく首肯し、「姫には、眼に見えぬ戒めが掛けられておる。縛魂 という単語を耳に挟んだ事は無いか？ 姫の 縛魂

は不老の力と、世界を滅ぼすだけの力を得るが故に、制約として此の屋敷から一步も外には出られぬ体になっておる」

……そんな 縛魂 も在るんだ、と少し驚く私。私の 縛魂 は運が良くなるだけだけど、彼女の 縛魂 は強大過ぎるためだろうか、制約なんてモノが生じるなんて…… だけど、その制約が霞む程の力を彼女は有している。制約なんて在って無いようなモンじゃないだろうか。

そう思っていると、断花は小さく首を振って否定した。

「此処から一切出られぬと言うのは、酷じゃぞ。儂は、姫に外を知って貰いたいのだ。其の為に、此の遊戯に付き合つ事に決めたのだ」

……何と無く、先が読めてきた。つまり、何だ。断花が優勝すると？

「儂は此の遊戯、勝ち残る心算は無い。儂ではなく、姫が勝ち抜くからのう。姫が優勝した暁には、制約である 縛魂 は修正され、あの力を以てこの屋敷から出られる様になる」

【侍邸 参】 キルト

「……化物を世に放ちたいのか、あんたは」

とんだクソヤロウだ、と吐き捨ててやる。何のためにそんな事をする必要が在る？ 世界を混乱に陥れるため？ それとも、この世界に何か怨みでも在るのか？ 野獣を檻おりから出すなんて、普通に考えて愚者のする事だ。いい加減、こんな屋敷おくにいと気が触れたのか。

だが、断花たちばなは逆に「何が可笑おかしい？」と不満気に見つめ返してきた。

「僕は姫わじに外を見て貰もらいたいただけじゃ。何も、世界を滅ぼしたい等と思っておる訳ではないわ」

「あんたが言ってるのは途中経過だけだ。結果を考える。あんたが望まなくても、あの姫はいつか世界を滅ぼす。それを解き放つんだ、当然あんたに責任が在るはずだろ」

断花が再び短い笑声を零こぼしたかと思うと、その視線は庭先の姫君に注がれていた。

「世界が滅びる？ ……其れが何だと言うのだ？」

「何？」

「僕に責任が宿る？ ……構わぬよ、好きに言えば良からう。僕とて望んで世界を滅ぼす気は無いがの、姫が滅ぼしたいと願うならば、僕は其れに従まてう迄だ。姫が勝ち抜きたいと願うならば、僕は進んで身を折しんる心算じゃよ」

……腐くってる。どんなサラリーマンでも、上司の命で首を吊ったりはしないだろう？ それをこの侍被さむかぬれは、何の疑問も感ずる事無く、上の命令で切腹ハラキリさえ厭いとわないと言い張はる。そんなの、ただの機械人形ボットだ。人間とはとても言えない。主人の命令に忠実なのは良いが、主人の過ちに気づけない部下はただの駒こまに過ぎない。いつか自分の身を滅ぼすと知りつつも仕えるのは、ただ愚かなだけだ。

何の価値も無い。

彼はただ仕えてるだけだ。そこには何の疑念も懷疑かいぎも無い。ただひたすらに忠実な 駒。いつ捨てられてもおかしくない、ただの駒。

そんなのに、一体何の価値が在るんだ。

「……バカじゃないの？ あんた、それでも人間？」

「人には理解出来ぬもの一つや二つ在るものじゃないかの？ 其れとも、貴様は儂以外の者共の考えておる事が全て分かるか？

分かるまい。なのに、儂だけに疑念を懐くのは余りに無意味じやろう？ 儂とて、貴様に解される程、下賤げせんな思想は持ち合わせておらぬのでな」

……分かったのは、彼をこのゲームで生き残らせてはならない事だ。彼が生き残れば、最終的に彼と姫の二人になれば、自然の流れで彼は自害を選ぶだろうし、その後待つのは……この世の終焉エンド。

私は別にこの世に何か未練が在る訳じゃないし、守りたい何かがある訳でもない。それでも、私は自分の生存を譲れないし、私の意志はこいつの願望をブツ潰す事に決まった。これから私のする事は、全力でこの阿呆を殺す事で、全力でこのゲームに生き残る事に尽きる。

「……あんたは、生かしておけない。……ここで殺してやるよ」

「くっ、……其の意気だ、キルト。だが、儂と殺し合う前に一つ約束しろ」

「イヤだ」即答してやる。

「儂は何も、貴様を即座に殺そうと言うのではない。只、真剣に殺し合いたいのだ。儂の望みは、貴様等参加者と真剣に殺し合う事に尽きる。……だが、此処で貴様を葬った所で、遊戯として参加者が一人落伍おちくするに過ぎぬ。其れでは面白味に欠ける。其処で、だ。貴様が儂に平伏した時、貴様が知る参加者全員の名を一切漏らさず述べよ」

……それで私は役を終え、遠慮無く殺して、他の参加者を葬り去

りに赴く訳か。

腐った野郎だ。どこまで性根が腐ってるのか、気にもならないが吐き気がする。

「……話すつもりは無い。……あんたはここで殺してやるって言っただろ」

「くつ。……そうか、然らば致し方在るまい。　　捻じ伏せてでも聴かせて貰おうか」

悠然と立ち上がり、惨状と化している庭へと歩み出る断花。私は背中から特殊警棒を抜き放ち、その背中を追い駆けるでもなく、追う。履物は敷石に在った草履を突っかける。

月光が眩しい。雲に隠れたり出たりしてる内に、時間帯が分からなくなってきた。深夜なのは分かるけど、時間の感覚はとっくの昔に断絶していた。

「……私は、殺し合いは得意じゃない」
ポツリと本音を零しても、現実が変わらない事くらい知っていた。一応、それだけは言っておこうと思ったのだ。

断花はそれを聴いてどう思ったのか、顎を摩るだけで振り返りもしない。

「だが、貴様からは濃い『死』の匂いをするのう」

「……人は殺すよ。でも、殺人と殺し合いは別物。私が得意なのは殺人であって殺し合いじゃない」

「殺しも殺し合いも同じじゃろうて。相手を真剣に殺し尽くす事に変わりないじゃろ」

……物は言いようだ。だが、私はそうは思わない。『殺人』は一方的な殺しで、『殺し合い』は両者が殺しを行う、言わば『勝負』だ。別に勝負に勝てないと言いたい訳じゃないけど、私は勝負事はあまり好きじゃない。自分が負ける事が無い事を知ってる事も在るけど、何より有利な条件が少ない。

殺人ならば一方的に相手を殺すため、そこには絶対的に有利な立場が殺戮者に宿る。安全な場所から相手を殺す……だからこそ、私

は殺人を行うんだ。何も、自分の命の危険を冒してまで相手と殺し合いたいとは思わない。その違いを、断花は理解していない。

……いや、理解しているんだ、彼は。それでもその事を気にしないのは、彼が『殺人』ではなく『殺し合い』に執着しているが故に違いない。

庭の大体真ん中に差し掛かった所で、断花が立ち止まる。私の足も自然と静かになり、振り返った断花を見据える。

「姫には立会人になって貰いたいのだが、如何なものか？」

「……どうでもいい。何度も言うけど、あんたを殺す事には変わり無いんだ」

「其の心意気や良し。……では、何時でも掛かって来るが良い」

余裕綽々の断花を見つめて、私は一瞬だけ思考する。

あいつに正面切って殴りかかって勝てるか否か。……バカじゃあるまいし、そんな事であるのバカから一本取れるとは思えない。でも、それはあくまで普通の人間の考えだ。私は違う。私には幸運の女神が見守ってくれている。

一步踏み出し、それを弾みにして断花へと駆ける　肉薄する。

その瞬間、私は咄嗟に特殊警棒を振るっていた。何の前触れも無い、距離も届いていないのに、私は何故か自然とそんな動きをしていた。刹那、重たい衝撃が特殊警棒から伝わり、鋼同士が搗ち合う音が響き、私の腕が跳ね上がる。

視界に映るのは、断花の刀が私の眼前を振り抜かれていく様だった。

「ほう。儂の初撃を見切るとはの。……些か侮っておったよ
うじゃ」

始めは軽い驚き、そして次の瞬間には満足気な邪悪な笑みを顔面に刷くと、断花は更に踏み込んでくる。私の腕が勝手に動いて変な場所に向かって特殊警棒を振り下ろす。

次の瞬間には計ったように断花の日本刀が打ち込まれ、私は咄嗟に受け流す形で特殊警棒を用い、斬撃を遮る。相手の一撃が重過ぎ

るため、私の腕は負荷を感じて更に跳ね飛ばされる。

一撃、二撃、三撃……素早く的確な斬撃に、私は受け流す以外の対応が取れない。尤も、私が断花の動きに付いていけない事が逆に不思議だった。率直に言つと、相手の動きは私に見切られる次元じゃなかった。全く軌道が読めないのです、私のがむしやりに特殊警棒を振るい、運良く振るつた場所に断花の斬撃が振り抜かれるだけなのだ。何回、何十回受け流したか分からなくなる頃、私の手は痺れて使い物にならなくなる寸前にまで追い込まれていた。

数歩後ずさつて息を整えようとしたが、断花の白刃は間断の休憩すら許さず、斬撃を容赦無く打ち込んでくる。私は再び、今度は特殊警棒を両手で握り締めて、白刃を流すではなく、受け止める。

鋼が打ち据えられる音が弾ける。

「……くくつ、中々の腕ではないか、キルト？ 此れは、後回しにすべきだったかのう」
罅迫り合いになった状態で、断花が口の端に歪んだ笑みを浮かべて言葉を吐きつける。

……正直、勝てる気がしない。いつもなら、もつと余裕が在るんだ。私は常に有利な立場に立った状態で、得物を振り下ろす。相手は抵抗しても抵抗にならない程度の抵抗しかできず、私に沈められる。それで終わりなんだ。……どんな相手でも、そうだったのに、こいつは　まるで違う。

そう、まるで余裕が無い。どんなに苦戦を強いられても、どれだけ逆境でも、私にはそれを克服するだけの縛魂が宿っているはずなんだ。だからこそ、いつだって余裕を持って戦えたいし、今まで生き残ってきたんだ。

何かがおかしい。この男、まさか流天のような特異な縛魂を懐いてるんじゃないか……

私の疑惑の眼差しを感じ取ったのか、断花が更に凶悪な笑みを貼りつける。

「儂に此処まで付いて来れる者は久方振りでの、幾分か良い気持ちじゃ。……どれ、そろそろ本気でも出してやるうではないか」

まだ、本気じゃなかったのか。

私は一瞬背筋が凍るような悪寒を覚え、血の気が引くのを感じた。不味い。こいつ、私の縛魂が通じない。恐らく、私の『運が良い』縛魂は、こう作用するんだと思う。『運良く、楽に死ねる』……そんなの、認める訳にはいかない。何とかして奴を倒し、……不可能だとは思いつつも、視界に映るあの『化物』も葬る。それで、この屋敷からは脱出するんだ。

ぎッ

と、断花が刀身を弾いて私との距離を無理矢理作る。

私は数歩後退り、体勢を立て直し

異常に気づいた。断花が眼を閉じて黙想している。その、あまりにも静謐な静寂に、私は怖気を感じずにいられなかった。あまりに静か、あまりに清らか、あまりに強か。

その瞳が

黄金色の瞳が、開眼する。

「たがはず 籬外し ……！」

断花が何事か呟き、私は咄嗟に身構え 赤い飛沫が、眼前で

散った。

「……………え？」

どばッ、と鮮血が飛散し、私の視界を紅く彩る。刹那過ぎて、思考が追いつかない。視界は徐々に狭まり、足に力が入らなくなつてふらつき、やがては蹲る。

左肩から右脇腹に掛けて灼熱する激痛が走り、ようやく斬られた事を悟った。……頭が熱い。なのに、体は急激に冷えていく……流れていく血が、妙に現実的で、妙に生温かった。

「……………くっ、流石に儂の 籬外し には追い付けなんだか。……まあ良い。貴様には未だ為す事があるう？ 逝く前に存分に吐けい」

断花の顔が近接したのを見て、私は朦朧とする意識の中、そのムサイ顔に唾を吐きかけてやった。断花の頬に着弾した唾は、どろりと垂れ、ムサイが割と整った精悍な顔を汚す。

顔面に蹴りを喰らわされた。その後、陰鬱いんうつな笑声。

「くくつ、益々ますます、女子おなごである事が惜しいの、キルト。其の意気こそ
儂おほろけが求めたモノじゃ。殺めるのが実に惜しいわ。……影虎かげとら」

臆おほろけ気な視界に、あの影の薄い女が出現する。本当に影みたいな女
だな、とつくづく思う。

「此奴を連れて行けい。後で篤とくと話を聴かせて貰う事にする。丁重
に持て成せよ」

「御意」

……どうするつもりだろう。

それより気になるのは……大丈夫かな、あいつ。こんな傷もらっ
て。

意識が混濁し、それから先の事は断絶される

【夢 参】 流天

……その日は確か、雨が降っていたんだ。

俺は何かを見下ろしている。本当は大事なモノを、まるでゴミのようにな、見下していた。

静かな……とても静かな夜。辺りには音なんて無くて、壁に掛かった時計が針を動かす些細な音だけが世界を制しているようで、どうしようもなく気分が良かった。

俺はその時、泣いているみたいだった。視界がグチャグチャで、世界の全てが歪んでいた。時計の針の音を覆い尽くすように、高鳴る鼓動が煩い。それも、少しずつ納まっていくのが分かる。同時に、俺は自分がやった事を少しずつ理解していく。それが怖くて、俺は涙を拭いてもせずに、ただ現実を見下ろしている。

赤い物体が横たわっていた。動く気配は無い。生き物じゃないらしい。ただ、赤くて醜悪な物体。……吐き気すら覚えそうな光景なのに、俺がその時感じた感情は 達成感。やっと成し遂げたとある種の高揚感を伴って、その光景を見下ろしている。

……どうして、わたしだけ？

不意に生じる心の歪み。俺は認めたくないのに、認めざるを得ない現実を突きつけられ、少しずつ壊れていく。

どうして俺がこんな事をしなけりゃいけないかったんだ？ ……そう、嘆いていた。どうしようもなく、嫌というほど泣きながら、俺は嘆いていた。どうして俺だけがこんな目に。

「……ふふ」

笑声の許を知りながら、俺はそこには視線を向けない。ただその場で泣きじゃくり、嗚咽を漏らし、立ち尽くす。

「おまえは本当に、 運が良い」

……運が、良い？

俺はその言葉を反芻し、声の主によく視線を向ける。男。お

父さんよりもまだ若い、青年と呼べる年頃の男。そいつが、柔らかな微笑を湛えて、俺を見据えている。

「そつだ。おまえ程、運が良い奴も、そうはいまい」

……運なんて、良くないよ。もう……こんなの、イヤ……っ。

「自覚しろ。おまえは運が良い。運が良いからこそ、親を殺せて尚罪を咎められない。俺がこの場に居合わせた時点で、おまえは最大級の強運の持ち主だ」

……違う。わたし、そんなの、そんな運なんて持ってない……！

「認めないのか？ ……直に分かるはずだ、自分が極上の運勢の持ち主だという事に。ここで終わりたくないのなら、俺に付いて来い。生きる術を教えてやる」

……俺は、正直こいつに付いていきたいとは思わなかった。だが、俺はどこかで理解していた。俺は、運が良い。俺が生きている時点で、その根拠は立証される。

肉親に黽られ、隣人に犯され、他人に詰られ……それでも俺は生きている。俺は、運が良いから今も生きている。それだけの現実を乗り越えてきたからこそ、俺はその事実を認められる。俺は、運が良いんだ。

横たわる親の死体を見ても、最早感情は湧かない。これは、俺の性能を気づかせるために用意された配役でしかなかったんだ。俺は、これからようやく生き始める。今までは、生き始めるための試練だったんだ。それを乗り切れた俺は、どうしようもなく運が良かった、それだけに過ぎない。

俺は男の後を追い、現実から去りゆく。俺はきつともう、正常には戻れないと知りながら
ぐじゅ。

視界が真っ赤。胸が灼熱して痛い痛い痛い ツツ！

「 がッ！」

強烈な目覚ましだが胸で掻き鳴らされて、俺は一切の余韻も残さず

に覚醒した。

痛い！ 胸がいたたたたいいいいい！

「つづつ、なん、だッ、これ……！」

まだ視界は夜闇に閉ざされ、ほとんど視野が利かない状態だったが、それでも激痛は留まってくれる気配皆無。何だ何だ何だッ！？ 起き上がり、胸に指を這わせる。……何だか生温い感触が在り、同時に灼けるような痺れが全身を駆け巡る。

「……ッッ！」

いつの間にか誰かに傷を負わされたんだと、俺の弱い思考がようやく終着点に至る。

くっそ、誰だよ何の断りも無く袈裟懸けにしやがる阿呆は……！
しかも寝込みを襲ったア良い度胸だコノヤロウ！

ただ、闇夜には動体が一切見当たらず、月が見下ろす世界には、
血塗られた惨状しか映らない。

……少しずつ記憶が蘇ってくる。そうだ、俺は確か……参加者の
一人、飛島茅夏を殺ったんだ。そこから記憶を辿ると

「たっ、助けてくれエエエエ！」

「化物ッ、バケモンだアアアア！」

「ひッ、ひぎゃあああああ！」

最早戦場と呼べる状況じゃなくなったのは憶えてる。俺がそうしたんだ。俺が 不死 だって事を口外されたら困る。非常に困るので 当事者全員、死人に口無しになってもらう事に決定した。

その時には、既に意識なんて在って無いようなモンだった。ただ殺した。殺せるだけ殺した。映るモノ全て 殺し尽くした。逃げ惑おうが、咽び泣こうが、一切構わず、一人残さず屠殺した。誰も逃がす事なんてできない、誰も生かす事なんてできない、誰にも知られる訳にはいかなかった。ただひたすら拳銃を振るい、短機関銃を薙ぎ、短刀を切りつけた感覚は、夢心地で憶えている。あやふやな記憶のツケが今、実際問題として現状に君臨していた。

「あー……これ、全部俺の仕業か」

生存者ゼロ。いたとしても重傷者に違いない。……コレを、俺が。……思わず目眩めまいがしそうになったが、何とか踏み止まる。

ズキリ。

胸きしが軋こむ。

「ツツつってーよ、じゃあ何だコリヤ!? ここにはゾンビでもいんのか、おあ!？」

生きてる者が一人もいねえ墓場で、何で俺はこんな綺麗に袈裟懸けされてんだよ!? 訳が分からない はずだったが、不意に思考ごうが閃ひらいた。

あのバカ。どつかでへマしやがったな。

憎しみの対象である可愛い女の顔を思い出して、思わず反吐げんが出そうになる。くそ、何だこの運命共同体っぷりは。あいつがへマする度に、俺は謂いわれの無い激痛さいなに苛こまれるって酷ひど過ぎねエか、おい。

立ち上がり、ふらつきながら夜の墓場を移動する。呻うめき声が聴こえないのは、完全に昇天してしまった証か、或あるいは俺を恐れて息を潜ひそめてるのか。どっちにしろ、今の俺には確かめようの無い事だった。俺の意識は完全にあのクソアマに注がれていたからだ。

さつさと屋敷を出ようとして 自分に視線を下ろす。……あり得ない。確か昼にも全身血塗まみれになったけど、ここまで酷ひどくは無かった。何だコレ、最早服じゃねエじゃん。ただの布切れだ、しかも赤黒い箇所しかないって酷ひど過ぎだろ。こういう色の服ですって言っても通じそうなほど染まってやがる。極彩色もここまでくるとカツコいいかも知れない。

誰もいないであろう屋敷に忍び込み、箆タン筒スを物色する。流石日本家屋、衣類は着物しかない、ってんな訳在るか! どんな家だここは!? 本気で着物しかないのか? ……仕方なく、着流しを一着手に取り、適当に着替えて外へ出る。靴は流石に使えるけど……探しても多分、草履ぞうりか下駄ぞうりしかないと思う。凄い家だここは。絶対に住みたくない。

これからする事を考えると得物が必要だと思い、屋敷を物色して

みた。あらビツクリ、拳銃とか短刀とか色々な違法物がオンパレード的に出てきた。取り敢えず使えそうな拳銃二挺に、短刀を一振り腰に差しておく。これ以上欲張ると碌な眼を見ない気がしたのだ。着流しに着替える時に傷を見たけど、……綺麗な傷だ、と惚れ惚れした。もう少し切れ込みが深かったら、確実に死んでた。辛うじて薄皮一枚何とか避けた感が在るけど……どうにも間一髪的な感じがして仕方ない。痛みは動いてる内に和らいできたけど、決してキルトが死に掛けているんじゃないと信じたい。取り敢えず俺は死にたくない。

包帯を巻くとサラシのような姿になった。別に誰かに見られる訳じゃないから、その上に着流しを羽織って外へ出る。深夜も丑三つ時に差し掛かった頃だろう、濃い夜の匂いが漂い、辺りには闇が跋扈していた。

屋敷を出て、さてどこへ向かおうかと思つた矢先、

「断花屋敷へ行け」

「ッッ」

飛鳥家の門に、男が背を預けて立っているのが眼に入った。夜でも目立つ白衣の男。雰囲気は、どこかキルトに似ている気がした。

「……誰だ、あんた」訝しげに問を取り、声を掛けてみる。

「……進行役 に興味は無い。おまえの目的は、全員の殺戮だろう」

白衣の男は低く澄んだ声で呟く。聴こえない訳じゃない、聴き取り難い訳じゃないのに、俺は何を言ってるのか分からなくて聴き返してしまう。

「何言つてんだ、おまえは？」

「極運持 逢魔殺人なら断花の屋敷に向かった。……あそこには今、参加者が屯している。狙うなら今だぞ、進行役」

……参加者とか逢魔キルトって単語が出てきた時点で、こいつがゲームの参加者だという事は明白だ。だが、それならどうして俺にそんな言付けをしてくる？ 理解不能の行動の裏には、割かし陰湿

な罫^{わな}が仕掛けられているモノだ。

「テムエの言ってる事は訳分かんねエが、それが事実だつて証拠はあんのか？ テムエが嘘吐いてねエって、証明できんのか？」

「……一々事の真偽^{まご}に拘^こるようでは生き残れない。……信じるか否^{いな}かはおまえ次第という事だ、進行役。後は 謀略将^{フレイシ} 識^{しき} 沢智^{ざわとも}にでも聴けば良いだろう」

白衣の男は言いたい事を言ったのか、門から身を離し、勝手に歩き出す。

俺はその背中を見送ろうかと思ったが、そんな事ができるはずも無く、腰から拳銃を一挺抜き放つ。

「待てよ。テムエも参加者なら、ここで逃がせるはずねえだろ、ええ？ 神妙にブツ殺される」

「……おまえに興味は無い。それに 急がなくて良いのか？」
う。こいつ、ムカつく位に痛いトコ突いてきやがる。

確かに、今こいつと戦ってる間にキルトが仕留められたら元も子もねえし。……ちっ、命拾いしたな兄ちゃん。今回は見逃してやるよ。

「じゃあ最後に一つ聴かせろ。 名乗れ」

「……狂木、十式」

変わった名だな。一瞬で憶えた。絶対に忘れねえ。奴が死ぬまで脳味噌に刻み込んでいてやる。

ズキリ。

胸が軋むのを押さえながら、俺は狂木に背を向けて駆け出した。

急げ。取り敢えず何を探せばいい？ 識沢？ 断花屋敷？ ……どつちも知るかよ！ ……ん、待てよ？ 断花？

「……あの豪邸の事か？」

ただっ広い屋敷が在るのは聴いた事が在るが……こつからだと全速力でも一時間以上掛かるぞ。

待ってるよキルト。絶対に死ぬな、死んでも死ぬな！ 俺が何と少しでも助けに行つてやる！

俺は俺の命を守るため、夜の街を疾走した。
音の無い世界は、まるで死んだ後の世界のように感じた。

【踪偵 陸】 夢成

……逃がした、と気づいた時には既に遅過ぎた。その頃には、戦場はようやく一段落着き、硝煙しょうえんと死臭しきゅうの混じる匂いが漂い始めていた。

「おや？ 嬢うらちちゃんの姿が見えねえな」

と、所長の知り合いの通称藪やぶさん……本名藪治おさむが言った後、俺は自分の失態に気づけた訳だ。

最悪だ。棺藤かんとうさんの狙いだと思われる女を逃がすなんて……！

それに、棺藤さんの狙いであると同時に、彼女は俺の積年の恨みがかもった相手かも知れなかつたんだ。今すぐにでも追わなければならぬと分かっていたが、行き先が分からない以上、下手に動きたくは無。ここは一旦、皆と合流するべきか……

取り敢えず今の戦闘で怪我らしい怪我もしなかつた俺は、藪さんに詫わびを入れてから立ち去る事を決めた。その直後だった。

「はろ。ユメさん、元気かい？ 私は程好くキレ気味だよ」

「魅織みおり……？ 何でおまえが外に出てんだ？」

魅織が外出したがないのは有名な話だ。大抵買物は俺かヒー坊に頼むし、外に出てする仕事は一切刻条うらちじょうに任せっきりになっている。魅織の業務は基本的に事務であり、俺や刻条のような肉体労働じゃない。彼女がいるお陰でウチの事務関係は成り立ち、同時に金銭の管理も巧く運営されている……はずなんだが、最近のこいつの言動を聴いてるとどうやらそうでもないような気がしてきた。

そんな魅織がここにいるだけで、不思議に感じるのは当然だった。「なによう。私が外に出ちゃ悪い？」 どこぞの深窓しんそうの令嬢じゃあるまいし」

「取り敢えず令嬢じゃない事は確かだ。で、おまえが外に出てるって事は、事務所は今どうなってる？ 野晒のさらしか？」

魅織が一瞬驚いたような表情を作った。それから不思議そうに小

首を傾げる仕草をする。

「凄いなあユメさんは。どうして分かったの？」

「そりやおまえが外に出てるから…… って、何だそりゃ。野晒しになつてんのか、ウチの事務所は？」

「どんな状態だ？ などと思考を巡らしていると、破壊し尽くされたドアから一人分の影が入って来た。家の中は既に電灯が破壊されているために月明かりしか灯りが無かったが、それでも魅織の表情の機微きびすら分かる明るさだ。

人影はヒー坊だったのだが、一瞬そうだと気づかなかつた。

「……どうしたんだ、その怪我は？」

「えへへ……ちょっとハマやらかしちゃいました」

はにかむように、どこか照れ隠しを浮かべてヒー坊は応えた。腕は三角巾で吊るされ、頭には包帯が、顔にもあちこちに絆創膏ばんそうこうや湿布ツブが貼られている。あまりにも無惨な姿に、俺はしばらく絶句した。

「いやさー、事務所、吹っ飛ばされちゃってねー」

何でも無い口調で咳つばく魅織をよく見ると、彼女もあちこちに切り傷や火傷痕が在るのが分かった。……魅織がこの状態で外にいて事は、事務所は更に無惨な状態だな、と推測する。

いや。今回はそんな程度で済むだろうか。俺でさえロケットランチャーをかまされたんだ、事務所ほんまともなれば大砲レベルで済まないかも知れない。……野晒し、って単語を使ったが、本当に事務所は残存してるのか……？ その辺を疑問に思う俺だった。

「いや、在るよ事務所。ただ屋根と壁が無くなっただけで」

「……そりゃ、土地が無くなる程のレベルだと俺も敵わねえよ。……ともかく、おまえらが無事で良かったよ。……そいやあ、刻条はどこに行つたんだ？」

「あれ？ 先にユメさんに逢いに行つたはずなんだけど…… 来てないの？」

来てない。来るも何も、ついさっきまで銃撃戦ドンパチかましてたところだ、あんな状態で出逢っていたら……あいつの事だ、一分も掛から

ず相手を殲滅せんめつさせてるはずだ。今まで時間が掛かったのは、偏ひとえに俺の力不足と体調不良に在る。万全の態勢だったならば、もっと早く終わっていたかも知れない。

こんな状態だったからこそ、逢魔おまキルトの脱走も易々やすやすと許してしまつたのだ。……本当に不甲斐ふがい無い。

「……そうだ。棺藤さんは、あれから戻つて来たか？ 俺の所に来てから、またどっかに行つちまつたみたいだけど……」

俺を病室に置き去りにしたまま、またあの人は一人でどこかへぶらり旅だ。いつもの事とは言え、現状は限りなく危険に等しいんだ、少しでも大人数で行動した方が良い。誰が狙われているのかは定かじやないが、事務所の中の誰かには違いないのだから。

魅織はふるるつ、と首を小さく振つて否定した。

「連絡が入つたきり。あれから音信普通なのよねえ……。ユメさんトコにも、連絡無いの？」

「さつきまでそんな状態じゃなかったからな。……どうなつてんだよ一体全体。何が起こつてんのか、サツパリ分からん」

弾痕だらけの長椅子ソファに腰掛けると、暗い室内に灯りが点つたのが分かつた。藪さんが蠟燭ろうそくを持って来ていた。

「ほれ、こんな暗い所におらんと他所よそ行け他所。金取るぞい」

「どこのボツタクリバーだこは。……でも、済まねエ、藪さん。あんたまで巻き込みまつて……」

「ふん。若造が何を言うか。……まあ、後で請求するからよろしくのう。これでまた近所付き合いが良くなるわい」

かっかっか、と笑い飛ばす藪老人。……何が凄いつてここまでロボ口になつても笑える神経だ。いや、もう既に笑うしかないという極限状態なのか。こうはなりたくないモンだな、とつくづく思う。「藪さん、おっひさー 元気だった？ 私は元気の丸印でーっす！」

「あーうつさいうつさい。少し黙れ小娘が。まだ結婚せんのか？」

「だって乳繰りちぢく合える相手見つからないんだもん」ぷー、と頬を膨

らませる魅織。

「どんな表現だ……。つか、おまえ結婚相手探してたのか？」思わず疑念を吐いてしまう。

「探してるよう。ああ、来てくれないかな……。異世界の騎士様……。」「夢見る口調で語られてもな。俺はそういう話、全く分からんし。

おまえ今年で何歳だ。

と突っ込むと逆ギレされるのは目に見えてるから避けるとして、ヒ―坊に視線を移す。

「おまえも、無理はすんなよ？　もう就業時間過ぎてんだから、帰っていいんだぞ？」

「……。青鳥さん、それって僕に死ねって言ってます？」

ヒ―坊がどこか怖々と尋ねてくるのを見て、ハツとした。

こいつの言いたい事が分かったのだ。俺の考えてる事が合ってるならば……。今現在、狙われているのは棺藤探偵事務所の事務員の誰か、最悪全員なんだ。そんな状態なのに家に帰れるか普通？　いつ殺されるかも分からないのに、のうのうと帰宅してテレビ見て風呂入って眠れるか？　できまい。昔の俺なら発狂するかも知れない。

済まん、と小声で謝ると、ヒ―坊ははにかむような笑顔で「いえ」と小さく応じた。

あまりに想像を絶する状態に、俺は頭が痛くなってきた。事務員の誰かが狙われている非常事態なのに、棺藤さんも刻条もいないってのはどういうこった。……。待て。今、何て言った？

「刻条は俺に逢いに来たんだな？」確認するように魅織を見やる。

「うん。先に行ってるーって出てっっちゃった。どこ行っっちゃったんだろーね？」

……。俺の推測が当たる時はいつだって最低な状況の時だけだ。その最悪の状態を想定して、俺は軋きむ体に無理を言わせて立ち上がる。

「おまえらはここで待ってる。ちよつくら探して来る」

「へ？　蛸ほたるなら大丈夫よう。蛸ほたるってああ見えてとっても頑丈」

「いいから。じゃ、静かにしてるよ」

そう言い残して闇に沈んだ町を走り始める。時刻にして零時を回った頃。辺りは完全な闇が支配を終え、街灯の光さえも駆逐してしまいそんな暗澹たる世界が広がっていた。

携帯電話で刻条を呼び出すも、応答は無し。留守電にさえ掛からない。……最悪の想定が当て嵌まらない事を祈りつつ、闇に沈む街を駆ける。

ふと、視線が路地裏に伸びた。……嫌な気配がここまで漂ってくる。虫の予感を信じて、中へと突き進む。

そこで、

「

手遅れだった姿を、見つける。

駆け寄ると、まだ息が在る事が分かり、慌てて体を抱き抱えて声を掛ける。

「おい、刻条！ 返事をしろ、刻条！」

「

あちこちに裂傷が走った服を着た、小さな少女は俺の姿を確認すると、零れるような声を漏らし、力無く視線を漂わせてくる。

意識がハッキリしてないみたいだ。裂傷はそんなに酷いようには見えない。……見た目の判断では確かに酷くないという印象だが、怪我をしている事には変わり無い。早期の診断と治療は重要だ。

「立てるか？ ちょっと歩けば病院……ほら、藪さんがいる。あそ

こまで行けば

「

……ダメ、……かも知れない……」

初めて聴いたかも知れない、刻条の弱音。俺は弱々しく果てた刻条を小さく揺さ振って、何とか気を持たせようと語りかけ続ける。

「何言っただ、おまえがここでやられる訳ねえだろ？ それに、見た所、傷もそんな大した事は

「

言っただ、気づいた。だらんと垂れたまま持ち上がらない刻条の腕。

形は整ってるのに、妙に伸びているような感覚　まさか。

「……外された、のか？　おまえが」

刻条は我が棺藤探偵事務所の中でも最精鋭の戦闘要員で、彼女には主に暴力沙汰になった時に活躍してもらっている。違法、と言えは確かにそう分類されるのだが、無くてはならない存在なのだ。俺達みたいな仕事をしていると、相手が時に暴力団やヤクザにも至る最悪、そういう奴らと喧嘩をかます事だつて在るんだ。戦闘要員とはいかずとも、護衛役は必然的に必要になってくる。それを買って出たのが刻条蚩だった。

小さな身に宿した大人顔負けの力で、幾度と無く修羅場を越えてきた刻条ですら、この有様という事が、俄かには信じられなかった。刻条ですら敵わないのならば、まず棺藤探偵事務員の連中では歯が立たないと言える。

「……動けないなら、背負ってやる。だからこんな所で諦めるな。俺達は誇り高き棺藤さんの事務員だぞ。こんな所でくたばる謂れなんて欠片も無い」

「……毒」

ポツリと零れる単語に、俺は一瞬何を言ってるのか分からず、聴き返した。「何？」

「毒……が、回ってるかも、知れない……」

……毒？　一体どこから　刻条の体のあちこちに見える裂傷が、それを物語っている。相手は短刀……恐らくナイフだろう……に毒物を塗りつけ、それで切りつけてきたのか。周到さは暗殺者並みだな、と心の中で舌打ちする。

「痛むのか？　痺れるのか？　……動けない、のか？」

「……わたし、ここで……最期かも、知れない……」

弱気な刻条に、俺は思わず怒鳴っていた。自分でも分からなくなる程、弱々しい刻条なんて見たくなくなつたのかも知れない。

「情けねえ事言っただけじゃねえ！　何でもいい、引き摺ってでも連れてってやるから、絶対に死ぬな！　二度と俺の前でそんな事言う

な！ 分かったな！」

「……………」
刻条が落ち着き払った瞳で俺を見つめてくる。何かを悟ったような眼差しに、俺は胸が締めつけられるような錯覚を覚えた。嫌な予感再び。俺はもう、何もかも投げ出してこの場から消え去りたくなる。

「……………」して「ポツリと、端正な唇から、吐息が零れる。

俺は何と言ったのか上手く聴き取れず、耳を彼女の口許まで近づける。「何だ？」

「……………」キス、して」

何を言い出すんだ、こいつは？

もう一度耳を近づけて、ギリギリまで近づけて、再確認する。「

……………」何だつて？」

「……………」最期かも……………」知れないから……………」キス、してほしい……………」

「……………」ダメ……………」？」

……………」最期だから。

それは禁句だ。そんな弱音を吐く刻条を見た事が無かったし、そんな刻条を見たくも無かった。……………」だけど、何と無く分かるんだ。こいつはそこまで『死』を覚悟して、最後に未練を晴らそうとしている、その意志だけは。

が、俺はそれを簡単に受諾する訳にいかない。刻条にここで未練を晴らされたら、余計にこいつは生への執着を忘れてしまう。そのせいで死なれでもしたら、俺は自分を恨みながら生き続ける事になるだろう、一生。

「……………」ダメだ。ほら、肩貸せ。ちょっと痛むかも知れねえが……………」

「……………」やっぱり、千友が、……………」好きなの……………」？」

「……………」再び刻条の顔を見やると、いつもの無表情な彼女の顔が月明かりに映えた。そこには些細な表情の機微すら見せない、いつもどおり

の彼女が佇たやすんでいた。だからこそ俺は狼狽ろっばいし、言葉に詰まった。何を返せば良いのか分からない。そう思って二の句を継げずにいると、

「……一度で、いいの。……して」

「ッ」

無表情に、ほんの少し桜色を差した刻条の顔は、いつもの見慣れた顔のはずなのに、色っぽく、そして可愛く見えてしまって、心臓が早鐘を打ち始める。冷静な仮面が、徐々に剥はがされていく。

「……っ、バカな事言っでないで……」

「……わたし、本気……だよ？」

決意を固めた、無垢なる乙女の顔は……本気で、頭がどうにかなりそうなモノだった。

俺は最早理性が殺戮された後で、一瞬、記憶が飛ぶ。

気づくと刻条の顔から顔を離して、唇くちびるに柔らかな余韻よゐんが残っていた。

刹那、刻条が元気満々と言った感じで起き上がり、俺から離れていく。

「……さ、行こう……夢成ゆめなり。毒が回っちゃわない内に……」

「あ、ああ……」

正直何を言っで良いのか分からず 同時に刻条の普通っぷりに付いていけず、

「なあ、おまえ……今の、嘘か？」

「……ご馳走様、でした」

は、

刻条は妖艶ようえんに笑むと、そのまま背を向けて歩き出す。その歩みに澱よどみは無く、怪我をしている事なんて忘れそうな程、健全だった。

当の俺はと言つと、目元を手で覆い尽くして、天を仰ぐ。

「嵌められた

秋の夜空は、今も尚なほ、星またたが瞬またたいていた。

初ではないにしろ、これで二度目だ。……女メってのは、怖い生き

物だ、とつくづく思う夜だった。

【侍邸 肆】 流天

断花の屋敷に向かつて駆けている途中、いつかは出逢いたいと思
っていた人物と接触ができた。

「……識沢！ おまえ、こんな時間に何してんだ？」

夜中の住宅街を駆け抜けていると、街灯の下に一人の少女を偶然
見つけたのだ。 が、相手はまるで俺を待っていたみたいに振
り返り、初めて逢った時とは違う、どこか怪訝けげんそうな表情を浮かべ
て、俺を見据えてきた。

いつもの雰囲気じゃない事を瞬時に察し、俺は近づきながらも警
戒を解く事はしなかった。

「……識沢？」

「流天くん。君、狂木十式と逢ったでしょ？」

「……」
何で、知ってやがる。奴とは今、逢ったところなんだぞ。それと
も、どこかで見てやがったのか？ ……だとしたら、こいつはとん
でもない脚力の持ち主だ。俺よりも速く駆け、しかも俺を待ち伏せ
して、ここで待機していたんだから。それも息を一切乱さず。……
超人か、こいつは。

疑問は沸々と浮かび上がってくるが、取り敢えず聴きたいのは、
「……だから、何だっただ？」

「あいつと接触した事に問題が在るとは、俺には到底思えない。在
るとして、奴がこの狂れたゲームの参加者で、殺すべき対象だった
にも拘らず見逃した事位だろうか。だと言うのに、識沢の眼差しは
剣呑としたモノから変わらない。」

「あいつとは、関わらないでほしいな」

「……何でおまえにんな事言われなくちゃいけねえんだ。俺の勝手
だろ？ それにあいつには
「関わらないで、ほしいな」

肅然と。まるでそれが世界の道理だと言わんばかりに峻烈に言い放つ識沢に、俺は一瞬喉が詰まる。何をそこまでして拒絶するのか、俺には理解できなかった。

「……まあ、いいよつ、別に。君が誰と交友関係を築こうが、実際問題あたしに口出しする権限なんて無いんだし。……でも、あいつはイヤだな、あたし。あいつは、このゲームの最右翼なんだし。あんな奴と仲良くしたって、面白くも何とも無いよう！」

……あいつが、優勝候補、だと？ ……確かに雰囲気はそんな感じを醸していたが……肉体的には、そう戦えるような奴には見えなかった。俺が言うのもただだけど、優男って感じが似合う、どこか電波系の男にしか映らなかつたんだ。そんなあいつが最右翼？ ……だとすれば、余程特異な縛魂を保持しているのか。

キルトみたいな形でさえも超絶無比な縛魂を保持しているんだ、ああいう化物が勢揃いって事も考えられる。今まで見た奴がまだ人間として許せる範疇だったから想像し難いが、仮に俺みたいな不死体現者がいようものなら、勝負はいつまで経っても着くまい。……まあ、俺の場合は足枷がいるお陰で死ぬ事だってあり得る不完全体なんだが。

でも、憶えておいて損は在るまい。狂木十式。この忌々しいクソゲームの優勝候補。どうせいつかは殺すんだ、何もしなくても再び遭遇する事になるだろう。その時は……全力でブツ殺す、それだけだ。

「それは良いとして、おまえ、キルトがどこに行つたか知ってるのか？ その狂木って奴が、おまえなら知ってるとか何とか吐かしやがったが……」

「あいつの思惑通りつてのが癪に障るけど……うん、知ってるよ。キルトなら今、断花の屋敷にいると思う。生きてたら」

生きてなくちゃ困るんだよ、俺が死ぬんだから。今も俺が生きるの、キルトが生きているからに違いなくて……もし死んで俺が生きてるんならそれはそれでいいけど……いや、良くないか。

……もしも仮に、今の呪いが解けたとしたら、俺はキルトを躊躇
い無く殺すんだろうか。自らの命の保護のため、遠慮も容赦も一切
かなぐり捨てて、余す事無く殺せるんだろうか。……きつと殺せる
と思う。あいつには何かと恨みが多い。いつかは殺したいと思って
んだ、今すぐはできなくても、ゲームを終えるためには殺さなくて
はならない。その時に呪いが解けていれば……躊躇無く、殺してみ
せる。

「思ったんだけどよ、何でおまえそんな事分かるんだ？ 天才か？」

「おういえーす！ あいあむじーにあーす！」

全く日本語チツクな英語をありがとう。俺は識沢に背を向
けて駆け出す。

「用件はそれだけだ！ 生きてたら後で逢おうぜ！」

「うん、頑張れ〜 ふぁいとなのだー！」

黄色い声援を背中に受け、俺は再び足をフル回転させ、夜道を疾
走した。

……こんな応援でも、良いモンだな、とか満更でもない気分にな
りながら。

やがて、その広大な敷地が見えてきた。

下手すると大学並みの敷地が在るのではないかと思うような広過
ぎる土地は、全体が三メートル強の塀で囲われていた。日本家屋と
示したいのか、塀には細工が施されていたりして、純和風の造りに
なっている。

塀を迂回するように駆け回っていると、ようやく大きな門
へと行き着く。

表札には《断花》の文字。ここだ。この中に、あのバカが

門扉を叩くが、流石に深夜も越えてやがては明朝という時間帯、
誰かが出てくるような事は無い。声を張り上げるのは流石に近所迷
惑かな、とも思ったが、そんな事に構っていられる程、悠長な事態
でもない。

「おい！ 誰かいないのかー？ いたら開けてくれー！ 開けないなら、無理矢理開けるから覚悟しとけよこらー！」

……十秒経過。よし、警告も果たしたところだ、後は実力行使在るのみ。

腰から拳銃を引き抜くと、門扉へ向かって

「何用だ、少年」

不意に、空から声が掛かった。

門の上を見上げると、少しずつ闇から紺色へと変わりゆく空を背景に、黒装束の少女が俺を見下ろす形で立っていた。門扉の高さは大体地上五メートル。首が痛くなってくる。

「あんたが断花さんか？」俺は少し声のトーンを落として尋ねる。

「……私の主に何の用だと訊いている。応えぬなら、早々に去れ」

主。こいつは断花って奴に仕えてる人間か？ お手伝いさん、っ

て感じには到底見えないが……侍女、って奴か何かか？ ……流石

にこんな豪邸に住んでるだけあるな、断花とやらは。

「ここに逢魔キルトって奴が来てるだろ？ そいつを迎えに来た」

隠す必要も無いだろうと思ひ、正直に用件を告げる。嘘を吐いたところで結局は今言った事と同じ事を実行するだけなんだ、どうせなら素直に応えた方が気持ちも落ち着く。

断花さん家の侍女らしい少女は俺を測るように見定めると、「暫し待たれよ」と言つて屋敷の中へと戻つて行つた。五メートル近く在る門扉から飛び降りるとは……あの真つ黒な装束と言ひ、どこかの曲芸師出身だろうか。

このまま出てこなかったら困るな、と思つたり、まさか現在進行形で証拠隠滅とばかりにキルトを殺害してないだろうな、と内心びくびくしたりしていると、長いと感じた五分も経つ前に門扉が内側に開いていった。ただし開いたのは門扉の隅に付けられた、小さな門扉のみ。流石にこの大きな門を開けるとなると時間も掛かるだろうし、音も煩いだらうしな、などと思ひながら屋敷の敷地内に踏み入る。

広大な敷地は、余す事無く和風に造られていて、やっぱり
ブルジョア金持ちだ、と痛感。どんな人間が住んでいるのか、一目瞭然って感
じだ。一昔前の日本にタイムスリップした気分で、敷地内に敷かれ
た石畳を歩いて行く。案内はおらず、門扉が勝手に開いたと思
えなかった。人の気配が全くしないのも、物凄く不気味に感じられ
て、内心、戦々恐々と敷地内を進んでいく。

「……にしてもでっけー家だな」

屋敷は入った当初から見えてる事ア見えてんだが……どうにも距
離感が狂う程に巨大だ。古い日本家屋だからか平屋建てなのだが、
それでも眼を疑う程の規模に、まじまじと建物を眺めてしまう。

ようやく屋敷に辿り着き、俺は玄関の戸を開ける。がらら、と音
を立てて戸がスライドすると、これまた濃厚な木の匂いが鼻腔を擦
った。古い家の匂いだ、と思った。中には女物の靴が一足分。即座
にあの女の物だと分析。俺もボロボロになった靴を脱いで土間を上
がる。木目調の床は、軋みの一つも上げずに俺を支える。痛んだ箇
所が一つも無く、新品同然に見えたが、年代物を思わせるシツクな
色合いを醸している。手入れが行き届いている証拠だと認識する。

廊下を音も無く進むと、途中で片側の壁が取り払われ、庭が見え
る場所に出た。もう直夜明けが訪れる頃の空は、綺麗な瑠璃色を刷
いていた。こんな朝を見るのは何年ぶりだろうか。記憶は定かじゃ
ない。

そんな悠長な思考は、一瞬で破壊される。庭に無造作に転
がる物体を見た瞬間、俺はここに来た目的を思い出さずにいられな
かった。

「……まあ、そうだよな。キルトが向かったって事は、そういう事
だ」

自覚するように眩きを漏らしつつ、その光景から眼が離せなかつ
た。

死屍累々。他に言いようが無い程に、完璧な死体の山が敷き詰め
られた庭。死体置場と言うよりは、地獄の一部をこっそり抜き取っ

た絵図のように映った。安らかな顔をした遺体など一体も無い。皆が一様に恐怖と驚愕きょうわくに彩られ、もしくは顔そのものが抉り取られ、マトモな状態の死体なんて一切無かった。

「 濟まぬな、未だ掃除をしておらぬのだよ、見苦しい限りだ。出来ればそう凝視せんでくれ、客人」

庭を注視していたためか、気配に気づかなかった。廊下に再び視線を戻すと、こちらへ向かって歩み寄って来る男がいた。着流しを着こなす二十歳程に見える青年。腰にはさも当然とでも言うように日本刀が提げさられている。

俺は一瞬日本刀に思考を奪われかけたが、危ういところで意識を引つ張り直し、青年を見やる。

「あんたが断花つて野郎か？」

「くつ、礼儀が為つとらんなのう。……まあ、良からう。如何いか

にも。儂ワシが此の屋敷の主、断花土清ことすがじゃ。して客人。一体何用得参った？ 貴様の用件を聴かせて貰おうか」

尊大な口調で宣のたまう男 断花は、いかにもな感じの男だった。

瞬時に悟る。こいつが七人目か、と。

「キルトがここに来てんだろ？ 連れ戻しに来た」

素直に用件を言つてやると、断花は柳眉りゅうめいを顰ひそめ、据えた目つきで俺を見定めてきた。

「あの女子おんなの何じゃ、貴様は？ よもや兄妹等とは吐かさぬよの？」

キルトの、何、だと？ ……一言で言うならば、運命共同体。少し長くしてもいいなら、俺の平穩を破壊した厄介の塊、だろうか。

って、んな事が言える訳ねえだろ。何か良い嘘はねえか……。

「……彼女だよ。キルトは俺の彼女だ。彼氏が彼女を連れ戻しに来ても、おかしかねエだろが」

どんな嘘だ。自分で言つてて馬鹿馬鹿しくなる。あいつが俺の彼女？ ……まあ、外見しじやうは確かに良いけど、あいつ自身、俺を嫌つてる節ふしが在るし。俺が望んだところで、あいつは……

って、何を言つてんだ俺は。別にあんな奴、何とも……

「ほう。彼奴きやつに好い人が居ったとはの。……くつ、貴様には人を見る眼が在る様だ。……だが、一つ言わせて貰うなら……何故此処こゝに逢魔キルトが居ると思つたのじゃ？」

眼光がキツいが、俺は動じる事も無く、逆に睨にらみ返して応じた。「いると思つたから来たんじゃねエよ、いるから来たんだ」

視線が更に厳しいモノに変わったのに気づいたが、俺は構わず睨み返し続ける。

「話はコレで終わりだ、早く連れて来い。……いや、怪我して来られねエのか？ どこにいるか教える、勝手に連れてくから」

「……何故、怪我をしてると思つたのじゃ？」

「言つたろ。してると思つたから言つたんじゃなくて、してるからそう言つたんだよ」

断花ことわの強い顔と俺の苛立つた顔がぶつかり合い、目線で火花を散らす。……テメエが何も言わなくてもこつちは分かつてんだよ、と視線に載せて突つ撥はねてやる。

しばらく無言の均衡きんこうが取れていたが、先に負けたのは俺の予想通り、断花士清きよだった。

「……まあ良いわ。……其奴そやつなら、隣の部屋に居る。だが、

連れ返すのは未だ認められんなア」

「テメエに認められる必要なんざねエ。じゃ、そゆ事で」

障子を音も無く滑らせると、中に布団が敷かれていた。中には汗だくのキルトの姿。良かった、まだ生きてる。苦しそうなのは、恐らく背後の男に袈裟けさが懸けされたからだろう。今現在、俺の胸に痛みが無いのは、こいつの自己治癒能力の賜物たまものか、或いは

キルトの枕元ひざに膝を突き、顔色つかがを窺う。明けが近い空に照らされた小顔は、ほんのりと朱を帯びて熱っぽいのが分かった。額に手を触れると、じつとりと汗を掻いているのが分かるし、少し熱が在る。袈裟懸けされた時に、黴菌バイキンでも入ったのか。

待て。じゃあ、何で俺はこんなにもピンピンしてるんだ。

自然と胸の傷に触れていた。傷は在る。が、疼うずくような痛みはほと

んど感じられない。傷が在る事だけは分かる程に、痛みが引いていた。熱は、確かに感じている。頭が茫^{ぼう}、とする程度には熱が在る事が分かる。それでも、キルト程には酷^{ひど}くないと思う。

もしかして、呪いが解けてきているのか？

【侍邸 伍】 流天

「キルト。大丈夫か？ 起き上がれるか？」

「……………」
薄つすらと瞼が開く。ぼんやりとした瞳を虚ろに彷徨わせ、やがて俺に焦点を合わせて、その姿を確認したようだった。

「……………流天、か……………」

「ああ、迎えに来たぞ。動けるか？」

「……………頼んで、ない……………」

何だとコノヤロウ。可愛くない奴め。

でも弱々しい姿を見ていると、何だか反論する気も失せ、俺は肩を竦めるだけでそれ以上の反撃はしなかった。

「怪我は痛むか？」

「……………流天は……………どうなんだ……………？」

息も絶え絶えに応じるキルトを見て、俺は少し考える。あんまり喋らせない方がいいな。苦しそうだし。

俺は背後の気配を窺いつつ、キルトに耳打ちする。

「俺は大丈夫だ。……………もしかしたら、呪いが解けてきてるのかも知れねエな」

「……………」

「とにかく、ここを出るぞ。動けるか？ 喋らなくていいから、首で応える」

もう一度問いかけると、キルトは不服そうに眉根を顰めて、小さく首を横に振った。

本当に、弱々しい。いつもの彼女を見ていると、更にそれが際立つて感じられる。……………流石に胸を袈裟懸けされて平常心でいる方が難しいか。俺は何だかキルトの人間らしさを垣間見た気がして、少し安堵する。こいつも、こんなにも普通の女の子っぽい反応をするんだ、と。

俺はできる限りそれを表面に出さないように表情を整え、再び耳打ちする。

「背負つてやるから、取り敢えず起き上がれないか？」

「……なん、で……」

キルトの掠れた、弱気な声が臆気に聴こえてくる。

「……私を……助けるんだ……？」

「……何言つてんだ、おまえ？」

普通の声で答えてしまった。声を潜めもせずに、いつもの声音で。

「弱った奴を見捨てられる程、俺は堕ちちゃいねエよ」

「……頼んで、ないのに」

「はいはい、分かった分かった。……こんな可愛い女、フツー見捨てられねエよ」

「何？」

「何？」

「何でもねエよ。ほら、引つ張るから起き上がれよ」

キルトの布団を捲ろうとした刹那、俺は咄嗟に腰に提げていた短刀を引き抜いた。拳銃じゃなくて短刀を選んだのは正解だった。抜き様に振り抜くと、硬質な音が部屋に響いた。

鋭い衝撃が手首に走り、途端に痺れて手放しそうになったが、何とか堪えて得物から手を離さない。短刀の先には、何だか時代劇で見た事が在りそうな骨董品の姿。

「……テメエ、いつからそこに……？」

「……無粋な真似をするな、客人。主が仰つた御言葉を早忘れたか」

真つ黒装束の女が、短刀 多分、クナイつて奴 を俺に向か

つて振り抜いた体勢で、俺と相對していた。いつそこに現れたのか全く気配が掴めなかった。明けが近いと言ってもまだ闇の形成が強い外界は、隠れる場所なんてどこにでも在るようなモンだけど、それでも何の前触れも無く攻撃を受けたのは、コレが初めてだ。

「何の事だ？ ……ああ、認めねエとか何とか言つてたアレか？」

「んな事、守る訳やねエだろが」

吐き捨てるように言つてやると、黒装束の女の瞳が獣のように細

められたのが分かった。

「貴様に良識を期待する方が愚かだと言うのだな。相判った。あいわか

失せる、小僧」

「ッ」

喉のどに衝撃　恐らく蹴りが喰い込んだッ　障子を破壊して廊下に突き出されると、そのまま転がって庭へと落ちる。気管が潰されたせいか呼吸が詰まり、刹那的に呼吸困難に見舞われる。咳せきが止まらない……！

視界が涙で歪ゆがんだ状態でも、屋敷の中から黒装束が出てきたのが分かった。

「……未だ立てるのか。脊髄せきずいを破壊した心算つもりだったのだが」

「ゴホッ、ゴホッ、ガハッ、……はあ、ああ、……躊躇ちゅうちゆねエな、おい。モロ殺す気かよチクシヨウ……！」

握っていたはずの短刀の姿は無い。黒装束の女からなるべく間合あひあいを取って、腰の拳銃に手を掛ける。武器には限りがある、何とかコレであの女を仕留めたい。

黒装束は音も無く庭に降り立ち、クナイを片手に、え、何だコレ。

気づいた時には、奴が眼前に立ち塞ふさいがっていた。刹那、俺は全身が悲鳴を上げるのを黙認し、咄嗟とつさにバックステップを踏む　が、女との距離がまるで変わらない。マジで何者だこの女メマ

ず、と。クナイが伸びる。俺の首を刈り取る

「ッ」

犠牲になったのは腕　機械的な速さで振り抜かれた刃によって、俺の右腕からは鮮血が確認できた。咄嗟とつさに庇かばえた本能に感謝が尽きない。代わりに痺れた手から拳銃が零こぼれ落ちる。バカー！　もう武器が一つしかなくなっちゃったじゃねエかよ！

薙ながれた刃の軌跡を追いつつも、その時には左手が最後の得物に指を掛けていた。最早躊躇ちゅうちゆう余地無し。奴を殺す以外に生きる道は無い！　抜き様に発砲

「 黒装束は驚くべき身体能力を発揮 発砲直前に身を翻し、且つ
俺へと近接する 本気で化物かこの女は！ 弾丸を躲すなんて人
間業じゃねエよクソ！ 俺は二度目の発砲を諦め、女へと逆に接近、
拳を固めて殴りかかる。」

刹那、勝負は着いた。喉仏に異物を確認。刃が刺さってる。
貫かれた 口から血泡が溢れ出る。クソ……何だつて俺はこん
な眼にばかり……

気こそ失わないが、意識が砕けそうな気分で、何とか踏み止まる。
苦しい、痛い、気持ち悪い。いつそ一思いに殺してくれた方がどれ
だけ楽な事か。死にたくも無いくせに言い訳ばかりが先に立つ。

一歩退き、口からだばだばと喀血しながら、霞む視界に黒装束を
捉える。……最早俺の事なんてどうでも良さそうなあの眼、気に入
らねエな。まるで、死んだ奴を扱うみてエじゃねエか。
踏み止まり、喉仏に手を添え、 クナイを引っこ抜く。

「 ぐぶア」
更に喀血。折角の着流しが徐々に赤く汚れていく。喉の違和感
は中々取れなかったが、動けなくなる程じゃない。俺は黒装束を睨み
ながら、クナイを握り直す。黒装束の瞳が、僅かに揺らぐ。

「 げぼツ、がぼツ、がア、……あ、おい、てめエ、まさかこ
の程度で殺せるとか思ってたねエよな、コラ？」

「 黒装束の表情の変化を擬音で表すなら ぞくり、が一番的確だ
と思う。 慄いた様子が、妙に笑える。」

俺は未だに止まらぬ喉からの出血をそのままに、 駆け出す。
一歩踏み込む度に喉が灼けそうになったが、構っていられる程の余
裕も無い。一瞬で片を付けなければ。意識はそこにしかなかった。
クナイを振るう。黒装束は驚きながらも、冷静さを失わなかった
ように、的確な動きで俺の腕に絡め、 次の瞬間には肩を外さ
れていた。ごきん、と小気味いい音が明けの空に響く。

「　　いッ」

痛みよりも先に痺れのような衝撃が走る。一瞬で機能不全に陥った右腕を放置し、左手の拳を黒装束に叩き込む

「ごきん。あ、こつちも外された。」

「かつ」と変な声が漏れて、そのまま倒れ込む。両腕を外されては受身を取る事すら不可能。顔面から墜落し、鼻を挫く。痛い。痛いけど喉もやられてるために声を出す事もままならない。這いずる事すらできずに蹲る。

「　　流石よの、影虎。手際が良いのが貴様らしい」

屋敷の中　庭に面した廊下から声が聴こえてくる。断花だ。

あの野郎、女に戦わせて自分は静観か。いい根性してやがる。

両腕を外された状態で、喉も潰されて尚生きてる俺としてはまだ戦闘は始まったばかりで、勝負は依然として決していない中途半端だと思つているのに、あの野郎は既に勝負が着いたと言わんばかりの口調で続ける。

「其奴も、恐らくは下賤遊戯の参加者じゃろうのう。惜しい事をしたわ。あれ程の耐久性を持つなら、儂が相手してやっても良かったのじゃが」

「……申し訳在りません、土清様。併し、此奴は土清様が御相手される迄も無い者、某にお任せ下され」

「ふむ。まあ、良いわ。後は貴様に任せるとしよう。貴様の仕事は、此処の掃除も含まれるのだからな」

俺はゴミか。……まあ、こいつらの感性を何と言つても仕方ない事だし、別に文句を付けるつもりもねエよ。だがな、人をゴミ扱いしといて楽に死ねると思うなよ？

腕をガサゴソと動かし、　接着。パーツとパーツが組み合わさったような感覚と共に、腕の感覚が再生される。刹那、両手で地面を突いて跳び起き、さつき落とした拳銃を拾い上げ、影虎とかいう黒装束に向かつて発砲

影虎はその収斂された動きさえも見破ったのか、弾丸を躲して接

近　再び俺の腕を外そうと手を伸ばしてくる。その動きに一切無駄は無かったが、さつきよりも何倍も動きが鈍い。明らかに狼狽ろうばいしている。それは俺の異常な回復力に尽きると思う。まさか、外された腕が瞬間的に接合するなんて思わないだろうし。それにしたつておまえ動き良過ぎだろ。

バックステップを踏んで影虎の不気味に伸びる手を躲す。その時、偶然では在るものの、銃口の先に影虎の姿が飛び込んできた。好機チャンス

俺は引鉄トリガーを絞り、弾丸を弾く。

鮮血が舞った。影虎の呻うめきが漏れ、ようやく一撃くれてやる事ができた。被弾ヒットした箇所ポイントは右肩。弾丸は貫通せずには体内に留まり、背中からの流血は見られなかった。苦しげに、且かつ憎々しげに顔を歪める影虎は、実に愉快だった。ざまア見ろ。

三発目を発砲する前に、針の手裏剣が飛来し、最悪な事に片目を潰された。それだけで済まず、体の数十箇所ポイントに針が突き刺さる。何かのツボにでも刺されたのか、物凄い激痛が全身を駆け巡る。発火しそうな体を押さえて、その場でもんどりを打つ。

「がッ　、かッ、ぐア　ッ」

目玉から火花が散る。頭が破壊される寸前まで追い込まれていく。上手く物を考えられないようになり、ただひたすら転がって自分が壊れていく事を自覚する。こんな激痛を味わう位なら、まださっきの腕を外された状態で黙っているべきだった。

火達磨ひだるまになつた気分を存分に味わっていると、不意にごきッ、と骨が碎ける音がした。どこの骨かはすぐに分かった。首だ。意識が、急速に失われていく

……一瞬だと思う、意識が無かったのは。キルトのように殺し切る事ができない影虎の限界が、俺の意識を一瞬奪う事だったんだろ。俺は灼けるような体を感じつつ、臍へそ気な視界で世界を掴む。

「……はあ、……はあ、」

息遣いの荒い女が、俺の首に足を添えて見下ろしていた。多分、

今の俺の首、砕けてる。意識は在るけど、声出ねエもん。つか、頸椎砕かれたら流石の俺でも死ぬんじゃね？とか思ってたけど、何とか生きてるっばい。流石俺。全身穴だらけにされても生きてた事が在るし。

じやり、と砂利を噛む音が聴こえて、直後に男の声。

「くくつ、影虎が呼吸を乱すとはの。名は聴かんだが、中々に気骨が在る奴だった様じゃの。……実に惜しいわ。儂が手を下したかったぞ、影虎」

「……土清様の御手を煩わせはしません。下がっていて下さい、土清様。此奴、未だ息が在るか」と

「くつ、尚更興味深いわ。……其奴の様な輩が未だ四人も居ると思うと……くつ、血が沸くのう」

……どんな狂った野郎だ、この断花とやら。そんなに戦いたいなら、どっかの紛争地帯にでも出張しろってんだ。

頸椎が砕かれているために、全身に命令が行き渡らず、俺は五体不満足のまま、ただただ二人の会話を聴いているだけ。正直、ウザい。動けない体がこれ程までに苦痛に感じるとは。

そこに、

「さわ、るな」

視界には映らないが、確かに女のキルトの声。

鼓膜には、砂利を噛む、どこか乱雑な足音が響いてくる。……ふらつきながらやって来てる？視界に入らないため、どんな状態なのか分からないが、無理をしてるのは確かだ。あんな状態で動けるはずも無いキルトが、何故か俺の許に歩み寄って来ている。

「キルト。貴様は未だ寝ておれ。傷に障る」

「土清様が仰る通りです。未だ横になっっていて下さい」

どんな待遇の違いだコノヤロウ。俺は何をしてもズタボロにされて、キルトには傷を慮ったり横になっっていると吐かしたり。とてもじゃないが同じ客人とは思えない。

キルトがようやく視界に納まると

その体が白い着物一枚だ

けどという事に気づいた。それもかなりの薄着。んな格好だと風邪引くぞ　と声も出ないのに突っ込んでしまう俺。

そんな俺を他所よそに、キルトが俺に向かって　倒れ込む。それは何も俺を庇うためではなく、そこで力尽きて、たまたま下に俺がいただけの事に過ぎない。俺はマットレス程度の扱いだ。とても同じ客人に対する扱いとは思えない。

「……死んだフリをしとけ」

本当に小声で。囁ささやくような声で耳打ちされると、俺は動けないまま、何とか眼で意志を訴えようと試みる。至近距離に在るキルトの顔を見ると、妙に気恥ずかしく感じた。

「……その方が、好都合だ」

ぼそぼそと、ほとんど声帯を震わせない声音で呟つぶやくキルト。眼前に在る可愛い顔を見て、俺は皮肉気な表情を浮かべる。勿論モチロン、断花達には見えないように。

それを感じ取ったらしいキルトが、ムツとした顔になる。それがまた何故か可愛く映る。

「……心配してるからじゃない。……生存率を上げるため、万全の態勢そので臨む」

なるほど、一理在る。今の俺は傷持ちで、キルトの熱さえも帯びた状態では、正常な思考は疎おろか、マトモな運動さえままならない。俺はその事実を分かって尚、キルトの気遣いに不思議な温かみを感じていた。こいつは自覚してないかも知れねエけど、俺にとっちゃそれなりに安堵する言葉なんだぜ？

……てか、今どんな状態だ、おい。何か、体のあちこちに柔らかな感触が在るのですけど

「……私の彼氏を名乗ったからには、それなりにカッコいいトコ見せる、バカが」

ボソツと言われて、一瞬俺は聴き間違いかと思ひ、聴き返そうとして、

「別れは済んだか、キルト？　貴様は其奴に構う前に、儂に吐

く事が在るじやろつて」

断花のバカが何か言ってくる。……正直、イラツときた。こつちは今取り込み中だ、引ッ込んでろ。

キルトの体が剥がされていく。支えるのは影虎とかいう黒装束。蔑さげすんだ視線は俺へ注いだまま、身動みじろぎすらしない。……そんなに見つめても、今の俺ア動きたくても動けやしねエよ、クソ。

意識も泥水に沈みかけて朦朧もろうとしてきた。……たった二日の事なのに、何度死に掛けた事か。いや、俺じゃなかったら確実に死んでるか。何回死んでんだよ、チクショウ。

「……此の者は動けぬ内に捨て置きますので、ご安心を」

影虎がそう言っつて歩み寄り、何の躊躇も無く俺の頭に短刀を突き立て、

意識が、断絶する

【踪偵 漆】 千友

高校は、大変な事になってしまった。

その後、警察官がたくさんやって来て、色々事情聴取をして、それから……生き残った生徒は全員自宅謹慎状態。誰も外に出る事ができなかつたみたい。

ボクはトモと別れた後、しばらく呆^{ぼう}つとしてた。……何も考えたくなかつた。クラスメイトが殺されたり、逆に殺人者になつてしまつたり……何が何だか分からなくなつて、思考を破棄^{はき}したくて、なのにただひたすら思考の渦に巻かれていく……

「千友ちゃん？」

声を掛けられた時、一瞬自分に声を掛けられているとは気づかず、黙したまま喫茶店の外に視線を投げ続けていた。

ふと、目の前で手を振られている事に気づいて我に返ると、

そこには

「^{かんどろ}棺藤さん！」

何ヶ月ぶりだろう、棺藤さんがそこに突つ立っていた。いつもの草臥^{くたひ}れたスーツ姿。何一つ変わらない成熟した男の人。

ボクに反応が在った事に満足したみたいで、向かいの席に座つて注文を取る。「アイスコーヒー一つ」ボクも慌てて声を掛ける。「同じのもう一つ！」

「久し振りだね」

「うん！ 本当に久し振り、棺藤さん！」

「それと……大変だつたね」

一気に元気を奪い取る単語を吐かれて、ボクはすぐに返答できずに押し黙る。

しばらく沈黙が漂い、何だかそんな空気が嫌で、ボクは棺藤さんを見上げる。

「……折角^{せうかく}再会できたのに、そんなシンミリする事言わないでくだ

「さいよう、棺藤さん？」

「あはは、濟まないねえ。……まあ、私としても、他人事じゃないからねえ……。怪我は無かった？」

「あ、えと、うん。何とか。あ、そうだ棺藤さん！ こんな事言つと不謹慎だけどさ、ボクね、凄い事したんだよっ」

さつき 外の景色を見て、もう何時間も前の事だと分かったけど、それでもその時の興奮はまだ冷めていなかった。というより、今再燃し始めた感じ。

そんな熱っぽいボクを見ても、棺藤さんは穏やかな表情を崩さず、親身になつて話を聴いてくれる。

「何をしたんだい？」

「えとね、実はね、爆弾を解除したの！」

襲撃されたボクの学校には、爆弾が仕掛けられていたんだ。それをボクとトモが見つけて、一緒になつて何とか解除した……事実だけ述べればそれだけだけど、その時のボクとトモは興奮し過ぎて完全な躁状態ハイだった。だって、一つ導線を切り間違えれば、ドカン。ボクとトモだけじゃなくて、学校中の皆が木端微塵こっばみじんになつちゃうトコだったんだから！ それを成し遂げたボクとトモには、運命に負けない力が宿っているのかも知れない！

それを力説すると、棺藤さんは落ち着いた眼差まなざししでボクを見つめてくる。

「……それは凄い事だね、千友ちゃん。まるで、運命を自分で切り替えたみたいだ」

「えへへっ でしょー？」

「だけど、同時にとても危険だった事を忘れないようにね。一歩間違えれば、君は今頃ここにいないかも知れないんだから」

「あ………」

思わぬ諫めいさめの言葉に、ようやく浮かれていた熱が冷え始める。

しゅん と一気に落ち込んで、自然と俯うつむく姿勢になる。……

だよ、アレを少しでも間違えてれば……今頃……。

「そう落ち込まないで、千友ちゃん。君は誰が何と言おうと、学校の皆を救った恩人に違いないんだから」

ボクが後悔の海に沈む前に、温かな励ましをくれる棺藤さん。…
…飴と鞭、かな。そう思っても嬉しい気持ちは止まらない。何より、棺藤さんにそう言ってもらえたら、後はもう何も要らなかった。

「……うん。ありがとう……って、ボクが言うのもヘンだよな？」
「ふふ、うん、そうだね」

棺藤さんが笑ったのを見て、ボクも思わず吹いてしまう。別に笑うところでも何でも無いのに、笑みが零れる。

棺藤さん……そこに彼がいるだけで、心は温かな春の陽射しを感じてしまう。懐かしい温もりを胸に懐きながらも、ボクはこの気持ち壊したくないと思った。

なのに、

ボクは、この平穏を崩壊させる言葉を自然に吐いていた。

「パパを殺した犯人、分かったの？」

口にした瞬間、失言だと気づいた。時既に遅し、棺藤さんはいつもの柔和な表情を一瞬だけ強張らせる。

ボクは何とか取り繕おうと口を忙しなく動かしたが、明確な言葉も出ないまま、時間だけが過ぎていく。

「……誰から聴いたのかは聴かないよ。困るでしょう？」

優しい口調で尋ねてくる棺藤さんに、ボクは思わず俯いた。

「……ごめんなさい。ボク……」

「確証は無いけど、分かったかも知れないんだ」

そう言う棺藤さんの言葉には、どこか力が込められているように感じた。

上目遣いに見据えると、棺藤さんはいつもの穏和そうな表情に、歪な色を滲ませていた。それがどうしようもなく不気味で、怖くて、……ボクの中の偶像が崩れていく。

「……どうして、「言葉が勝手に出てきて、ボクの意志では止められなかった。」

「情報提供が在った、と言えはいいのかな。……とても信頼できる人からのモノだけれど、信用して良いのか分からない筋のモノでも在るから……信憑性もへったくれも無いのだけれどね」

「どういう意味なのか理解が及ばず、ボクは小首を傾げて棺藤さんを見つめる。棺藤さんは苦笑を滲ませて、アイスコーヒーで舌を潤す。」

カップから口を離すと、自然と棺藤さんの表情が引き締まったように映った。

「これからその情報の確認をしようと考えてるんだ。……もし、犯人が見つかったら……その時は、」

一旦言葉を区切ると、逡巡するようにボクを見つめた後、

「……捕まえてみせる。必ず」

嘘だ、とボクは瞬時に悟る。この人が犯人を捕まえるだけなんて事は無い。ボクには、確証も論理も無かったけど、そう確信していた。彼は、犯人を見つけ次第 殺すだろう。それは、長年付き合ったために生じた思考の推測とか、そういう色んな要素が混じったものかも知れなかったけど……ボクには、そんな関係無しに、この人が犯人を殺したがつているのが分かってしまった。

犯人を殺したがっているのは、単純に憎んでいるから、だけじゃないような気がする。一年分の憎しみが凝り固まり、憎悪が凝縮されているのも在るし、それとは別に、棺藤さんには醒めた部分で人を殺す何かがあるような気がした。

全部妄想だ。何の論理も推理も無い、憶測に憶測を重ねた思考の坩堝に過ぎない。

ボクは何を考えているんだ？ パパを殺した犯人を捕まえてみせるって宣言した相手に、どうしてそんな感情しか懐けないの？ そんなの間違ってる。そういう人を応援するのがボクだったはずなのに。

「……無理は、しないでくださいね、棺藤さん……」

どうしちゃったんだろう、何だかいつものボクじゃない……。も

しかして、学校の事件が尾を引いてるのかな。きつとそつだ。あのせいで、ボクは少し壊れちゃったんだ。

棺藤さんはいつもの穏やかな顔に、少しだけ決意を含んだ色を織り交せて、力強く頷く。

「早い内に知らせるよ。片が付いたら、絶対に」

考えないようにしても、どうしても思考はそこに行き着く。終着駅は、いつだって物悲しげに映る。

早い内に殺されちゃうんだ、その人。

家まで棺藤さんに送ってもらった。何でも棺藤さんはこの後も仕事で埋まつてるらしくて、すぐに出掛けなくちゃいけないらしい。ボクには引き留める用事も無くて、ちよっぴり心配だったけど笑顔で見送る事にした。

帰宅すると、ママがとても心配してた。怪我はしなかったかとか、無事だったのかとか、本当に心配してくれていたんだって分かって、ボクも一緒になって涙を流した。もう、大切な人を失くしたくないママの気持ち、痛いほど伝わったからかも知れない。

それから学校で遭った事を話して、すぐに寝る事にした。明日は休校だと思っけど、それ以上にボクは疲れきっていた。当然だと思っ。あんな事件に巻き込まれて疲労を感じない人がいたとしたら、その人はきつと英雄ヒーローに向いてると思っ。勇者とか、主人公とか、そんな人。

……キルト、大丈夫かな。

脳裏に友人の顔が閃く。あれだけ怪我をしていたんだ、きつと無事じゃ済まないと思っ。トモはすぐに治るって言っただけど……そんなに簡単に治るような傷じゃないと思っ。だっ、拳銃で撃たれたんだよ？ そんなのがすぐに治っちゃうとは、ボクには到底思えなかった。

体は睡眠を欲しているはずなのに、頭は全く寝つこうとしなかった。あの事件の余韻よゐんと言っべき緊張が、未だいまに体に残っている。あ

の時の恐怖が、まだへばりついていていた。

ベッドに沈んでいた体が自然と震え出す。思い出したくないけど、記憶は一向に鎮まら^{しず}まない。ボクにあの時の事を再現させる。

あの時、確かにボクは死んでいてもおかしくなかった。

その事実を再認識させられて、ボクは恐怖と共に安堵も感じていた。ボクは生き残った、死ぬかも知れなかったけど、ボクはちゃんと最後まで存命できた……それだけで、どうしようもない位、安心してしまう。

キルトも、きっと大丈夫だ。怪我は酷^{ひど}かったけど、すぐに治療を受ければきつと助かる。そう思い込む事で、心が安定する気がした。落ち着きを取り戻せたような気になった。

そして 流天^{るてん}くんの事も、同時に思い出す。

「……やっぱり、いけないよね……」

彼は、……人殺^{いく}した。幾^{いく}らキルトを守るためとは言え、人を殺した事実に変わりは無い。あの時は、その場の空気みたいなもので話が流れちゃったけど、流天^{るてん}くんはちゃんと法の裁きを受けるべきなんだ。

別に、流天^{るてん}くんを責めたい訳じゃない。怪我を負ったとは言え、キルトを守ったのは確かな事実だし、それは正義だと思う。正しい事、なんてボクには分からないけれど、あの時の流天^{るてん}くんはあの時にできる最善を尽くして、ああなったんだと思う。なら、法の裁きを受けても、そんなに酷い刑にはならないはず。ちゃんとそういう事は考慮してくれるはずだ。

だから、いつまでも逃げ続けるんじゃない、いつかちゃんと世間に顔向けできるようになってほしい。そう、心から願った。そうしなければ、苦しむのは流天^{るてん}くんだけじゃないと思うからだ。関係の薄いボクでさえこんな心配するんだから、本人である流天^{るてん}くんはきつと気が気じゃないと思う。早めに打ち明けて、楽になってほしい。

少しずつだけど、精神が安定してきたのが分かった……それは、

安らかな睡眠すいまに体が乗っ取られていくのと同じだった……

【探偵 捌】 千友

……………熟睡だったんだと思う。夢を全く見ずに、頭が覚醒していくのを感じた。

何かか鳴っている。それが自分の携帯電話の着信音だと気づくのにかなりの時間を要した。一度音楽が途切れて、慌てて跳び起きる。目覚まし時計はまだ朝の六時を差している。一体誰だろう？

と思つた矢先に再びコール音。ボクはドキリとしながら通話のボタンをプッシュした。

「もしもしっ？」

『あ、チュー？ あたし、皆のトモちゃんだけどさ』

「トモ？」

こんな朝っぱらから何だろう、と思つて眉を顰めると、 刹
那、ボクの心を凍らせるような言葉が聴こえてきた。

『あのさ、チューの事呼んでる人を見つけたんだけど……………チューの知り合いか確認したくて』

「え……………ボクを呼んでる……………？ どんな人？」

『何か、探偵事務所を開いてるんだって。名刺には……………棺藤かんとつって書いてあるんだけど』

「……………」

棺藤さんが、ボクを呼んでる？ でも何で？ しかもこんな時間帯に……………それに、呼ぶなら携帯電話が在るのに。棺藤さんの番号、登録されてるよ……………？

疑問が沸々と湧き起こつたが、どれも解決しないまま漂っている。そして更にトモは恐ろしい事実を繋げた。

『でね、これ重要なんだけど……………棺藤って人、もうマジメに死に掛けたよ』

「……………」

『頭からも血出てるし、何か血塗れまみってカンジです、でも、救急車は呼ぶなって言うし。早くチューに来てほしいと言っててるんだけど……もしもし?』

携帯電話から聴こえてくるトモの声が遠い。

意識がどこか別の場所に飛んでいったみたいで、感覚が途絶してしまっていた。

何から考えればいいのか分からない。何をすればいいのか考えられない。

『もっしもし。チュー? 返事しろーい』

「とっ、トモ! 場所ッ、場所を教えて!」

うんいいよー、とどこまでも呑気のんきに応じるトモの声を聴いてると、実は何でも無い事のように錯覚するが、これは大問題に違いないんだ。棺藤さんが血塗れで倒れていて、ボクを呼んでいる。これが事実なら、相当緊迫した状態だという事になる。

手早く居場所を突き止めると、すぐに通話を切った。着替えもすぐに済ませて家を飛び出る。幸い、ママはまだ寝てるみたいだったから、何も言わずに飛び出してきた。

「はあっ、はあっ、はあっ!」

早朝の閑静な住宅街を駆け抜ける。遠くで大型トラックの排気音が聴こえる位で、他は何の雑音も聴こえない静寂が支配した世界で、ボクの荒々しい息遣いだけが木霊こだまする。胸が張り裂けそうなほど痛い。苦しくて、息が上手くできない。

ただひたすら走り抜け、何も顧みかえりずに黙然もくぜんと駆け続ける。

怖かった。昨日の恐怖感とは別種の焦燥じくそうが胸に生じていた。

そう、焦りだ。ボクはとても焦っている。今から起こるであろう、龐大ぼうだいな喪失感を味わう事に、身を竦すくませる程の恐怖を感じ、脳を灼やくような焦りを覚えている。

「はあ　　っ、はあ　　っ、はあ　　っ……………」

そして、

ボクは、その場所に辿り着く。

「 棺藤……さん」

それは、トモが言っていた路地裏。繁華街の裏手に在る、飲食店などの残飯が納められたゴミ箱などが倒れたりしている、浮浪者ふうろうしゃがいても全く気にならない程の、薄汚い場所。

そこに、まるでゴミのように無造作に 人が、転がっていた。それを形容するならば、糸の切れた操り人形が一番近いかも知れない。手足をだらんと伸ばし、何の力も見られない虚ろな眼差しまなざしを空に投げ、一切の動作も無く座り込んでいる姿。壊れてダメになった人形は、捨ててしまうのが結末オチだ。

その末路。人形は、徐々に寂れていく。

「 棺藤さん！」

声の上擦うわすっていた。掠れた声は、路地の中で変に反響して、遠くでガラスが飛び立つ気配がした。

生気すら感じられない人形 棺藤さんは、虚ろな眼差しから、ようやくボクに焦点トレントを絞り、ボク存在を認めた。切れた唇でゆっくりと微笑の形に整える。

「 ……来て、しまったんだね……」

それは 自嘲じちやくが過分に込められた声音だった。

まるで……ボクがここに来てはいけなかったかのような口調。

でも、棺藤さんがボクを呼んだんじゃないの……？

「 確しっかりして、棺藤さんっ」

駆け寄り、その傷を見ようとして

「 近寄るなッ！」

「 っ」

怒鳴り散らされ、思わず反射的に体が怯ひるんだ。一瞬、何で怒鳴られたのか分からず、困惑した表情を棺藤さんに投げかける。

棺藤さんは一瞬だけ強張った表情を浮かべたけれど、すぐに落ち着き払った、……死期を悟った老人のような顔に戻った。

「……私の首に首輪が嵌められているのが、見えるかな……？」
「え……？」

一瞬後、思考が現実を追いついて、言われたとおり、棺藤さんの首に視線を下ろす。血塗れで薄汚れていたけれど、確かに銀色の首輪が嵌められているのが分かった。首輪の一部は光を発していて、輝くと同時に機械的な音を発していた。時間を計っているみたいな音に、ボクは何を計測してるんだろう、と小首を傾げた。

「これは、……爆弾らしい」
「え？」

急速に体が動かなくなるのが分かった。硬直していく体は、過分に緊張しているからだろう、震えてはいるものの、そこから一歩も動けそうに無かった。

首輪の爆弾。それが何を意味するか位、ボクに分からないはずが無かった。

棺藤さんは震えるボクを見ると、穏やかな微笑を湛えて、話を訥々と続けた。

「……ごめんね、千友ちゃん。私には……私では、復讐は果たせなかった」

復讐。それは、パパを殺した犯人を捕まえる、のではなく、殺すつもりだった、って事だろうか。そうじゃないにしても、ボクにはそう聴こえた。

「でも、分かった事がある。それを……千友ちゃんにだけは、話しておきたいんだ」

「え……」
「君のパパを殺した犯人は」

……どれ位、時間が経つただろう。

ボクは固まっただまま動けなくて、棺藤さんは徐々に、本当に動けなくなっていく。

流れ出た血が尋常じゃない量に達しているのは明らかだった。もう、意識を保っていられるのも以て数十分という頃合い。ボクは、震える唇で言葉を紡いだ。

「どう、して……」

どうして、そんな事をボクに教えるの？

そんな事を知ってしまったボクに、何をさせるつもりでいるの？

ボクはそれを聴こうとして、
既に答を知っている事に気づいた。

棺藤さんが、ボクにさせたい事。もう役目を終える自分の代わりに果たさせる役割。

それは、

「……私は、ここで終わる……後は、誰かに任せるしかないんだ」

血の滲んだ声を発しながら、棺藤さんはどこまでも澄んだ顔で続けた。まるで、もう未練なんて欠片も残していないみたい。全てを任せきった安堵感を、ヒシヒシと感じる。

ボクは、その続きを聴きたくなかった。全力で知りたくなかった。

既に気づいていたのに、気づかないフリをしていたかった。

でも、現実には淡々と進んでいく。

「千友ちゃん……私の代わりに、

復讐を果たしてくれないか？」

ああ、やつぱり。

棺藤さんって、卑怯だ。もう去りゆく人にそんな事を言われたら、
頷く以外にどう応えられる？ この時点で、ボクに選択権なんて無いのに。

これは 命令。ボクに課した運命。

何より 待ち望んでいた、経過だ。

「やだよう、死んじゃやだ、棺藤さん……!!」

絶する事もできない。ただその場で、棺藤さんを見守って、泣き崩

れる事しかできない。

あまりに無力で、自分に嫌気が差す。どうしようもない無力感は、限りなく絶望に近い。

ボクじゃ棺藤さんは救えない。……でも、彼を救う方法が、一つだけ。そう、たった一つだけボクに残されている。それはつまり

「……最後の、お願いだ……千友ちゃん」

「……っ」

どれだけ泣きじゃくっても、どれだけ苦しんでも、現実は何も変わらない。何も変えられない。

ボクに残された道は、結局一つだけだった。

「……分かった」

それが最後、ボクが、棺藤さんに掛けられる、救いの言葉。言うしかなかった。言わざるを得なかった。棺藤さんを助けるには、こうするしかなかった……っ。

嘘なんか吐きたくない。感情を偽るなんてできない。だからこれは……本心からの言葉。ボクは棺藤さんに代わって、パパを殺した犯人に。復讐する……。嫌な訳じゃなかった。したくない訳でもなかった。ただボクは、見て見ぬフリをし続けたに過ぎない。

いつかはしなければならなかった、復讐。パパを殺された恨みは、どこかで晴らさなければならなかった。じゃないと、パパが浮かばれない……ママがいつまでも悲しみ続ける。

多分ボクは、心の底では犯人を死ぬほど恨んでいた。殺したいとも願っていたに違いない。故に今は、心中を色んな感情が渦巻いていた。殺意・怨嗟・憎悪……負の感情がとぐるを巻き、ボクを縛りつけていく……。

だからきつと、棺藤さんの言葉は引鉄に過ぎなかったんだと思う。

違う。棺藤さんの、この後の事象が、ボクに多大な影響を及ぼすんだ。

「パパの仇を、討つよ……ッ！」

絞り出た声は、果たして胸が締めつけられた。

怖くて上手く出なかつた声を掬い取った棺藤さんは、落ち着いた微笑のまま、ゆったりと小首を傾いだ。

「……ありがとう、千友ちゃん」

「っ、棺藤、さん……っ」

痛々しいまでの笑顔を見せられて、ボクはもう胸が張り裂けると思う位に、苦しくなった。息もマトモにできない位に、締めつけられて息苦しい。切なくて、喉が痛い。

「棺藤さん！」

そこに、第三者の声が飛んできたのは間も無くの事だった。

駆け込んで来たのは、夢成さん。包帯をあちこちに巻いた痛々しい姿で、必死に駆けて来て、近づくに連れて愕然とした表情を浮かべていく。蒼白な顔を見て、ボクは容易に心中を察した。

後からやって来たのは、同じく包帯をあちこちに巻いたヒーさんと魅織さん。その後、刻条さんが三角巾で腕を吊って遅れて登場した。全員、緊張した面持ちが取れないようだった。

「……濟まないねえ、こんな……無様なところを、見せちゃって……」

息も絶え絶えに告げる棺藤さんに歩み寄ろうとした夢成さんが、その表情を一瞬で察し、足を地面に縫いつける。

「何ですかッ！……ッ一言くらい、相談してくれたっていいじゃないですか、棺藤さん……！」

悲痛な顔。今にも崩れそうな表情を精一杯保つての宣言に、棺藤さんは柔らかく応じる。

「……言ったじゃないですか。私は……君達には危ない橋を……」

「だからって、あなたがこうなったら意味が無いでしょうが……」

激昂して叫ぶ夢成さんに、ボクは一瞬ビクツと震える。こんな怖い形相の夢成さん、初めて見た……。

何より、ここまで真剣に話をする夢成さんも、初めてだった。

「……俺達は、何のためにあなたに……ッ」

言葉に詰まったのか、それ以上の声を発せられない夢成さん。俯いて、唇をキツく噛み締めていた。

隣から魅織さんが肩を叩きつつ、棺藤さんに向かってしゃがみ込む。その距離が、心の距離みたいで……ちよつと悲しくなった。

「……カンさん。ちよつと独走し過ぎよ、もちつと私達にもお仕事回してくんなきゃ」

「……君にも、色々苦勞を……掛けた、ね……」

「んふふ 気にしてないわよ、そんなの ……でね、私から一言言わせてもらうなら 『お疲れ様でした、所長』」

それは、とても自然な笑み。柔らかくて、和やかで……まるで、いつもの職場の空気をここに持って来たような、そんな穏やかさが漂っていた。

それを受けて棺藤さんは一瞬面食らったように表情を移ろわせたが、すぐに柔和な微笑に戻る。何かを悟ったような、微笑に。

「……ありがとう、魅織くん」

「……」

刻条さんは何も言わずに、一步離れた場所から全員を見渡していた。身動き一つせず、ただいつもの機械的な眼差しを棺藤さんに注いでいた。

「……蛍くんも、そんなになるまで、よく……頑張ってくれたね……」

「……お安い、御用……」ポツリと、それだけ零す刻条さん。

棺藤さんが苦笑を滲ませると、刻条さんは小さく口を動かした。

「……後は、……任せて」

「……ありがとう」

「……かつ、棺藤さんっ」

ボクみたいな泣き顔になっていたヒーさんが、棺藤さんに駆け寄ろうとして、魅織さんに止められた。

「僕、すぐに一人前になってみせますからッ！ ですからッ、です、から……ッ」

「……ありがとう、火之介くん。……期待、してますよ……？」

満ち足りた笑顔を浮かべている棺藤さんを見て、
本当に最期なんだって思考が到達してしまい、本気で死にたくなった。

大切な人を失いたくないと思うのは、これで二度目。一度味わった分、その気持ちは強烈なモノになっていた。息もできない苦しさを胸に生じさせ、頭が壊れそうになる位に混乱して、吐き気を催す位に切なくて……ッ。

「……ああ、そうだ。……夢成くん。最後に一つ、お願いを聴いてくれないかな……？」

「……？ え、ええ」

「とうさか 柊坂流天くん、という人を助けてやってほしいんです……」
何だって？

ボクは一瞬耳を疑った。何で、流天くんの名前が棺藤さんから……？

疑問を覚えながらも、話は着実に進んでいった。

「……分かりました。棺藤さんの命令おねがいです、死ぬ気で守りますよ……」

「……！」
「ありがとう……今、彼は、断花たちばなの屋敷にいるはずです、お願いしますよ……」

「はい……！」

その、直後だった。

「本当に、ありがとう」

とても、陳腐な音だった。

アニメで流れるような、何でも無いちょっとしただけ大きな爆発音が

鳴り響いて、 棺藤さんの首が跳び 鮮血の雨が降り注ぐ。
さあああ と、辺りを赤一色に染め上げ、ただただ空虚な
空間が、形成されていく。
誰かが叫んでいた。胸を押し潰さんばかりの嗚咽。おえつそれが誰のモ
ノか分からなくて、
後で、自分が発していたんだって、気づいた。

最後に浮かべた笑みが忘れられない。
人は最期に、あんな笑みを浮かべられるんだろうか。

……そうして、ボクは。
大切な人を、再び失う事になった

【踪偵 玖】 棺藤

……気づくと、夜が明けたようだった。

全身が鉛のように重く、熱を持ったように熱く怠い。動かそうと思っても神経が通っていないのか、一切の身動きができなかった。

……瞼も片方が上がらない。いや、もしかしたら眼球が潰れたのか。片目に映る視界は、騙し絵のように歪んでいた。マトモな物なんて一つも無い、まるで現実を感じられない世界が形成されていた。

正直、この先の展開が分かっていた。

首に取り付けられた首輪の警告音は、徐々に感覚が狭まってきている。幾許も無く逝去するのは避けようの無い事実だと受け止めていた。

これで私は終わり……何にも終止符を打てずに、自身にのみ終止符を打つなんて。何て情けない事だろう。とてもじゃないけど、オトさんには顔見せできないな……。

自身が転がっている場所がどこかの路地裏らしいのは、徐々に鮮明になっていく視界が伝えていた。こんな誰にも知られないような場所で消えていくのはどこか幻想的だな、とか上手く働かない頭で考えてしまう。

「……おじ様、気づいた？」

声。それはもう聴く事も無いだろうと思っていた類のモノで、……ただ、予想外、という訳ではなかった。

視界には映らない女の子を頭の片隅で捉え、切れて痛む口を何とか動かす。

「……いやあ、君には敵いませんね。 トモちゃん」

「あははあ 当つ然さあゝ あたしこれでも優勝目指してんだからねっ」

トモちゃんがかむような笑みを浮かべているのが瞼の裏に浮かんた。……全く、彼女には敵わない……。全てを見越し、同時

に策を企てる彼女には。

その場にいるのどこにいるのか見えないトモちゃんに、私は静かに言を飛ばす。

「……そうかも知れないな」

「うん？」

「彼 不死 とも呼べそうな流天くんが亡くなったんだ。後は君の策でどうにでもなる、だろうね……」

……本当に、彼には悪い事をした。私の復讐のためだけに命を落としたようなモノだ。斯く言う私の復讐は成ったのかと言えば、間違はなく失敗に終わっている。皮肉だな、なんて簡単な言葉では片づけられない程、彼に罪悪感を覚えていた。

結局何のためにあの場に居合わせたかも分からぬまま、彼は逝ってしまったのだから。

「なに言ってるの？ おじ様、流天くんは生きてるよっ？」

「……まさか。あれだけ銃撃を受けて……もうボロボロになっていましたよ？ それなのにどうやって……」

「だって、現に 茅夏嬢を殺しちゃってるし」

一瞬、表情が出てこなかった。

彼女の発した言葉を理解するのに幾分時間が掛かり、ようやく咀嚼した頃には疑問が浮かび上がってきた。

「茅夏嬢を……殺したんですか!？」本心からの驚きだった。

「うん。これでゲームの参加者は一人減っちゃったよ。……ま、もう後ちよつともう一人減っちゃうけどねー」

「……そう、ですか……」

生じた想念は 安堵。

私はどこか残念に感じつつも、確かな安堵を覚えていた。これで、オトさんも浮かばれる……そう思っ止まなかった。

が、それも次の一言で木端微塵に打ち砕かれる。

「おじ様 音澄忠を殺した犯人の名前、知りたくない？」

「あまりに強烈な言霊ことだまに、私は意識が破壊されるような錯覚を感じた。」

オトさん殺しの犯人……？ 何で、トモちゃんがそれを……！？
聴きたい事は山ほど在るはずなのに、強張こわばった喉のどは呼気すらも吐き出させない。苦しくて喘あえぎを漏もらしていると、トモちゃんがクスリと微笑む気配がした。

「知りたいよねえ？ 死に物狂いで調べてたもんねえ？ あたしにも縫すがってきたのを憶えてるよお 何でもするから教えてくれって、土下座までしてたもんねえ」

視界に映らないのに、私には完全に視みえていた。 嘲笑うしろめを浮

かべて私を見下す彼女の姿が。人を人だと認識せずにゴミクズのように見下す、上位に立つ者としての視線を、目の当たりにしていた。 嘲弄ちょうりやうとも思える口調で彼女は語を継いだ。

「結局最後の最後まで分からなかったんだよねえ？ 誰に聴いても答えてくれなかった。答えられないんじゃないやなくて、誰も知らないんだもん、当然だよお でも、あたしは知ってる。それを、君は疑えるかにやあ？」

……分かつてる答を訊く彼女は、やはり根が腐ってるんだらう。
下唇を嚙かんで、狂いそうになる感情を何とか抑え留める。狂うには、まだ早い。

私には真実を知る権利が在る。私には オトさんを救う義務が在るんだ……！

「クスクス イイねえ、その表情イイよお、おじ様 カッコいい」

「……史上最低のクズですよ、貴女は……！ どこまで人をバカにすれば……！！」

「あはははっ 褒め言葉をありがとう〜 そんなおじ様には教えてあげちゃう 彼を殺したのは」

……どれ位の時間が経っただろう。

彼女は笑いながら携帯電話で連絡を取り、千友ちゃんや夢成くんを呼び集めているようだった。私の最期を全員に見届けさせるためであるが、彼女の目的はそこにはない。彼女の目的は

……それを分かっているながらも、私はその行為を自分で肯定していた。私にできる事など限られている。私が何かをして策を壊そうとしても彼女の事だ、すぐに軌道を修正するだろう。ならば無駄を省き、彼女の筋書き通りに終えるのも、また私の仕事だと割り切った。

「私は……やっぱり 無力 だった、な……」

彼女が立ち去る気配がした後、自然と口を突いて出た愚痴だった。そう。私はどうしようもなく 無力 だった。何をしても成功する事は無く、何をしてもしようもなく行く事は無かった。全てが裏目に出る。自分の行為に意味性が皆無だと、何度だって気づかされる。そんな 縛魂 を抱えて生きてきた。

何て意味の無い人生だったんだろうって、今更のように感じる。最期の最期で「ああ、今まで生きてきて良かったな」 そう思える事だけを願って生きてきた結果がこれだ。結局、私が残せたのは憎しみの連鎖の経過だけ。何の価値も無い、たったそれだけを生んで、私はこの世を去る。

涙が込み上げてくるかと思っただが、最早そんな感情すら残っていないらしい。ただ空虚な感覚を味わい、虚ろな視線を空に逃がした。黎明の空は少しずつ明るくなっていった。もう少して大通りに人が溢れる事になるだろう。そんな時間帯に、私は一人で消えゆく命を弄んでいる……。

「 そんな事は無いよお 」

弾けた声はしかし、私の心を揺さ振る事は無かった。

未だ私を見下し続ける彼女は、決して嘲笑を崩さず、ただ素直に自分の気持ち吐露してくる。

「君は大事な捨て駒 とうっても役に立ったよ、おじ様 」

「……では、最期にその捨て駒から一言言わせてくれませんか……？」

苦し紛れの言葉に、彼女が頷く気配を察し、私は言を繋げた。

「じゃあ　くたばれクソヤロウ」

心底嘲った笑みを浮かべて、吐き捨ててやる。

それだけで満足だった。　無力　な私にできる最大限の抵抗だった。

……オトさん、済まない……本当に、済まない……。

私は、君の娘までこの連鎖に巻き込もうとしている……君は決して望まなかっただろうに。でも、私は望んでしまった。一度望んだモノは、そう簡単には変えられないんだよ、オトさん……。

「……ふふ」

不意に笑みが零れる。もうそこには彼女の気配は感じられない。何だかんだ言って、私はこんなにも楽しめているんじゃないか。

「やっぱり、私達は似た者同士だよオトさん。だって……」

　　こんなにも、頑固者じゃないか。

最期に見えた皆の顔は、とても澄んでいた。

もう知覚できない世界に別れを告げ、

私は、オトさんと同じ世界へ旅立つ

【侍邸 陸】 流天

……どれだけ経った？ 空は大分明るくなってきたけど明確な時刻は分からない。

断花屋敷^{たちばな}の庭先に転がされたまま、かなりの時間が経過していた。何でも無い場所で死んだフリをし続けるのも、至難の業だと思うのは俺の気のせいかな。

何でも無い事も無いかな。周囲には俺と似たような死体がズラリと並んでいるんだから。その数は、とてもじゃないが数える気にならない程だ。明るくなるに連れて分かったが、かなりの人数を誰かが殺している。それも刀傷じゃないところを見ると、あの影虎^{かげとら}とか言う女がやったのか、或いは^{ある}……。

静かに考えられる環境にいられたのは救いだ。ゆつくりと時間を掛けて思考ができる。先程、例の影虎が死体を掃除しに何度かやって来たが、今はそれも無い。休憩時間か何かだろうか、十分ほど姿を見ていない。……多分、次に現れた時には、俺も死体^{かれら}と同じ場所に移されるんだろう。

今、俺がいる場所は庭の隅。死体の仮置場と思われる場所だ。屋敷からは茂みの影になって見えない場所に当たる。なるほど、客人には見せられねえよな俺みたいなゴミはよ。

相手から見えない分、俺も少しばかり動いて辺りの様子を窺^{うかが}ってた次第だ。その時に分かったのだ、死体のほとんどが刀傷で殺された訳ではない事に。よくは分からないが、圧倒的な力で捻^ねじ切られたり貫かれていたりする死体が多い。……考えたくは無いが、どうやら想像以上の化物がこの屋敷には存在するらしい。

がさ、と物音がしたので、俺は静かに息を潜^{ひそ}める。来たなああの影虎の姿を影でだけ確認する。

「……………」
寡黙な忍者、とでも称すべき彼女は、ただ黙々と死体を担ぎ上げ

ては運んで行く。どこに運んでいるかは分からないが、返ってくる事は一度として無い。焼かれているのか、捨てられているのか、はたまた解体バラされているのか。見当も付かないが、付けたくないのが本音だ。

ひたすら息を潜めて待つのは骨が折れた。体を癒すにしても、もうちつと考えれば良かった。寝てるだけで疲れるって……俺も歳を喰ったモンだと自覚する。力を抜くに抜けないこの状況を誰かに分かってもらいたい。

そして、時は満ちた。

俺へと歩み寄る影虎の姿が気配で知れる。あいつ、気配を消すとかそんな事を死体には行わないみたいだ。……当然か。まさか死体が襲いかかってくるとは思いもしないだろう。

あと三步。何の警戒も無く近づいて来る。殺すなら今を措おいて無いに違いない。逆に、今仕留めなければ後々面倒だ。一撃で仕留める。あと二歩。あと一步。俺は全身に力を込めて全力で動く！手には近くに落としておいた短刀が握り締められている。完全に不意を衝ついた一撃。イケる！

「ッッ！」

無音の、それも完全な裏を衝ついての強襲を受けて尚なお、影虎は躲かわしていた。寸前で身を翻ひるがえし、息を荒らげつつ後退する。が、この勝負、俺に分が在るようだった。何故なら

「……ちッ。テメエも大概化物だなおい。今の一撃躲かわすか？ ……ま、躲かわしきれてはねエようだがな」

「……………」
確かな手応えを感じていたんだ。それも、かなり急所に近い場所のな。

見て分かった。俺が抉えぐつたのは 奴の右目。影虎は流血を留めようとせせず、ただ右目から赤い涙を流し続けている。

これで天秤てんびんはかなり俺に傾かたいた。片目を潰された奴がどれ程の戦力を誇るか知らないが、最悪五分には持ち込めただろう。今の一撃

で殺せなかったのは惜しいが、それでも好成績をマークしたのは美味しい。

「……さてと、テメエにやあここでブツ殺されてもらうぜ？ それとも、主君に助けを乞いに尻尾を巻いて逃げるか？ 俺ア構わねエぜ？」

「……嘗めるな、下種が」

影虎が動くと分かっていても、俺はそれを止める術を持たなかった。本当に一瞬 影虎は俺に近接し、短刀を首に走らせていた。咄嗟に気づくも何も既に手遅れ、俺の首は掻っ捌かれ、次の瞬間にはパツクリと割れて出血がドバー。

「ガッ、あッ、くッ」

片手で首を押さえたところを隙だと認識されたようだ 次に持っていたのは心臓。首を捌く刹那に、短刀を切り返して心臓に突き立てるその速さは、称賛に値する力量の代物だ。一瞬であるうと俺を殺したその所業は鮮やか過ぎる。

咳き込むように喀血し、思わず蹠踉る。踏み止まらないと脳が命令しても、俺はそれに従順に従うつもりは更々無かった。一歩踏み出して体を支え、ほとんど無意識に持っていた短刀を振るって影虎を追い払う。影虎の退く気配。一瞬だけ安堵を覚える。

脳に血が行かないからだろう、発作的な貧血に見舞われ立ち眩みが生じる。視界が歪むが構っていられない。それこそが隙になり、且つ奴の攻撃を立ち入らせる時間を生み出してしまふ。

目眩に耐えて影虎を視界に納め ようとして、その姿を探す破目になる。ヤバい、見失った 気づいたのは、背中から心臓を一突きにされた瞬間だった。クソ、いつの間に背後に

多大な喀血をしながら振り返り様に短刀を振り抜く。手応えは無し。空を切って振り返るが姿を捉える事は敵わない。クソ、切りつけるなら眼じゃなくて足を狙うべきだったか。今更悔やんでも意味が無い。

す、と何かが眼に突き刺さった。抉られるような怖気が走

り、思わず呻く。気持ち悪い感触が全身に行き渡り、蔓延する不快感に吐きそうになる。透かさず眼に刺さった物を引き抜く。クナイ、と呼ばれる武器だと気づいた刹那、再び首に裂傷感。

「ぐッ、あああああああああああああー！」

やられてばかりの俺だと思ふなよ！ という意味合いを込めての反撃を繰り出す。首に刃物が添えられた瞬間を狙い、俺は短刀を振り抜く。手応えを感じて、すぐにそちらへ視線を飛ばす。片方の眼球が潰されてるために距離感がイマイチ掴めなかったが、影虎が手首を押さえて跳び退るのが映った。良し、あの様子から見て、折ったかもしくは 骨まで達したな。

苦悶の表情は一切浮かべず、ただかなりの発汗を見せている影虎を見て、今の一撃が相当損傷を与えたと認識する。通算三度目のダメージだ。これで右腕が使い物にならないだろう。確か、肩には銃弾が喰い込んでるはずだしな。

「……………」
無言の重圧を浴びせかけてくる影虎に、俺も無言で応じる。言葉なんてこの場に必要無い。要は 殺すか、殺されるか。それだけで充分だ。

風が凪ぎ、ひたすら肅然たる空気が流れ まるで時が停まったかと錯覚した、その刹那。 奴が動いた。

最早一刻の猶予も無いと判断したのか、狙うは頭 恐らく分離しかけているこの首を搔っ飛ばしに来るつもりだろう。もうそれ位しか殺害方法が見つからなかったに違いない。だが、俺とてそんな恐ろしい真似を許す訳にはいかない。全力で阻止に当たる。

ほとんど閃光に近い空間で、俺は短刀を振り抜く。 いん、と鋼同士が搗ち合う音が響き、青白い火花が散った。 が、奴はその僅かな隙すら許さず、衝突した威力を活かして反転し、そのままの勢いで俺の首に狙いを定め

そして次の瞬間には、勝負が着いていた。

「……………」
「こぼ」

止め処なく鮮血が口から溢れ出る。あまりの出血量に喉が痺れたような感覚に陥り、ほとんど痛覚が麻痺していた。死んでもおかしくない……否、俺じゃなかったら確実に息絶えてる状態だ。俺だからこそ、こんな状態でも存命できてる。

首に喰い込んだクナイの刃はしかし、俺の首を刎ねるには膂力が不足していた。俺は彼女を抱き締める形で寄り添い、力無くその体に凭れかかっている状態だったが、確実に、俺は勝利を納めていた。

「……申し、訳……あり、ま、せ……こと……す、が……さ」

ずる、と俺に体を預けるように倒れ込んできた影虎に、支えを無くした俺は一緒にその場に平伏した。

影虎には抱き着く形で短刀を押し当てたのだ。……鎖帷子なんてモノを着てたらどうしようかと思っただが、それは杞憂に終わった。心臓に突き立てた時点で、彼女は力尽きていた。

「げぼツ、が、ば……ッ」

喀血が止まらない。咽返るような生臭い匂いに鼻がやられ、とてもじゃないが、マトモな神経でいられなかった。立つ事すら、ままならない。単に流血が激しいのと、あまりに致命傷だという事もあるが、今は本能的に動きたくなかった。

これがお付きの人間の強さとして、主たる断花の強さは一体どれだけなんだ……？ それを考えるだけで、胸糞が悪くなりそうだった。

「……はあ、ぐ、あ」

何とか喉が修復してきた。喀血も納まり、流血に因る貧血状態も徐々に回復してきた。後は……

「……テメエも、よくやったよ」

視線を下ろし、最早骸と化した影虎を見つめる。

本当に化物だ。……あの飛島茅夏が組織力で人間を駆逐する指揮官だとすれば、こいつは純粋なる殺人兵器だ。命令さえ下れば、俺

のような 不死 であろうが殺害を遂行する。それは既に人の域を超えた 兵器 だ。理性や常識なんて関係ない。そこに在るのは命令を遂行する絶対的な意志のみだ。

……そんな兵器を従える本元は一体どんな化物か。……こいつでこれだけ苦戦してるんだ、マジメに考えて怖気が走る。

それに あの断花つて野郎、キルトをぶった斬ってるじゃねエか。キルトは俺とは別種の 不死 を持っている、それを一刀両断にするなんて……かなりの兵に違いない。

「……これだけじゃ戦力不足だな」

いつの間にか力強く握り締めていた短刀を見下ろし、苦笑が滲んできた。何より、断花が使うのは太刀だ。刀身の差が在り過ぎる。ただでさえ野郎はキルトをぶった斬れるような輩なんだ、あまりに戦力に差が付いては勝負にさえなるまい。

だが……、

「んな都合のいい物がそうそう落ちてるかつーんだ」

……まあ、使える物は使うのが俺の主義だ。死体置場になら拳銃くらい落ちてるだろう。あれだけの死体を築いたんだ、中には色々な武器が落っこちてる可能性だつて否めない。

大分動けるようになってきた事だし、そろそろ移動を始めよう。

キルトは全快で挑んだ方がいいような事を吐かしてたが、そんな悠長な事はとてもじゃないが言ってられない。あいつが危機に曝された時点で俺は破滅なんだ。

そう。これは利点であり弱点だ。俺はキルトが死なない限り死なない。だが、キルトが殺された時点で俺まで絶命になる。巧く行けば二人揃って生きてこの屋敷を脱出できる。だが、どちらか一方だけ、というのは実質あり得ない。どっちも生きて出るか、どっちもここで絶えるか。二つに一つ。俺は何が何でも前者になるように行動しなければならぬ。

そのためには少しでも早い行動が重要になってくる。恐らく断花は俺が死んだと思ひ込んで。ならばそれを利用して不意打ちを

否、無理だな。あの侍野郎の事だ、何気に気配なんてものを平気で読んでいそうな気がする。

虚を衝くのが無理でも、俺が生きているという事実はかなりの衝撃になるだろう。それを使えば少しは隙が……とにかく、何が何でもキルトを奪取する目的に変わりは無い。少しでも俺の命の保証を保たねば、いつまで経っても平静でいられない。

よし。大体の目的は立てた事だ、そろそろ計画に移るとしようじゃねエか。

待ってるよキルト。俺が必ず助け出してやるからな！

【侍邸 漆】 キルト

……胸の痛みが引き、意識もハッキリしてきた頃、私はコッソリと布団から起き上がった。

服が着替えさせられている。白色の薄い着物を一枚だけ羽織らされてるのか、下着の感覚は無い。やけにスースーするが、この際構わない。とにかく動ければいい。

胸に手を当ててみる。着物を少し肌蹴はだけて視認すると、……確かに裂傷痕が出来上がっていた。だが、傷は既に塞ふさがっている。……あの影虎かげとらとかいう娘、薬師くすりしか何かだろうか、調合した薬がとても利き、一晩しか経ってないのにほとんど全快している。疼うずきのようなものこそ感じるが、それ以外は平生へいせいと何ら変わり無い。全く支障を来たさない動きができそうだ。

部屋の中を見渡してみる。畳敷きの和室には、私の寝ている布団以外の置物が一切無い。外はもう明るく、障子越しの陽射しが心地好い。その明るさでさえ、置物が一切確認できないんだ、本当に何も置いてないんだろう。

ただ、部屋の隅には私の私物が置いてあった。血塗まみれになった服が綺麗に洗われて折り畳みである。その上には

「……………」
私の愛用品 特殊警棒が鎮座していた。

これは何らかの挑発行為だろうか。敢あえて敵の武器を置いておく事で、再び自分に刃向かわせるための意欲を養う……？ ……あの戦闘狂の事だ、強あながち間違えと言っ訳でもないだろう。

取り敢えず誰かが来る前に着替えを済ませておこうと思ひ立ち、着物を脱ごうとして、

「キルト」

さ つ、と障子が滑る音がして、男の声も一緒に飛んできた。

「あ？」

次に間の抜けた声が聴こえて、私は振り返った。着物は肌蹴たま
ま。廊下に立つ影を見て、私は安堵の息を零す。

「……流天か。驚かせるな。奴が来たのかと」

「まッ、待て待て！ その前に服！ 服を着ろ！ 見えるッ、から
！」

……何をそんなに慌てる必要がある？ 確かに、服は今着替えよ
うと

その時だった。返答しようとした喉が凍結したのは。

流天の胸から、何かが突起していた。

「あ？」流天は何が起こったのか分からず、自らの体を見
下ろす。その時点でようやく異常に気づいたらしく、徐々にその顔
が白んでいった。

流天の胸から出ていた突起 それは、白刃だった。

断花の日本刀が、流天の心臓を貫いていた。

「くく、矢張り生きておったか、小僧？」

流天の背後に立ち、壮絶な笑みを浮かべて刀身をスライドさせる
断花。徐々に切断されていく流天は、呻きとも喘ぎとも付かない声
を発して、動くに動けず身悶えしていた。

「ガッ、アあ！ ぐ、ア、テメエ……ッ！」

「儂は悦んでおるのだよ、小僧。貴様の様な輩を此の手で殺められ
ると思うだけのお、武者震いが止まらぬわ……！」

ざん ツ、と心臓を両断し、流天が障子を薙ぎ倒して転がる。
血糊が飛び散り、私の白い着物に赤い斑点が浮かび上がった。

それは声にならない悲鳴だった。流天が痛みを堪えてるんだらう、
唇を噛み締めて声を殺している姿が視界に飛び込んでくる。胸を押
さえて、必死に耐えていた。

……何でそんな事をする必要がある？ 痛いなら、叫べばいいじ
やないか？ そう思うのに、何故か流天はひたすら痛みに堪え、息
を殺し続けた。

「さて、小僧。聴かせて貰おうか。影虎は如何した？」

ドスの利いた声を唸らせ、断花が尋ねてくる。流天はその間に回復したのか、胸を押さえながらも立ち上がっていた。

「ゲボツ……さてな、草葉の陰で犬のクソにでも成り果ててんじやねエか？」

「くつ、……そうか。惜しい奴を亡くしたのう。……じゃが、其れに見合うだけのモノが在る。此れは……相違無く影虎のお陰じゃの声を殺して失笑する断花。……この戦闘狂、完全に標的を流天に絞つたな。」

流天は流天で腰から短刀を抜き始める。……今更だけど、何でも着物なんだ？ 今、この空間じゃ着物が流行ってるんだろっか。

断花がやけに澄んだ表情で刀をぶら提げる。何の構えも無い、ただ抜き身の刀を下ろしていた。

「では、始めようか小僧。死合いをのう！」

絶瞬、私は流天へ踏み込んで特殊警棒を振り上げた。腕が軋む。特殊警棒によって阻まれた刀身の膂力が、全て私に注ぎ込まれ、私の腕は悲鳴を上げた。

両者の驚いた表情が同時に浮かんで、私は不意に口許に笑みが浮かんだ気がした。

「何をする小娘？」

「キルトツ！」

「……勝手に話を進めるな。私を忘れていないだろうな、化物の狗ピクリ、と断花の柳眉が鬨められる。

「口が過ぎるぞ小娘。貴様は捨て置くには惜しい逸材じゃ、生かしてやっておる事を忘れるな」

「それはあんたの主観的な考えに過ぎない。私は私の意志で生きてる。何もあんに生かしてもらってるつもりは無い。欠片も無い」

「余り戯けた事を吐かすなよ餓鬼が。此处で斬り捨てられたいか？」「やれるモンなら」

「良かるう」

奴の意識が、こつちに向く　その瞬間だった。

何より先に感じた感情は　怖気。絶対的な恐怖に因る絶望で、私の心臓は驚掴みにされていた。

呼吸の仕方さえも忘れそうな感覚に、私は咽返った。あまりに絶大で、あまりに崇高過ぎるその存在は、まるで

「……姫。此处は儂に任せておけぬか」

「……」

姫。そう呼ばれる絶対的支配者が、そこに君臨していた。

襖を開けた先　流天の背後に、彼女は立っていた。汚れたモノを一切知らない、凄絶な程に完璧だが、あまりに狂れたその存在は　崇高な『神』とは呼べず、ただ『化物』と称する以外に無い。

化物は何の痛みも知らないような穏やか過ぎる表情を湛え、ゆつくりと、そして音も立てずに流天へと歩み寄り

ずぶり、と」

え？」

何の抵抗も無く、素手で心臓を刮り貫いた。

どぼ、と血液が溢れ出し、見る見る畳を赤く染めていく。

「がばッ、ごお、ア……！」

咽返るような血腥い世界で、確かに流天は生きていた。何度も何度も喀血を繰り返し、ただただその魔の手から逃れようとものがく様は　まるで生きた心地がなかった。

見つかったのだと、一瞬で絶望に陥れるに相応しい光景だった。

私は、断花一人だけを相手にするのなら、勝算は在ると考えていた。……いや、確実に勝てるなんて、そんなおこがましい事は思っていない。ただ、流天もいるんだ、二人合わせて戦えば何とか……そんな希望的観測が頭の片隅で働いていた。

だが、それを絶望が塗り潰す。

この化物には敵わない。それが既に本能で分かってしまったているんだ。何をどう足掻こうが、彼女には敵わない。同じ土俵に立った

時点で、敗北は完全に決定してしまっている。それは既に恐怖の域を超え　　深遠なる絶望へと叩き込む。

もつどうしようもない。そう思って、私は諦めようと

「　　っざけんな、おい！」

血の声で、叫ぶ男が、いた。

【侍郎 捌】 キルト

喀血かっけつを繰り返し、心臓を剝くり貫ぬかれながらも、絶望に身を浸しながらも、彼はまだ、生きていた。生きて、私を見ていた。

「動け！ こいつらは俺が殺しといてやるから、テメエは早く逃げやがれ！ がッ、ア！ いぎイ、ツク、じゃねエと、俺もテメエもここで終わっちまうだろオが！」

それは、

……それは、何と言う強さだろうと、私は不覚にも心を震わされた。

生存への執着は、ただただ醜みにくいモノだと、いつも思っていた。でも、彼は違うような気がする。どんなに醜みにくくても、生きてこそ今が在るんだ、……彼が、そう言ってるような気がした。美しいと、感じてしまった。

醜ければ諦あきらめるのか。……否、私はそんな陳腐ちんぷな言い訳で終わる訳わけにいかない。

私はこのゲームを勝ち抜くと誓った。何としてでも、生き残ってみせる。

何より　　こんな所で死んで堪たまるか、という気持ちこころが復活して
いた。

「振り返んな、逃げる、キルト！」

「　　」
後はもう、運ゆたに委ゆたねるだけだ。私はやれるだけの事をやって、それで終わるなんて認めない。私は生き残る。何としてでも、化物を敵に回してでも！

特殊警棒を振り切り、断花たぢはなの日本刀を弾はじくと、咄嗟とつさに隣の部屋へフスマ続く襖ふすまを突き破り、屋内へと駆け抜けた。形振り構かまう余裕なんて微塵じんも無い。ただ今なすべき事は　　奴を殺す事、それに尽きる。
「くッ、逃げてても無駄じゃぞ小娘。此処こゝを何処どこだと思おもっておる？」

「儂の領域を侵す愚、其れ迄にしておけよ」

陰鬱な笑声を上げながら追って来る気配を感じ、私は僅かに安堵した。もし断花まで流天に意識を持っていかれたらどうしようかと思っていたが、何とか杞憂に終わったようだ。

となれば、後はやるだけやるしかない。疼く胸を押さえながら、何とか距離を離し

「無駄だと」

振り返らなくても分かった。真後ろに、奴がいる！

ほとんど本能的に横っ飛びし、即座に反転して特殊警棒を振り抜く。ぎんツ、と鋼が搗ち合う音が弾け、衝撃で腕が痺れるが、構ってられない。とにかく奴の攻撃は全て防がねばならない。一度でも受けてしまえば短期戦すら不可能な状態に追い込まれてしまう……！

「言っておるじやろうが！」

それは 氣迫と呼ばれる類の重圧だった。圧倒的なまでの氣迫は、時として空間にまで作用を及ぼす。私はただの怒号に圧され、それだけで体が震えたのが分かった。

一瞬踏み止まり、次の瞬間には殺意を滾らせて、特殊警棒を振り抜く。今度は横に薙ぐように一閃 断花の首を狙った一撃だったのだが、それも結局防御に終わった。断花が私に向かって袈裟懸けしてきた攻撃に合わせるように警棒が噛み合い、再び凄まじい衝撃が腕を襲った。

痺れるのさえまどろっこしく、三度特殊警棒を振るう。再び重い衝撃、そして腕の麻痺感。

何度も何度も噛み合い、躲し、搗ち合わせた。衝突し合うのを数えるのも面倒になる頃、大きく距離を取って断花が刀を下げた。

「……くくツ」

陰鬱な失笑を上げると、断花はゆらりとこちらを見つめた。濁った眼差しは、禍々しい程の悪意を練り上げている。それは敵意や害意とは別のモノ 殺意と呼べる感情が、彼を包み込んでいた。

……いや、違うな。彼が殺意を内包してるんだ。

肩で息をする程に果てていた私は、そろそろ勝負は着くと確信した。……どちらにしろ、長期戦は望めなかったんだ。次で、決める。

「くくく……流石じゃ、キルト。儂が見込んだだけの事は在るではないか！……だがのう、儂はもう貴様に付き合う程、暇ではなくなった。姫には悪いが、アレは儂の獲物じゃ。儂と殺し尽くし合ってこそ価値が在る。最早貴様では物足りぬのだよ、小娘」

……そうか。それならそれでもいい。私もあなたには初めから興味が無いんだから。

断花は瞼を下ろし、戦闘中だと言つのに黙想に入る。不味

い、と気づいた刹那には、その変化は終えていた。

肅然たる静寂を超えた先には 限界を超えた化物が降臨する。

「箠外し！」

黄金色の瞳が開眼し、私は悟る。

決めなければならぬ。今、この瞬間を以て。

殺せるか 否か。

それは同時に、賭けでも在った。命を賭した、大博打だ。

勝てば存命が約束され、負ければ逝去が確定する。

私はその間際、何も無い空間を蹴り上げていた。

これが最後の証明。私が勝つか負けるかの、最後の賭博。

結果は

「なッ!?!」

かんつ、と。日本刀が天井に突き刺さった。

私が蹴り上げた空間には断花の手が在った。つい先刻まで大層大事に握り締めていた日本刀の柄を、私は蹴り上げたのだ。それは、断じて狙った訳じゃない。私はただ、何の予備動作も無く、一切の意味も無く、ただ蹴り上げただけ。

そう。これは、運の問題だ。

何億、何兆、いや、そんな数の単位では推し量れない程の膨大な

可能性の一つを、私は引き当てたに過ぎない。

今の現象を客観的に答えるならばこうだ。

『逢魔キルトは斬りかかって来た断花士清の柄を偶然蹴り上げた』
説明しても所詮それまでだ。何の論理も根拠も無い。ただ、私がした事が偶発的に断花の虚を衝いた攻撃に繋がった。つまりはそういう事だ。

結果 断花愛用の太刀は天井に突き刺さり、何が起こったのか未だに把握できていない断花だけがそこに残された事になる。私はそれを見逃す程、甘くも弱くも無かった。

「ご ツ、と横薙ぎに一閃。断花の頭蓋を搗ち割る。」

「カツ」と呻いた声が届いたが、構わず二撃、三撃と頭を徹底的に壊していく。がつ、ごつ、みしつ、ぎつ、……ひたすら破壊音が続き、断花は蹲ったまま動かなくなる。

頭蓋が軋む音がやがて二桁に達する頃、とうとう軋みが破れに繋がった。

じわり、と畳に滲む血液を眺めて、ようやく私は呼気を乱して目眩を覚えている事に気づいた。吐き気にも襲われ、立っている事ができなくなった。

その時だ。 外から爆音が鳴り響いてきたのは。

明らかに人工的な爆発音に、私は何が起こったのか理解が及ばなかった。ただ……流天が無事なのかどうか分からない事を不安に感じた。

私が死なない限り、あいつは死なない。……だけど、そんな規則すら、あの化物に通じない気がして仕方なかった。私が存命しても、あいつが死んだら私は……

「……何だ、今の」

呼気を整えながら、自分の思考に疑念が沸き、私は不意に自分が分からなくなった。

私は……あいつを心配してるのか？……分からない。でも、あいつは私を心配する。何故か。私が死ぬとあいつも死ぬからだ。自

分の身を案じるのは当然だ、誰だつて死にたくない。だからあいつが私を心配するのは……私の身を案じるのは、何より自分のためだ。では私は？ 私があいつの身を案じる理由は在るのか？ ……在る訳が無い。あいつが死んだところで私の生活に支障は来たさないし、何の損害も被らない。じゃあ、何で私はあいつの事が心配になつてる？

……あいつが私の彼氏だとかほざいたから変な情でも移つたのか。……何だか面白くない。まるで あいつにからかわれてるみたいじゃないか。

再び爆音。外ではどうやら爆撃戦でも繰り広げられているらしい。……この屋敷にそんな近代兵器が在つたとは思えないが、音だけが雄弁に事実を物語っている。

私も外に向かおうとして、……体が上手く動かない事によつて、気づいた。節々が痛む。特に腕が上がらない。……先刻の戦いが影響しているようだ。今はマトモに動ける気がしない。

「……………い、め」

「……………」

酷く掠れた、血の音が聴こえた。

驚いて振り向くと、微かに体を動かそうとする断花の姿が映つた。指先が痙攣するように蠢き、ゆつくりと力が込められていくのが分かった。徐々に動き出す体は、まるで孵化する間際の蝶を連想させた。

生きてたのか それ以前に、こんな状態でどうやって相手をすればいいんだ、という絶望的な思考しか浮かばなかった。今、彼に起き上がられると、間違いなく殺されるのは私だ。

動け、私。麻痺したように震える体を鼓舞して、何とかその場から動こうとするが、全く動かない。神経が切れたように指先一本動かない。時間だけが鈍重で、しかも確実に流れていく。

蠕動するように、断花の体が起き上がり始める。日本刀が無くて、彼なら素手で私を殺せるだろう。純粹に私と彼の力量の差では、

敵わないに違いない。動けない私に跨またって、ゆっくりと時間を掛けて縊くひり殺す事も不可能じゃない。

今までに無い恐怖と、絶望と、……何より諦念ていねんが湧き起こっていた。最早、抵抗する気力も無い。私はやるだけやった。後は、結果が応えてくれる。私はその結果を待つだけの状態にまで進んだ。他にはもう、為なすべき事が見当たらない。

黄金色から朱色に染まった断花の瞳は、ほとんど開いていない上に、視線も定まっていなかった。焦点ピントが合っていないようで、何も見えていないのだろう、私を視界に入れようともしなかった。虚うつろろな眼差まなざしは、ただただ虚空に投げかけられる。

「……………、ま……………む……………い、ま……………す……………お……………お……………」

日本刀が、天井から抜け落ちてきた。

断花はそれを手に取り、杖つえ代わりにして、歩み寄つって来る。私へと、一歩ずつ、確実に。

「……………」
もう、終わりが目前に迫っている事を悟り、私は眼を瞑つむろうとした。

爆発音が、三度轟とどろいた。

【侍邸 玖】 夢成

中は想像以上に酷い状況だった。

粗方片づけられた後なんだろうが、それでも分かっちゃいます。ここで恐らく戦争が遭った事が。

「……夢成、」

「分かってる。……こりゃ、魅織が正解だったみたいだな」

刻条が深刻そうな（言ってもいつもと変わらぬ無表情だが）声で呟いたのにそう応じ、俺は屋敷に向かって歩を進めた。……嫌な臭いだ。この鉄錆の臭いだけは、いつまで経っても慣れるモンじゃない。

裏側の方へ回って行った魅織・ヒー坊と反対に、俺と刻条は庭の方へ回り込んでいた。すぐに屋敷の中には入らず、まずは周囲の状況を把握してから、という意見を尊重する事に決定したのだ。朝陽の射す庭の草葉の陰には、数える気にもなれない死体の山が築かれていた。

「断花の屋敷をブツ飛ばす位の武装してった方が良くない？」と言い出したのは勿論魅織だ。ヒー坊の話によれば、あいつDVDセツトが破壊されたとかでメチャクチャ気が立ってるらしいじゃないか。触らぬ神に祟り無しを実行する事を瞬間決断した。

魅織の意見によって、俺とヒー坊は拳銃を携行し、魅織に至っては戦争しに行くみたいな武装で固めていたが……どうやらその論理に狂いは無かったらしい。この惨状から言って、本当に戦争を起す位の戦力で武装して来た方が良かったと今更後悔している。

庭を警戒中にそれは起こった。

何かが倒れる音。砂利を滑るような音が続き、最後には重たい物が壁のような硬い物に衝突する音が響いてきた。

俺と刻条が身構えた瞬間、まるで白昼夢のようにそれは起こった。

数十メートル離れた場所に、それはいた。綺麗に整った着物を着こなした大和撫子が、悠然と歩いていたのだ。その瞬間は、断花屋敷の住人だと認識したのだが、それも次の瞬間危うくなる。

石灯籠が倒れていた。その近くには一人の少年。生まれ立ての小鹿のような覚束無い足取りで立ち上がるうとしている。そこへ大和撫子が歩み寄り、無造作にその頭を鷲掴み、

俺は少年の姿を見失った。

何が起こったのか、すぐには理解できなかった。マジメに奇術かと疑ったが、それもすぐに分かる事になる。

少年が消えた刹那、そこから更に数十メートル離れた場所に設置してあった石灯籠が打ち倒された。そこに、消えた少年が倒れていた。……いや、厳密には倒れながら転がっていた。

その時にやっと悟る事ができた。少年は女性の手で消えたんじゃない、高速で女性に投げられたんだ、と。

「ガ、ア……ッ」

少年が呻きながら起き上がるうと必死にもがいている姿を捉え、俺はようやく我に返る事ができた。

彼が恐らく柎坂だろう。例えそうじゃなくても、このまま見殺しになんてできるはずが無かった。俺は拳銃を片手で構え、大和撫子に怒声を張り上げた。

「おい！ その君、そこから動くな！」

女性がこちらに向き直り、背筋が粟立つのを感じずにいらなかつた。

ただただ穏やかな微笑を湛える女性には、一切の感情が無い。本当に、何も考えずに今の事をやってのけたのだと悟る。柎坂は何の感情も関係なく、ただ投げ飛ばされたのだ、と。

女性はゆっくりと歩み寄り、刹那、俺は咄嗟に顔を右斜め下に動かした。ち　ッ、と擦過音が耳元で弾け、頬が切れる感触が走る。眼前で大和撫子が無造作に拳を突き出している光景が飛び込んでくる。

どんな速度だ
思いながらも、数歩後退し、拳銃で女性の足元に狙いを付け
躊躇わずに発砲。乾いた音が鳴り、女性の足首に赤い色が弾ける。

「……」
衝撃を感じて足が一瞬だけ震えた
反応はそれだけで、女性は全く意に介さず俺へ視線を向け続ける。

「……痛みを感じないのか？」

麻酔でも掛かっているとしか考えられない。俺は歩み寄ろうとする女性に向かつて二発目を放った。次は左の太腿。最悪、これで出血多量で動けなくなっても仕方ないとさえ考えていた、
が。

銃弾を受け尚、女性はその足を何の苦痛も無く動かし
俺へと歩み寄る。その一步が桁違いの早さで、俺が眼を見開いているにも拘らず、刹那的に距離が殺されていた。眼前に女性が出現し

その間に小さな細い足が割り込んだ。

がッ
と大和撫子の顔面に蹴りを喰い込ませたのは刻条だった。跳び蹴りの威力は凄まじかったらしく、後退こそしなかったが足だけが平面移動し、大和撫子が僅かに俺から距離を離れた。そこに刻条が割り込む。

「……夢成、は……彼、を」

刻条が言わんとする事を悟り、俺は頷きもせず少年
柊坂へと駆ける。あの大和撫子を刻条一人に任せておくのはあまりに気が引けたが、刻条なら何とかしてくれるとも、心のどこかでは思っていた。

石灯籠の傍で蹲っている少年に駆け寄ると、少年は俺を見上げて怪訝な眼差しを向けた。

「何であんたが……？」

「俺を知ってるのか？」

俺は初対面のはずだ。なのに、彼は俺の事を知ってるような眼差しを向けた。

……どこかで逢っただろうか。……記憶に無い。

「まあいい、それよりだ。君が　　柘坂流天くん、だな？」

「……だったらどうだった？　まさか、あんたも参加者か？」

「　君を助けに来た」

少年　　柘坂がさつきよりも眉間に皺を寄せる。

「俺を……？　意味が分からねエぞ、何で俺を助ける？」

「所長……柘藤さんの遺言だ。君を守れ、　と」

「柘藤……」柘坂がどこか思案気な表情で俯き、「……罪滅ぼし、
つてか……」

下らねエ、とポツリと零し、柘坂は俺を再び見上げた。その顔に
は、もう苦痛に歪む色はあまり浮かんでいなかった。

「　去れ。ここはあんたみてエなフツの人間が立ち入ってい
い場所じゃねエ」

「見りや分かる、んな事は。……でもな、俺だって譲れないモンく
らい在る。柘藤さんの遺言なんだ、死んでも守る」

本心からの言葉だった。柘藤探偵事務所の所員として、これだけ
は絶対に守りきるつもりだった。これを守れなかったら俺は

もう、柘藤さんに合わせる顔が無い。

柘坂は苛立ちを隠そうともせず顔を顰め、まだ若干痛むのか、
ゆっくりと立ち上がる。後頭部からの出血は止まっているようだっ
た。

「……あんた、そう簡単に死ぬとかほざくなよ、おい」

低く唸るような声音で、柘坂が呟く。怒気を孕んだそれは、俺に
殺意を放っていた。

「テメエが生きなきゃな、死んだ奴が残したモンが、まるで意味無
くなっちまうだろうがよ！」

怒鳴られても、動じる事は無かった。……ただ、何故そこまでこ
の少年は生き死にに拘っているんだろう、という気持ちが生じた。
この位の男の子が考える事じゃない。まさにそんな思考の産物だっ
た。

「……何でもいい、君を守ればそれでいいんだ。君がどんな悪人

だろうと、殺人者だろうと、例え君が拒もうと、それは一切関知しない。俺は、君を守る。　それだけだ」

返す宣言も重くのしかかるように告げてやると、柎坂は舌打ちして頭をガリガリと掻き毟った。とても居心地が悪いように見える。

「……クソ、わーったよ、勝手にしろクソツタレがッ。……なら、あいつをブツ殺すぞ。あいつを殺さない限り、俺が助かる見込みは無い」

「了解だ」

俺が拳銃を構えるよりも早く、柎坂は拳銃を発砲していた。おい、おまえがどうしてそんな物を　？

ガンガン、と銃声は何発も轟き、銃弾のほとんどは外れたが、数発が大和撫子の体に吸い込まれていく。胸、胴、そして　頭。側頭部にクリティカルヒットした時点で、俺は自分の拳銃は意味を成さなかったな　と悟った。

そしてそれは、　大きな間違いだと、即座に気づく。

側頭部に銃弾を受けた彼女だが、反応は頭が揺れた程度で、構わず刻条の拳を受けつつ、動いていた。刻条の胴を薙ぐ蹴りが炸裂し、刻条の体が遥か上空を舞う。

「　刻条！」

俺は咄嗟に拳銃を構え直し、大和撫子に向かって五発立て続けに銃弾を放った。全て頭部に炸裂する。内一発は眼球を抉ったはずだ。隣で柎坂が驚いたような眼差しを俺に向けてきた。俺は一瞬だけ眼を逸らして、

「射撃には自信が在るんだよ。五十メートル離れてても、空き缶を当てる自信が在る」

「……そりやすげエな。日本じゃなくて外国に渡りゃいいのに」

「俺は母国が気に入ってたんだ！」

言いながら、俺は刻条に駆け寄っていた。あんな馬鹿力の蹴りを喰らって無事なはずが無い。すぐに手当てしなければ

そう思った、その時だ。視線を外しかけた大和撫子が視界に納ま

る。 どうして平然と動いているんだ？

頭部に合計六発もの弾丸を受けた彼女は、しかし一切の負傷ダメージが無
いかのように、こちらへ歩み寄って来る……！

隣の柘坂も息を呑んでいるようだった。緊張で顔が強張っている
のが分かる。

「こりゃ……本気で化物だな、おい……！」

柘坂の呟きを聴きながらも、俺は即座に銃口を彼女に向け直して
いた。照準はすぐに合わせられる。発砲 全弾撃ち尽くすつも
りで放った弾丸は、必然のように全弾頭部へと吸い込まれていく。
普通の人間ならば、この時点で頭部がグチャグチャの肉塊ミンチ状態だろ
う。眼も当てられないに違いない、の、だが。

彼女は、平然と受け止めていた。

恐ろしいまでに澄んだ眼差しをこちらに向け、ゆっくりと と
いう表現で、実際は刹那的に 距離を殺してくる。

そこに、柘坂が割り込んできた。

「逃げろ ゆッ！」叫んだ声が、途中で水音に変わった。

柘坂の姿が消える。刹那に映った映像を頼りにするなら、柘坂は
顔を殴られた。次の瞬間には、十メートル近く離れた石灯籠が破
壊される音が聴こえて、俺は更に戦慄せんりつする。

あまりに常軌を逸した女に、俺は腰が抜けそうになっていた。

彼女と、本当に勝負になるのか？ 彼女は、本当に人間が殺せる
存在なのか？ 彼女は、本当に人間に分類カテゴリーできる存在なのか！？

あんなの、存在として間違レベルってる。

殺せる、殺せないって問題レベルじゃない。常識的に、彼女には敵わな
いんだ。

勝負ゲームにすらならない。こんなの、一方的搾取ワンサイドゲームじゃないか。俺は、
完全に狩られる側に立たされた脆弱せやくじやくな兎に過ぎないぞ……！

化物が、俺に向く。刹那、俺はそこに明確な「死」を意識した。
殺される。何もできずに、俺はここで死ぬ。終わってしまう。
頭が壊れそうに暴れ出す。狂くるったように警告を出す心臓も、最早

意味を成さないものになる。意識が白熱して遠くなっていく。

純然たる恐怖は、人を完全に破壊し尽くしていく。俺は、息をきる事すら忘れて、ただただ美しい女を眺めていた。

【侍邸 拾】 夢成

「ユメさん、伏せてっ！」

轟く女の声は、聴き覚えのある、そして馴染み深いものだった。

俺はほとんど無意識に屈んで、何が起るのか想像もできないのに確かに 期待していた。

そしてその瞬間、 爆音が鼓膜を劈いた。

爆風が駆け抜け、風圧で俺の体が屈んだまま数歩分地滑りした。

眼も開けられない強風の中、確かに魅織の歓声が聴こえた。

爆風が止んだのを確認して眼を開けると、辺りには粉塵が舞い、一瞬だけ咳き込んだ。眼も埃が入って沁みる。何とか元の状態に戻った頃、何が起こったのか理解した。

「やりー！ これで木端微塵っしょ！ うひゃ〜魅織ちゃん、天才」

屋敷を囲む塀の上で、巨大な重火器

グレネードランチャー
擲弾銃を構えている魅

織が何やら喚声を上げている。

……そう、魅織がグレネードランチャーで砲撃したのだろう。それも、あの化物に直撃したに違いない。これでは死体も残らな

「うそ、だ、ろ……？」

俺は茫然と眩きを漏らしていた。あまりに現実離れた現実に、最早思考は追いつこうとさえしない。

化物は、未だに立ち尽くしていた。ただ、あまりの放熱に着ていた着物のほとんどが焼け焦げ、真っ黒に変色したり焼け切れたりしている。衝撃も凄まじかったはずだ、先程立っていた場所から十メートル近く場所をスライドしていた。

「……」全く表情を変えずに、化物は魅織に視線を向け直していた。

不味い 次の標的は魅織かッ。

「魅織！ 早く逃げろ！」咄嗟に叫びながらも、俺は拳銃の弾倉を再装填していた。

「え？」魅織の場所からはあの化物が見えないのか、キョトンとしている。

魅織がグレネード弾を装填している時には、化物は距離を殺してきていた。もう僅かな距離しか無くなった時、ようやく魅織は気づいたらしく、慌てて砲口を向け直す。

「わ、わ、わわわ！」

慌て過ぎたためだろう、体勢を崩し、塀の向こう側へと身を仰け反らせる。そのまま姿が見えなくなり 砲弾の咆哮が轟いた。

頭上へと放たれた砲弾はやがて力を無くし、放物線を描くように落下を始め 爆音を轟かせて塀をブチ壊した。ガラガラと倒壊する塀の向こう側で、魅織が尻餅を着いてへばっているのが映る。

そこへ、化物が向かい

「魅織 ツー！」

装填が間に合わず、もう魅織が ということろで、化物の動きが止まった。

白煙が棚引く瓦礫の前で化物は何を思い留まったのか、立ち止まって振り返った。その澄んだ視界には、既に俺の姿が捉えられている。

俺はその時にようやく装填を終え、躊躇わずに女へ向かって発砲していた。頭が無理なら心臓と思って胸へと銃口を向けて全射する。銃弾は俺の意志が宿ったように化物の胸に吸い込まれていき、赤い大輪を幾重も咲かせる。

が、女の動きは微塵も止まらない。歩み寄るといふ行為で刹那的に距離を殺して接近して来る彼女に、俺は幾度と無く銃弾を叩き込む！ しかし、それも焼け石に水で、全くダメージに繋がらない。

眼前に女が立ちはだかる 寸前、連続した銃声が轟き、女の右半身に幾重もの弾痕が穿たれた。

銃声は数秒も経たずに途切れ、その後に変な静寂が漂い始める。俺はすぐに拳銃を化物の頭部へ向け、発砲。が、頭が傾ぐ程度でダ

メージにはならない。それでも撃たずにいられない。全体的に血塗
れの頭は、これ以上血塗れにはならなかったが。

「あ、青鳥さんあおどりっ、逃げてくださいっ！」

声は遠方　　ヒー坊からのものだった。短機関銃サブマシンガンを恐る恐る構えて、再び掃射　　化物の全身に銃弾を浴びせかける。人間ならとつくの昔にミンチだろうが、女は血塗れになるだけで、一切のダメージを受けていないかのように振舞っていた。

化物の眼が、ヒー坊に向く。

「バカ！　早く逃げるのはおまえだヒー坊！」

「え　　」

次の瞬間には、ヒー坊の眼前たなすに佇む女。ごがツ　　と、骨が碎けるような音が鳴り、気づくとヒー坊は砂利の上を転がっていた。やがて慣性が無くなり滑走が止まると、そのまま動かなくなる。

俺の理性がまた一つ、　　戮ころされた。

「　　ためえええええ！」

ガンガンガンツッ！　立て続けに全弾発砲しても、女は身動きみじろするだけで全く意に介さない。もう、全身は血と焦げで赤と黒しか見えない。それでも、何の支障も来たさずに行動している。

『化物』以外に呼称すべき名称が見当たらなかった。常軌を逸し過ぎてる。こんなの、人間の世界にいていい存在じゃない。

恐怖と怒りが緋ない交ぜまになった感情をそのままに、俺は再び拳銃の再装填に入る。この時間がもどかしくて仕方ない。　　そこに女が移動を開始して、俺へと距離を

爆音。咄嗟の事に何の対応もできず、俺は爆風をマトモに受けて砂利の上を転がった。舞う粉塵と凄まじい風圧に、とてもじゃないが眼が開けられない。数秒間、爆音という名の無音世界でもできずに体を強張こわばらせていた。

やっと動ける状態に落ち着いた頃には、粉塵も消えていた。再び爆撃を受けたにも拘かかわらず、女は平然と立ち尽くし、　　何故か、

魅織の姿を探そうともせず、俺に視線を向け続けた。

俺はそこに疑問を感じた。何故、魅織を攻撃しない？ 今、爆撃を与えた相手を探して、殺しに行くんじゃないのか？

さつきもそうだった。俺は何も攻撃しなかったのに、魅織への追撃を諦めて唐突に俺を狙い出した女。あの時だって、魅織は格好の的だったに違いない。誰も攻撃できなかったんだ、魅織は殺されていてもおかしくなかった。魅織自身、全くの無防備だったし。

何かがおかしい。俺は何かに気づき始めている。それさえ分かれば

気づくと、女が眼前に立ち尽くしていた。

意識が一瞬だけ吹き飛ぶ。次に覚醒した時には砂利の上を滑っていた。頬が熱を持ったように痛い。口の中の異物感に、気持ち悪さが込み上げてくる。砂利の上に蹲った状態で吐き出すと、… 歯だ、と気づいた。どこの歯か確認する気力すら湧かない。

頭が灼けるように軋む。動きたくないと本能が叫んでいる。… ム力つく位に無力感を味わってる自分を自覚する。

だが、このまま倒れ込んでる訳にいかなかった。このままじゃ、俺だけじゃ済まない。刻条も、魅織も、ヒー坊も、そして 柊坂までも、殺されてしまう。

殺される位なら、何としてでも殺し返してみせる。

俺はあの人の分まで生き抜かなきゃならない。絶対に！

だから、こんなトコでへばってる訳にやあいかねえんだ…！

「ユメさん！」

悲痛な声が飛んできて、俺はハッとした。

何とか起き上がると、塀の向こう側から魅織が駆け寄って来る姿が映った。

同時に、

化物が魅織を視界に納めたのも、映り込んできた。

「ば、か野郎…！ 逃げろ ツ！」

声が掠れて上手く出てきてくれない。頭が灼熱に侵されたように

朦朧^{もつらう}として、思考さえ思い通りに働いてくれない。

化物が、魅織へと歩み寄る

魅織が思わずたじろぎ、塀の外へと戻る。 と、化物もまた、動きを止めた。

……？ あの化物、どうして魅織を追わない……？

ここで、不思議は何と無く確信に近づいた。あの化物、外を知覚できないのか。

その刹那、化物をどうにかする術を、抽象的ながらも思いついた。

「魅織！ おまえは塀の外で待機してる！」

「え？ あ りよーかいつ！」ビシッと敬礼する魅織。

取り敢えず今現在、魅織は安全圏だ。問題は 中の人間。彼らをどうにかして外へ出さねばならない。……いや、待てよ。ちょっと……いや、かなり危険だが、試してみたい事が在る……

辺りを見回す。ヒー坊は殴られた後から全く身動き^{みじろ}していない。

最悪、急がないと大事に至る可能性も在る。遠目から様子^{うかが}を窺っても、とても動けるようには見えない。柵^{しほ}坂も気を失ってるのか、全く動き出す気配が無い。……想像したくないが、死んでる可能性だつて考慮せねばなるまい。刻条は何とか動ける気配。俺と目配せして、化物から一定の距離を離して様子を窺っている。

現況で戦えるのは俺と刻条の二名を残して存在しない。化物は全身に浴びるように銃弾を喰らっても全く支障を来たさない。分が悪過ぎる戦闘ではあるが、勝ち目が全く無い、訳じゃないと願いたい。俺は軋む体を支えて、刻条へと走り寄る。化物は俺と刻条を視界に納めたまま、どちらから殲滅^{せんめつ}しようか思索している様子。

「刻条、多分これが最後の作戦だ、よく聴いてくれ。……あの化物を、外に出す」

「……」無表情で何も返さない刻条。

「……勝算が在る訳じゃないが、試してみたいんだ。……手伝ってくれるか？」

刻条は俺と化物に視線を行き来させ、やがてコックリ^{うなず}と頷いた。

「……それしかない、なら……やるしか、無い」

「よし。取り敢えず、あの化物を壁際まで追い込めるか？」

短く頷く刻条は即座に行動を開始していた。化物へと駆け寄り

跳び回し蹴りを顔面に見舞う！

化物はそれをマトモに受け、しかも微動だにせず、その足を無造作に掴もうとして

刻条は咄嗟に足を引っ込め、化物に背を向けて駆け出す。化物は歩み寄る仕草で刹那的に距離を無くし、

今度は刻条の背中に蹴りを見舞う。刻条は今度こそ躲せず、マトモに蹴りを喰らって、

姿を見失う程の速度で吹き飛ばされた。奇しくも刻条が吹き飛ばされた場所は瓦解した塀の眼前だった。

奇しくも刻条が吹き飛ばされた場所は瓦解した塀の眼前だった。

奇しくも刻条が吹き飛ばされた場所は瓦解した塀の眼前だった。

俺はようやくチャンスが回ってきたと確信し、最後の武装 手榴弾を握り締める。ピンは抜かずに、思いつきり放り投げる。

即座に拳銃を構え、叫ぶ。

「クレー射撃少年の部一位の腕前、篤と見やがれ化物がア！」

直線的に飛来する手榴弾に化物は気づかず、刻条は咄嗟に塀の外へと逃げ出していた。魅織も塀の影に隠れるように移動を終えており、最早爆撃範囲には化物以外の影が無い。

発砲 銃弾は一直線に化物へ向かって飛来する手榴弾を捉え

爆音が、轟いた。

……咄嗟にどうなったのか分からず、俺は訳も分からず駆け出して、魅織と刻条の無事を確認に向かった。

塀の近くは爆撃で倒壊し、粉塵が僅かに舞っていたが、それもほとんど沈静化していた。駆け寄って分かったが、化物は完全に原形を留め、平然とそこに君臨していた。

「……」

化物の傍で茫然と佇んでいる魅織と刻条に混ざって、俺も化物に視線を注いで自失状態に陥っていた。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

もう、お手上げだった。

後はもう、殺されるのを待つしかない。そう、思った矢先だった。

「　　そと……」

不意に。

化物が、とても愛くるしい、そして外見よりも随分と幼い声で、ポツリと、零した。

その声には……何故か哀愁が孕んでいて……

化物　　少女は振り返り、無邪気な笑顔を浮かべて、

「　　ありがとう……」

それはまるで魔法だった。

陽光を浴びた少女が、何の前振れも無く、霞むように、視界から消失した。

……しばらく誰も口を利けなかった。

あまりに現実味が乏しく、俺も夢を見ているんじゃないかと何度も疑った。

だが、現実は一切の猶予も無く進む。淡々と現実だけを映し続ける。

「……死んだ、の？」魅織の呟きが、ここまで聴こえてきた。

誰も何も返せない時間が刻々と過ぎ、

「　　姫、様……」

「！」
背後で漏れた声に振り返ると、そこには　　血塗れの、着物を

羽織った男が立ち尽くしていた。頭からの流血が酷く、最早生きて
いるのが不思議な位だ。まさか、二人目の化物か……？ そう思っ
て背筋が粟立つのを感じた。

刀を提げた男は、覚束無い足取りで少女が消えた辺りまで歩いて
来ると、何を思ったのか空を見上げて、
何故かここには無い
月を見上げている気がした。

「……往かれたのですね、姫……」

そう、力無く呟いたかと思うと、男はその場に膝を突き、力尽き
て倒れ込んだ。

見るまでも無く、男は息絶えていた。ここまで歩いて来たのが不
思議な位だと心底から思う。ここまで来れたのは、本当に気力だけ
だったのか。俺は何かしら不思議な力が働いていたんじゃないかと
思った。

静寂が支配する世界で、俺は振り返って何とか少年の許まで歩み
寄った。

見下ろす。苦しげではあったが、胸が上下していた。……生きて
いる。その事実だけが、今の俺をどうしようもなく充実させた。

そこで、俺も力尽きた。その場へたり込み、寝転がる。

「……これで良かったんですよね、……所長」

もつけない彼への言葉は、空へと霧散していった。

【夢囁 肆】 流天

……夢を見ていた。

それは、昔に亡くした母が出てくる夢。優しく温かい手で幼い俺を包み、あやしてくれる、少しむず痒い夢。

いつまでもこうしていたいと、本気で願う夢だった。見上げると包み込むような微笑を浮かべて俺を見つめる母の笑顔が在った。俺は母の笑顔で幸せになれた。母さえいれば、他に何も要らなかった。ずっと一緒にいて。それを疑った事も無かった、昔。俺はあの時、現実に完全に裏切られた。あれほど現実を憎んだ事は無い。あれほど、自分の無力を憎悪した事は無い。

さら……と髪を撫でるように梳く感じがして、俺は再び微睡眠の世界に浸る。

ねえ、ずっと一緒にいてね。

何度も、何度も、母に告げる。何度告げても足りない気がして、俺はその度に不安になって、何度も告げ直す。

失った今、失わなかった過去に戻った瞬間が怖くて仕方ない。二度も失う経験をしたら、俺はもう立ち直れない気がする。母の分まで生きようと誓ったのに、その誓いを守れそうに無い。

お願いだから……どこにも、行かないで……

手を、伸ばす。もう母の顔に手が届きそうなところで

「かあ、さ……」

……もし、貴方に本当に大切な人ができたら……その時は……

視界が白熱する。

「……ん」

ぼんやりとした意識の中、確かな感触を感じて、俺は少しずつ頭を覚醒させていった。

後頭部に柔らかな感触を感じて、頭上には何か思わずギョツとする。キルトの顔が頭上に在った。

そして一気に覚醒する。何してんだ俺！？ まさか

「……起きたか」

ふっ、と柔らかく笑むキルトを見て、更に顔が熱くなる。何がどうなってるのか分からない。

「なっ、こりや何してんだ……ッ!?」素っ頓狂な声を上げる俺。

「何って……膝枕」淡々と返すキルト。

「ナニフツーに応えてんだよ!?」ちよっ、離せっ」

慌てて起き上がるうとして、キルトに頭を押さえつけられる。

「おい!?」ちよっ、何してんだおまえ!？」

「落ち着け。……もう少しこうしてる。……私も、今はあまり動きたくない」

どこか疲れたような、でも……安堵しているような声音で応じるキルト。

俺はその時点でようやく他の事に意識を回せた。

「ここ……おまえん家か?」

「そつだ」

断花の屋敷じゃないと分かったのはたつた今だ。場所はキルトの家のリビングのようだ。そのフローリングの床の上にキルトが正座しており、その上に俺は頭を……

「……助かった、のか……?」

正直、俺は今の状況が信じられなかった。あの、銃弾を頭に受けても死ななかつた化物を、どうしたのか。いや、断花土清もそつだ。あの二人を、誰が倒したのか……いや、倒してないのか……?

俺の疑問を払拭するように、キルトが柔らかく俺の髪を梳いた。

……恥ずかしくて全身がむず痒い。

「……ああ」

たった一言だった。たった一言で終わらされてしまった。……けど、何故かその簡潔な一言が心地好い。それだけで全てを物語っているような、そんな気さえする。

「そうか……」

だから、俺の気持ちも簡潔に伝えた。安堵、そして……彼女の存命で安らぐ心を。

しばらく、無言の時間が流れた。

その静寂を破ったのは、俺ではなくキルトの方だった。

「……流天（るてん）、起きたなら代われ」

「は？ 何を？」

不意に起こされ、正座をさせられ、その上に頭を乗せるキルト。

今度はキルトが俺に膝枕を強要してきた。

「……いや、は！？ 何してんだ、おい！」

「疲れたんだ……ちよつと休ませろ」

「じゃなくて、休むならベッドで寝ろよ、ここで寝るな！」

「煩（めんど）い……」

すぐに寝息が聴こえ始め、もう動く気配が無くなる事を悟ると、俺はため息を零（こぼ）して、……何ともむず痒い空気を覚えていた。

……こいつ、本当に俺の事どう思ってたんだ？ 少しは男だと認識してんのか……？ 目の前で服を脱ぐわ、こつやって隙だらけの姿を見せるわ……完全に嘗（な）められてんのか。

あまり見ないようにしてたけど、どうしても視線がキルトの横顔を覗き込んでしまう。穏やかな寝顔は、可愛いとしか形容の仕様が無い程、魅力的に映った。小さく上下する胸が、俺の理性を少しずつ破壊していく。

「……、」

……正直な話、キルトは可愛いと思う。性格は俺の観点で言えばとても良いとは言えないが、それでも魅力的な女の子だと認める。

そんな娘がこうやって無防備な姿を曝さらして、何も思わない奴は男じゃないと思う。

だけど、それは理性が駆逐くちくする。俺は男である以前に人間だ。獣のように衝動だけに従順じゃないんだ。……そう思い込みただけかも知れないが、それでも卑いやしい衝動に駆られて襲いかかる程に常識は欠如けつじよしていないと自覚している。

そつ、と。ほとんど無意識の内にキルトの髪を撫でている自分がいた。さっき自分がやられていたように、無防備な彼女の髪を梳くサラサラの髪は、全く抵抗せずに流れていく。

……本当に、助かったんだな……。

俺は、不覚にも屋敷で死ぬ事を覚悟していた。……正直、あの化物に勝てるとは思えなかった。銃弾を心臓に受けても、頭に受けてもダメージに繋がらないあの化物を、殺しきるなど不可能だと感じていた。幾いくらキルトと言えども、殺す事は叶わなかったと思う。

ならば、俺はどうしてここにいる。キルトも無事だ。……だとすれば考え得る事実として、あの屋敷から逃げてきたというのが一番しっくりくる。というか、それ以外考えられない。

あの化物はどうして追ってこなかったのか。いや、断花だつてそうだ。何故追って来ない？ それだけじゃない。あの場にいた棺藤かんとつの仲間は

そこで、唐突に思い至る。ああ 囿おとじにされたんだな、と。あの棺藤の仲間を囿に、キルトは俺を連れて逃げてきたんだな、と悟る事ができた。

「……月つきみす不見輝夜かくやは、死んだ」
不意に下の方から声が聴こえて、俺は視線を下方に向け直した。瞼まぶたを下ろしたままのキルトが、口だけを動かしていた。

「……あの化物は、消えたらしい。……死んだと考えていいと、私は思つ」

「消えた……？ って、何がどうなって？」

「知らん。……ともかく、あいつは死んだ。断花土清は、私が殺し

た」

……殺した？　あの侍を？

かなりの時間、俺は言葉を失っていた。言葉を探そうともしなかった。ただ、今広がっている現実を、少しずつでもいいから認めようと努力していた。

月不見輝夜……というのは、恐らくあの化物の事だろう。アレが……消えた？　……確かに、アレが『死ぬ』って言うのは間違っている気がする。アレが『死ぬ』という現象が想像できない。だから、『消える』って言う表現は正しいような気がする。それしか、アレを殺す方法が無いとさえ思える。

そして、……断花を殺したのか、おまえは。

俺は、殺せなんか言っていない。逃げろ、って言ったはずだ。……なのに、おまえはそれを選ぶんだな。おまえは、それを選んだんだな。……俺なんかが口出ししていい問題じゃないのは、とづくに承知済みだ。それに、殺さなきゃ逃げられなかったって言われたら、もう俺には何も言えない。

……それでも、おまえにだけはその道を歩んで欲しくなかった。

これだけは本当の気持ちなんだ。

その気持ちが伝わったかどうか定かじやないが、キルトが何も言わない俺に向かって言を続けた。

「……これで、残りは四人になった」

四人。八人いた参加者の半分が、死んだ事を意味する。

残りの四人……俺、キルト、識沢しきざわ、そして……狂木くるいきの四人。この内の一人だけが生き残る生存戦ゲーム。……自覚は無いが、ここまで生き残れたのは運が良かったからじゃないかと思う。とてもじゃないが驕るおご気持ちは欠片カケラも湧いてこない。実力も無いただの不死人である俺がここまで生き残れたのは、単純に不死であつたためだけだろう。それと、幾許いくばくかの運だ。

でも、あと残りはたったの四人。その内一人は戦う気が無く、一人は自分、一人は守るべき存在。敵と言えるのは唯一ただ一人だけだ。そ

いつこそが、このゲームの最有力候補と識沢が呼んだ
式しき 狂木十と

だが、言い換えればそいつさえ殺せば、このゲームは終結するはずだ。そいつさえ殺せば、他には何の脅威も無い。識沢は人を殺せるような奴じゃないし、キルトは殺すも何も、守らなければならぬ存在だ。狂木にキルトを殺させない事だけを考えれば、それでゲームは進行しなくなる。

やっと、終わりが見えてきた気がした。始まった当日は本気で死を覚悟したのだが、それももう無くなる。俺はようやく、日常を取り戻せる

「……流天は、私を殺したいか？」

不意打ちのような声が響き、俺は一瞬掛ける言葉を見つけれなかった。

逡巡する自分がバカらしくて、すぐに変な雰囲気打ち消すように声を掛ける。

「バカ言つなよ、テメエを殺したら俺まで」

「その呪のろいが無くなったとしたら。流天は、私を殺すのか？」

「
嗤とっせに忍しのえられなかった。忍しのえられなかった自分が分からなかった。
た。

キルトが傷つくと俺も傷つく、この忌いまわしい呪のろいが無くなったとしたら？ その時、俺はキルトを殺すのか？ ……このゲームの性質ルールを考えると、強あながちあり得ない事象でもないと言えるのが怖い。

このゲームには最後の一人になるまで殺し合えという縛ヨウケ魂マタが掛けられている。識沢の話じゃ、そういう事になってる。今思えば、その話だって確証は無いはずだが、現況を考えれば符合する点も否めないのが現実だ。となれば、恐らくは真実に違いない。

それを考慮すると、俺はどの道キルトと殺し合う運命に在ると考

えた方がよほど現実的と言える。……そう、最終的に生き残るのは たったの一人だ。残された人数は四人で、生き残れる人数はどう足掻いたところで一人に変わり無い。……俺がキルト、良くてもどちらかしか生き残れない。

今は呪いの力が働いているから、どちらかだけが生き残るなんて事は許されない。俺は普通に殺しても死なない、或る意味このゲームでは無敵の存在だ。まず普通に戦って死ぬ事は無いだろう。ただ今の俺には重たい枷が付けられている。言うまでも無いが、キルトの事だ。彼女が俺の 不死 の効力を著しく落としている。

キルトを殺す事になれば、同時に俺も死ぬ。現在そういう呪いが働き、それに悩まされている。つまり、最終的に俺とキルトが残された時点で優勝者がいない結末が決定する。俺は普通に戦っても死なないが、キルトが死ねば俺も死ぬ。どちらも生き残る事が無いんだ。

ゲーム的な観点で言えば、俺とキルトが最後まで残るのは望むところではないだろう。それではゲームとして破綻する。最終的に生き残った人間をどうするかは知らないが、優勝者がいないゲームなど面白くないに違いないのだから。

だが、ゲームが終わる前にこの呪いが無くなれば。……その時は、俺がキルトのどちらかが生き残れる。どちらかが死ぬまで殺し合える。ゲーム的にもそれは望ましい事だろう。……ム力つく位にふざけてるがな。

もしそうなった場合、俺は躊躇無くキルトを殺せるのか？ ……正直、即答できなかつた。今まで成り行きとは言え何人も殺してきたけど、完全な我儘に過ぎないけれど、俺はどこかでキルトを殺したくないと思ってる。それは……情かも知れない。今まで付き合っていたために情が移り、殺したくなくなったのかも知れない。

眼前で友人を殺されたのに。

「……………俺は、」

言葉に詰まる。胸で痞えて、中々その先を継げなかつた。

そのまま沈黙を漂わせていると、キルトが小さく笑う声が聴こえた。

「私は、おまえになら殺されてもいいと思う」

【夢斬 伍】 流天

「……………え？」

思わず聴き返していた。自分の鼓膜がとつとつ狂れたんだと思い、いつの間にかキルトの顔を覗き込んでいた。

キルトは顔を向け直し、丁度俺に顔を向ける形で膝の上に頭を乗せ、初めて見る柔らかな微笑を浮かべて、

「私は、流天るてんになら殺されてもいい。　そう言ったんだ」

思考を完膚かんぷなきまでに破壊する言葉を、吐かれた。

本当に絶句していた。その言葉の内容よりも、輝かんばかりの微笑の柔らかさに。

心を奪われるとか、そんな臭い表現でも許されそうな、そんな笑顔に、俺は半ば放心状態だった。　　が、すぐに我に返る。ナニ言っただこいつは！？　と思ひ至る。

「　　ざッけんな！　おまえ、そんな簡単に殺されてもいいとか……………」

「……………初めてなんだ、こんな気持ちを懐いだくのは」

俺の説教を遮さへぎり、キルトが独白を勝手に始めた。俺は思わず口ごもり、先を言えなくなってしまう。

キルトは俺の膝ひざから起き上がり、俺と対面して座り込んだ。

華奢きしゃな体が、薄いワイシャツ一枚に包まれ、俺は不意打ち気味に心臓を高鳴らせる。

「流天は、　私の事が好きか？」ポツリと爆弾発言しやがるキルト。

「なッ、えッ、はッ！？　ナニを急に……………ッ！？」

「私は好きだぞ」

言っつて　　顔が眼前に近づいて来た。

もう本当にくっつく　　ところで、唇に柔らかな感触が触れた。電気が走ったように、それが何なのか理解して、俺は頭が沸騰ふっとうしそ

うになった。

キルトがそのまま体を密着させてきて、俺は力無く押し倒された。柔らかな、そして甘い匂いが鼻腔一杯に広がる。

唇の中に、ぬるりと何かが侵入してきた。くちゅ、ぴちゅ、と俺の口腔がキルトの舌に因って犯されていく。思考は完全に凍結し、甘い匂いで頭の中が霞んでいた。

啄ばむようなキスじゃなく、舌を絡ませ合うような濃厚なキスに、脳髓が痺れて、マトモな思考ができなかった。

ぬちゅ、ちゅ、ちゅる……、

何秒、いや何十秒だろうか、長いキスの後にようやく解放され、

眼前にはトロンとした眼差しを投げかけてくるキルトの顔が在った。頬が火照り、少し桜色に染まっている。

甘い、蕩けるような微睡みの中、俺はハツと我に返る。キルトを押し退け、後ずさって距離を取った。

「なに、してんだ、てめえ……っ」

鼓動が鼓膜を破らんばかりに鳴り響き、息も仕方を忘れたように上手くできない。胸が苦しくて、自然と息遣いが荒くなる。体が熱湯にでも浸かったように熱く、滾っている。

キルトは甘い瞳で俺を見据え、ぺろり、と自らの唇を舐め拭く。更に鼓動が激しくなる。

「何って……ディープキス」

「ッッ」

理性が完全に駆逐されそうだった。本能が叫んでいる。キルトが、欲しいと。

言い訳も何も言葉が出てこなくて、俺はただ煮え滾る思考を振り払って、何とかしてキルトから離れる。このままじゃ、俺は間違いなく……！

「……襲わないのか？」小首を傾げて、妖艶に尋ねるキルト。

「思考が、狂れた。」

刹那　俺は立ち上がると、咄嗟とつぱに玄関くわんへ向かい、扉を開け放つて外へ出た。靴を履くのもまどろっこしくて、ほとんど突っかける形で履き、そのまま脱出した。振り返る事なんてできるはずがなかった。

「　　っそ、　　っけんなッ、　　っんで俺が　　ッ」
意味の無い怒声を張り上げながら、真昼間の住宅街を疾走した。もう、何を考えていいのかも分からなかった。もう、何が起こってるのかも、全く理解できなかった。

……落ち着いたのは、それから一時間近く経つての事だった。
無我夢中で駆け抜けて辿り着いた先　　そこは、数年前から住みついた、元俺の家だった。

無人の家屋に踏み入り、その中の、元は俺の部屋だった場所で座り込む。

「　　……はあ、　　……はあ、　　……はあ、　　」
息を整えながら、自然と唇に手が触れる。

網膜に焼きついたあの光景がフラッシュバックする。

瞬間、頭が溶解しそうな位、混乱した。意味が分からない。何であいつは、あんな……分からない。

……違う。分からないんじゃない。分かっているのに、分からないフリをしようとしてるんだ、俺は。

「　　……くそ」

それにしても、不意打ち過ぎる。……何を企たくらんでやがる、あの野郎。そう考えないと、俺の思考が根ね根ねぎ破壊されそうな気がした。

何度でも蘇よみがえる桃色の映像を振り払いながら、俺は静かに自問した。
俺は　　あいつの事をどう思ってるのか。

嫌い……とは、既に言えない状態だと思う。この心臓が正直過ぎる嫌になる。……だけど、よく考える。あいつは　　俺の友人を、眼前で殴り殺したんだぞ。

被害は何も、そこだけに留まらない。一番の被害者は、誰が何と言おうと俺自身に違いないんだ。俺の生命線とも言える 不死 をメチャクチャにし、あまつさえ俺を殺しかけた奴だ、どうしてそんな奴を好きになれる？

……そう、考えれば考える程、俺はあいつを好きになる要素なんて皆無に等しいと気づく。あいつを好く動機が全く無いんだ。じゃあ何だ？ 俺は突然変異的にあいつが好きになったのか？

キルトは根っからの殺人鬼だ。幼少時 小学生の頃から人を殺していると聞いた。そんな奴が、更生できるとは思えないし、そもそもその罪は既に償える限界レベルを超えている。

でも……何かと眼に付く奴だった。俺はあいつが死ぬと俺まで連鎖的に死んじまうから、否応無く助けてきたけど……それ以上に、ほっとけない奴だ。何もしなくても、勝手に死んじまいそうな、そんな危うげな雰囲気を持っている。

……全部言い訳だ。俺があいつを嫌う理由も、好きになる理由も、全部後付けに過ぎない。俺は単純に、キルトが好きなんだ。何も理由なんて要らない。そんなものは心底どうでもいい。俺はあいつが好き、その気持ちだけで

「……マジかよ」

自分で認めた事に、更なる羞恥ちゆうしを覚えて、顔を俯うつむかせる。

自覚した時点で、気持ちを抑えると言う高等な技術は利かなくなつたも同然だった。

獣と同じだ。俺はあいつを欲し、自分のモノにしたいと考えている。

だけど、そんなのは俺自身が許せない。それは……何だかダメなんだ。

悶々もんもんと思考に明け暮れていると、不意に人の気配を感じた。一瞬、キルトを想像したが、奴は俺の場所なんて知らないはずだ。そう気づきながら振り返ると、そこには

「ハロー 青春、しっちゃってるっ？」

「識沢……？ おまえ、何でここに……？」

識沢は昨日と同じような服に身を包んで、はにかみ笑いを浮かべて歩み寄って来た。

何が面白いのか、俺を見てニタニタと嫌な笑みを浮かべてやがる。

「……何だ？ 喧嘩売ってんのか、コラ」

「襲えば良かったのに」

「」

声に詰まり、顔が一気に熱くなる。パクパクと餌を催促するよう口を開閉させていると、識沢はケタケタ笑いながら先を継いだ。

「いやーあははあ 君も変なところで理性が働くモンだねえ

勢いに任せて抱いちゃえば良かったのに キルトも悦ぶと思うよ

「？」

「……何で、知ってやがる」詰まりながらも、何とかそれだけ尋ねる。

「あたしを誰だと思ってるのさっ 天下の識沢智ちゃんだよ

あたしに知り得ない事は無ーし！ ……で、君は詰まる所、キルトは趣味に合わないのにかにや？」

「……」

他人の色恋沙汰にも興味が無い俺が、そんな事をフツーに話すと思うかコノヤロウ？

そう分かってるのに、俺は自分で何をしているのか分からずに、言葉を発していた。

「……そんな訳じゃない」

「ふうん？ じゃあ抱けば良かったじゃない」

「それとこれとは話が別だ！ ……何で、好きになった奴を、いきなり、そんな……」

尻すぼみになっていく俺の言を聴いてどう思ったのか、識沢はニタニタとした粘っこい笑みを張りつけて、俺を覗き込んでくる。

「とつても大切なんだね、……キルトの事が」

「……悪いかよ」視線を逸らして呟き返す。

「んーん、べつつにー。……じゃあ、ここでちょっこりトモ姉さんの昔話でも聴いとく？」

識沢はそう言つて、何の敷物も無いフローリングの床に座り込み、俺と対峙する。

いつものニコニコ顔は鳴りを潜め、どこか物静かな印象を与える表情を浮かべて、識沢は語り出した。

「むかーしむかし、ある所に三人の家族が住んでおりました。その家族は、家庭の事情で、娘さんと、その父方の叔父・叔母夫婦で生活しておりました。叔父も叔母も、娘にいつも虐待をしています。泣きたいよー泣きたいよーえーんえーん。娘はいつも泣いています。泣いても泣いても、誰も助けには来てくれませんでした」

淡々と紡がれる昔話に、俺は何の事が分からずに聴き入っていた。識沢は更に先を継げる。

「その娘は、学校ではイジメを受けていました。イジメ……それは単なる無視だけですが、それでも娘は酷く淋しい思いをしています。家に帰るとまた苛められます。どこに行つても、彼女には居場所がありませんでした。」

そんな或る日の事です。娘が小学校へ通う際、隣人のお兄さんに挨拶をした時の事でした。おはようございます、と礼儀正しく挨拶をする娘。それを見たお兄さんは、さあ大変。娘を家に連れ込んだんじゃないました。可愛いなあ、はあはあ。何と、お兄さんは幼女趣味のヘンタイさんだったのです」

「……」

「それから三日後、搜索願が出されていた娘を追うお巡りさんが、隣人の家宅搜索に踏み込んだ時、見つかった娘は完全に壊れた人形になっていたのでした。お兄さんは色々悪い事をしちゃったので、そのまま捕まっちゃいました。が、お兄さんはすぐに釈放されちゃいます。そして、数年も経たない内に再び隣のお家に帰って

きちやっただのでした。娘は怯えながら毎日を過ごします。ああ、何て可哀想な娘。

そこに、彼女の運命を変える人が現れるのです。

それは魔王でした。魔王は娘に告げます。おお、娘よ。おまえは何て運が良いんだ。おまえが今まで生きてこれたのは、その絶大な運の賜物なんだ。故に、おまえは何をしてもその運が付いて回る。おまえは、運を我が物にできるのだ。ぐわはははー。

娘は納得しました。ああ、だから私は今まで生きてこれたんだ。だから私は今も生きているんだ。私はそんな凄い運勢に守られているんだ。

魔王は言いました。おまえはどんな事をして、その運さえあれば全て上手くいく。例え、人を殺したとしても、運が良いのだから捕まるはずが無い」

「……待て」

「娘は悦びました。そんなに凄いんだ私は。じゃあ アレを壊しても怒られないんだ」

「止める」

「娘は手始めに夫婦を壊し、そして隣人を壊し、拳句手当たり次第に」

「止めろって言うてんだ！」

バツと胸倉を掴み上げ、俺は怒鳴りつけた。

識沢は冷静な、……違う、冷酷な眼差しで、嘲笑を浮かべていた。

「周囲を壊し始めた娘は、一体どこで壊れちゃったんだろうねえ……？」

「……おまえ、殺されたいのか？ ここでブチ殺されてエかおい！」
体を揺さ振り、首を少しだけ絞めつける。苦しそうに喘ぐ識沢は、それでも止めなかった。

「分かった？ キルトってね、ああいう愛情表現しかできないアバズレなんだよ？ だって、ああいう愛情表現しか知らないんだもん。えへへえ、面白かったあ？ 何なら、もっと詳しく教えただげようか

？ 隣人のお兄さんがキルトのどこから
ぱあんっ。

気づくと俺は、識沢の頬に平手打ちをかましていた。

識沢が冷酷な眼差しで俺を見つめ、俺は怒りで沸騰する頭をそのままに、睨み据える。

「……いい加減にしろ」

「へえ。君、やっぱりキルトが大切なんだね？ そんなに大切だから、守りたいんだ？ か弱い女の子を守るのは、男の子の大義だもんねえ。でも、純潔までは守れなかったねえ。とつくの昔にあの娘は使用済みだよ？」

本気で殴りつけようとした拳を、そのままフローリングの床に叩きつける。ご　　っ、と拳が床に減り込んだ。怒りで我を忘れそうになるのを、識沢は構わず話を続ける。

「……だから、君なりに全力で愛してあげなよ、キルトを」

「識沢……？」

「うふう　　これで、踏ん切りが付いたんじゃない？　　これで

遠慮無く、あたしを見捨てられるでしょ？」

あ　　と気づいた時には、完全に嵌められた事を悟った。

識沢は微笑みながら立ち上がった。床に何かの鍵　　恐らくはキルトの家の鍵を置いて。

「……最後にキルトを選んでもいいからさっ、あたしの事は最後まで生かしておいてほしいなっ。……もし、最後まであたしが生きてたら……その時は、殺してもいいから、さ」

言って、識沢は立ち去っていった。

残された俺は、……もう頭の中がグチャグチャだった。

あいつ……端から選ばせるつもりなんて無かったんだ……なら俺は……

「……済まねエ」

本当に悪い事をしたと、自覚して喉を突いて出た言葉だった。

識沢は戸口で振り返り、ニタリと笑みを浮かべる。

「うっん、分かった事だから　じゃ、健闘を祈ってるよ、流天くん」

心配が無くなったのを確認して、俺は顔を上げた。

俺は母さんが好きだった。それは、唯一の家族だったから。とても温かかったから。

でも、今はもういない。温もりは、もう感じる事ができない。

そんな時、俺は彼女を見つけた。

とてもじゃないが、良いとは言えない、寧ろ最悪の第一印象の女を、俺は見つけてしまった。

そいつは口にするのも馬鹿らしい程に、常識が無かった。

端的に言うならば殺人鬼だった。

でも……俺の大切な存在に、いつの間にか……なっていた。

どこで、とか、いつ、とか、そんなの全く分からない。いつの間にか、そうだったんだ。

もう、否定する気は無い。俺は、あいつが好きだ。

伝えないといけない。この気持ちを。この　想いを。

もう、俺を留める障害なんて無かった。

ただ、駆ける。あいつ　キルトに向かって

【後 祭】 夢成

夕暮れに沈む屋敷は、どこかくすんで映った。

あちこちに警察官がうるつき、ただでさえ人口密度が高いと言っているのに、喧騒がまた喧しい。……まあ、その内半数は屍なんだが。

「よう、元気だったか夢成」

煙草を啜えて半放心状態で塀に凭れかかっていると、不意に俺を呼ぶ声が聴こえた。

胡乱な瞳を持ち上げると、そこにはニスバディの女性警官が降臨していた。

「……見りや分からねエか、檻瀨。もうこれ以上働く気はねエぞ、俺ア」

「勿論、見りや分かる。……にしても何やってたんだか。ここはアフガンじゃねエんだぞ、っと」

不意にしゃがみ込んで空の莖莖を拾い上げる檻瀨。……短機関銃の空莖莖だと気づくのに、数秒掛かった。思考があまりに不透明で、

上手く考える事ができない。
「……惜しい奴を亡くしたな」

ポツリと。

見上げた先の檻瀨は、空莖莖に視線を落としたまま、……どこか寂しげに呟いた。

俺は火の点いていない煙草を口から離すと、そのまま腕を地面に垂らして、力無く呟き返す。

「俺、そんなに役立たずに見えたかな……」
「夢成……」

「……もう、そんな事すら言えやしねエ。……ははっ、千友ちゃんにどんな顔してやればいいのか、全ツ然見当付かねエぜ……」
自嘲が漏れて、不意に可笑しくなる。

助かる可能性は、確実に存在していたんだ。俺はそれを見つける

事も、悟る事も、況してや気づく事すらできなかった、それだけなんだ。

……あの時だって、そうに違いなかった。俺は、掛け替えの無いモノを二度も失くして、ようやく気づけた。

俺は 無力だ。

助かる可能性は、確かに在ったんだろう。でも結局、俺には助ける事ができなかった。それが事実で、それだけが現実だ。それ以外に真実は変わり無い。俺は、二度も助けられずに、ただ黙ってその死を受け入れるしか、できなかった……ッ。

悔しいとか、ムカつくとか、……そんなの、結果から鑑みた感情でしかない。

助けられたんだ。でも、俺には助けられなかった。終わってみれば、それだけしか残らないと、やっと俺は気づいたんだ。

ただただ空虚だった。初めて失った時は、怒りと憎悪でまだ動く事ができた。でも二度目は……最早、全ての行為が無駄に思えてならない。

俺にも何かできたはずなんだ。でも……それすら見つけれられず、ただいなくなるのを黙って見ていただけ。一度味わった過ちを、何の学習もせずに繰り返す自分が愚かし過ぎて反吐が出た。

「……詩樹文の奴ア、本当に報われてんな」

檻瀬が葉巻を取り出し、口に挟んだ。俺と同じで火は点けず、ただ啜るだけ。

「……こんなに上司想いの部下なんてのは、私でも中々見た事アねエよ」

「……本当に、そう思ってるのか？」
八つ当たり気味に言ってるのは、自覚してた。でも、ぶつけずにはいられない。

視線を檻瀬に向けたまま、俺は怒気を孕ませて続きを穿った。

「 だったら本当に助けられねエと何の意味もねエだろうがッ

！！」

吐き捨て …… 全くスッキリせずうつつむに俯くと、檻瀬が鼻で笑う
声が聴こえてきた。

「……おい、笑ってんじゃ」「睨にらみ上げようとして、

「……どこのクソガキだテメエは」

凍いてつくような檻瀬の視線に射抜かれた。

ぐ、と言葉を詰まらせていると、檻瀬は挑発的な眼差まなざしで俺を見
下ろし、続きを吐く。

「確かに、人の命を助けて何ぼだろうよ、普通はな。……だけどな、
一応言つといてやる。無理なモンは無理なんだよ、それをいい加減
理解しろ馬鹿者」

「……じゃあ、何か？ おまえは、助けられない人間は見捨てる、
そう言いてエのか？」

起き上がる気力も無いくせに、殴りかかりたい衝動に駆られ、体
が僅わずかに蠕動ぜんどうする。

檻瀬はやれやれと肩を軽くすく竦め、再び俺に視線を向け直す。

「だったらおまえは、死ぬ間際の人間をどうやって助けてやるんだ
？ そいつはもう死ぬ事を受け入れ、後は死を待つばかりだ。そん
な奴を、おまえはどうしたい？ おまえには他人に寿命を与える能
力でも在るのか？ それともそんな死に掛けの人間を元氣付けて、
一度は受け入れた死を再び恐怖させるのか？ ……夢成、他人を励
ますのは勝手だがな、時にそれが重圧になる事も考慮しろよ。どれ
だけ頑張じょうつても、死ぬ奴はあっさり死ぬし、生き残る奴は本当に往おう
生じょうしやがる。それが現実だ」

「……それが最善だとも思っつてやがるのかテメエは？ ざ
けんな、人は何を賭しても生きるべきだ。例えどんな絶望を懐いだいた
としても、目前に死が迫っていたとしても、俺達は最後まで全力で
生き抜くべきじゃねエのか！」

「自殺志願者を贖ひきかするつもりはねエがな、それを判断するのだっ

て人だ。おまえの価値観じゃそうかも知れんが、皆が皆そんな考え
だったら世界はこんなに整っちゃいねエ。苦痛を逃れて、或いは絶
望が怖くて、この世を捨てる人間なんざごまんといやがる。テメエ
はそいつら全員に言い聴かせるつもりか？ どんな酷い事^{ひど}が在つて
も、最後まで生き抜いてください、と」

「ああ」

即答だった。そんなの、当然だと思つていた。人間は全力で最期
まで生き抜く存在だと、信じて疑わなかった。

だが、檻瀬はため息混じりに首を振る。本当に疲れが見え隠れす
る仕草だった。

「ま、おまえがそう言い張りたいたいなら私ア止めやしないよ。勝手に
しな。……で、そんな事言う奴なんだ、そう簡単に死にやしねエよ
な？」

「……」

……何だかんだ言つて、どうやら俺は励まされていたらしい。…
…急に気恥ずかしくなり、力尽きた感じを装^{おそ}つて俯く。

檻瀬はそれを鼻で笑い飛ばし、ようやくジッポで葉巻に火を点^{とも}
した。

「……ところで、アレは詩樹文がやつたんじゃねエよな？」

檻瀬が思い出したように呟いたのが聴こえ、俺は首を持ち上げる。
僅かに怪訝^{けげん}な表情を浮かべる檻瀬を見上げて、俺は眉根を寄せて問
い返す。

「アレって何だ？」

「昨日……いや、今日と言つべきだな。深夜、《飛島^{としま}グループ》の
本家で内部分裂が起こった。……いや、それも恐らく詭弁^{きべん}なんだろ
うが、とにかく、昨夜で《飛島グループ》は事実上壊滅^{かいめつ}した」

ぼかん……と口を開けたまま、しばらく言葉が出てこなかった。
正直、何を言われたのか理解するまで時間がかなり掛かった。

「《飛島グループ》が……何だつて？」

「警察の見解はこうだ。『飛島組組員が一斉蜂起し、本家で麻薬^{クスリ}を

巡^{トシバチ}つての抗争が勃発。生き残りの大半が麻薬中毒者のため、マトモな聴取は不可能と判断。尚^{なお}、飛鳥組組長の飛鳥茅夏^{ちなつ}、組長補佐の鬼城^{きじ}左右次郎^{さうじろう}、狗飼清蔵^{いぬかいせいぞう}、鮫川西吉^{さめかわゆうきち}の死亡が確認されている。内一人はこの屋敷内に転がってた。今後、《飛鳥グループ》は立ち直る事も存続もまず不可能。以後、捜査は一課に一任する』……結局、この屋敷の件もひっくるめて、闇の中という訳だ」

しばらく、思考できなかった。

何分か経って、ようやく俺は息が漏れた。思い出したように、空気を肺に取り入れる。

「……一体、誰が」

「分かつたら苦労しねエだろ馬鹿者。……詩樹文は、どの段階では知らねエが、確実にこの件に首を突っ込んでた、それだけは分かる。……確かに、助けられたかも知れねエ。　　だがな、それは

つまりおまえらを巻き込むのと同義だとは思わねエか？　それも、助かるかもだ。確実に助かる保証は一切無い。そんな状態で、おまえらに話すと思うか？」

私ア思わねエな、と檻瀬が静かに続けた。

……俺は、何も返せなかった。

確かに、《飛鳥グループ》を壊滅に追い込むような連中を相手に、たった四人の所員で応対できるとは到底思えない。……でも、だからこそ　　力を合わせたいんですよ、棺藤さん……！

……棺藤さんは、恐らく自身を犠牲にする事で、俺達全員の命を守ったと思っっているだろう。それは事実だと思ふ。もし、棺藤さんにこの事件の事を聴かされていたら……俺も皆も、全力で棺藤さんを助けようとするだろうし、何とかして解決しようと考えるだろう。　　だが、それこそ棺藤さんが一番本避けたい展開^{モノ}だったんだろう。

ここまで大規模に発展した事件だ、俺や皆が力を合わせたところで、何の力にもなり得まい。ただ、棺桶^{かんおけ}の数が增えるに過ぎないだろう。

故に棺藤さんは話さなかった。巻き込まなかった。関わらせなかった。

「…………じゃあ見殺しにしるつてのかよ…………ッ」
唇が千切れる位に噛み締め、拳を固く握り締める。
助からないなら、見限るのか？ 助けられない時は、見捨てちゃうのが現実なのか！？

俺はそんなの認めない。どんな苦境に吞まれても、力を合わせれば必ず、光は見えるはずなんだ。それを怠った時点で、俺達はきつとダメになる。

悔やんでも悔やみきれない。俺は今まで何をしていたんだ…………ッ！
「グダグダと煩エんだよテメエは！」

怒声が浴びせかけられ、俺は一瞬言葉を失った。
激昂を飛ばしてきた檻瀬は俺を睨んで、 嘆息。

「過ぎた事グダグダ言ってる暇が在るなら、もっと別の事考えやがれつてんだボケナスが。だからガキなんだよおまえは」吐き捨て、苛立たしげに足踏みする檻瀬。

「…………悪かったな」
言つて、…………自分がいかに子供らしい事をしていたのか、少しずつ思い知った。

自分に向かって嘆息する。…………まだ迷惑を掛け足りないのか、俺は。

「…………で、それを告げにここまで来たのか、檻瀬？」
力が入ってきた。扉に背を預けたまま、ゆっくりと起き上がる。
まだ全身が軋んであちこちに激痛が走るが、何とか目線を檻瀬に合わせる。

檻瀬は鼻を鳴らし、葉巻を盛大に吹かした。

「テメエも、胸に一物抱えてんだろ？ ……吐く気はねエか？」

「…………棺藤さんの遺言だ。口が裂けても言えねエな」

「…………ふん、まあいい…………で、最後に質問だ。 ……これで終わ

「ったと思うか？」

檻瀨の挑戦的な眼差しを受け、俺はやっと気力が戻ってきたのか、自然と苦笑が浮かんできた。

「いや　俺は弱く首を振り、　　まだ、終わりじゃない
な」

「そう、これで終わるはずが無い。」

「まだ彼らが　問題が存在する限り、勝手に終結する事なんて、
まずあり得まい。」

「　……彼を、どこに連れて行く気だ？」

「……」

化物が消失した後に屋敷から現れた彼女に、俺はそう問いかけた。
逢魔キルト　音澄さんを殺したんじゃないかと疑っている容
疑者の少女。

白い着物姿の彼女は、疲れた顔こそしていたが確りした足取りで
柎坂の許まで歩み寄ると、何の躊躇いも無く彼を背負い込んだ。力
無く彼女に凭れかかる柎坂は、まだ意識が戻っていない。

彼らがどんな関係なのか、俺には計り知れない。……だが、俺に
は棺藤さんの遺言が在る。

「俺は、彼を助けるために　　」

「私の彼氏だ」

俺の言葉を遮り、彼女は端的に声を放った。

……しばらく沈黙が訪れ、何とも言えない顔で見つめている俺に
向かって、彼女は眉間に皺を寄せて語を継いだ。

「……私の好きにさせてもらおう」

「　動くな」

自然と、何の躊躇も無く、俺は拳銃を抜いていた。

銃口は定まらなかつたが、それでも彼女の心臓を一撃で貫く自信
に揺らぎは無い。

厳しい口調のまま、俺はゆっくりと言葉を繋げる。

「……彼を下ろせ」

「……あんたの言う事を聴く義理は無い」

「子供か。いいから下ろせ。こっちもこれ以上、人を殺したくない」
俺は若干焦りを懐いていた。

何故 怯まない？ 普通、どんな精神の人間でも、拳銃の銃口を向けられて平静でいられるはずが無いだろう。薬物中毒者なら話は別だが、それでもなければ確実に動きが鈍る瞬間だぞ。

なのに、彼女は一切構わず、ただ無機質に俺の拳銃を見据え、

あまつさえ無視して歩き出そうとする。

「 止まれ。それ以上動くと……本気で撃つぞ？」

「……あんたこそ子供じゃないの？ 言う事を聴かない奴には暴力で訴える。……どっちが子供だ？」

「 ツッ」

カツと頭に血が上り、衝動的に引鉄を絞りそうになる。それを、理性で制御できなかった。

銃声が轟く。

おん……と残響が消え失せた、その後。俺は、自分がした事を本気で疑った。

撃つつもりは無かった。そして、殺すつもりも。だが、俺は確実に奴の心臓を狙って、撃ち放っていた。刹那 俺は絶望と同時に、少なからず安堵を得ていたような気がする。これで、復讐は果たされる。音澄さんを殺した犯人 少なくとも容疑者の一人を、殺せたのだ。その時点で、俺は深い安堵を感じた。

しかし、それを次の瞬間には打ち砕かれた。

彼女は、全く俺に見向きもせず、颯爽とこの場を後にしようとしていた。

銃弾は、確かに彼女の心臓を捉えていたはずだ。自惚れている訳じゃないが、それだけ俺は自分の射撃の腕に覚えが在る。確実に殺せていた。なのに 奴は、死ぬどころか動じさえせず、完全な

無関心で去り行こうとしていた。

…… ゆっくりと、銃口を下ろす。

何故だか……俺には敵わない、と気づいてしまった。

奴は、きつと俺では殺せない。……恐らく、魅織みおりでも、刻条こくじょうでも。

あの化物以上の強さを感じ取ってしまったんだ。

だったら……下手に俺のような奴に守られるよりも、彼女のよう
な存在に守ってもらった方が、恐らく柊坂のためにもなる。そう、
結論付けた。

だが……とも思う。

もし、彼女が棺藤さんを殺害した殺人鬼だったら。その時、俺は

……奴を、殺せるだろうか。

……その時は、死んでも報むくおうと思うだろうか。……分からない。
力が無くなり、その場にへたり込んでしまう。立ち上がる気力も
消え失せる。

「……棺藤さん、」

俺は どうすれば良かったんでしょうか……？

【結殺 壱】 キルト

……極度に運が良いと気づいても、私は幸せにはなれないんだと悟っていた。

どこに行っても疎まれて、どこにいても嫌われて、……生きているのが、とても面倒に感じるようになった。

でも、私が死ぬ事は無い。私は絶大なる強運の持ち主。死ぬはずが無かった。

何をしても咎められる事は無い。初めから私の存在が罪だから。

ただ生きるだけじゃなくて、私は自然と人を殺す事を繰り返していた。それが、奴に言われ続けた事でもある。その強運を活かすには人を殺してみるのがいいと言われて、奴から殺し方を学び、ただ無為に人を殺し続ける日々を送ってきた。

……本当に、無為だった。特に他にやる事が無いから、という程度の理由で、何と無く人を殺してきた。殺せる時に、殺せる奴を、殺す。ただそれだけの行為を、何年も続けてきた。

「おまえは 極運 の持ち主だ。全てにおいてその強運を活かせ。そして 全てを、殺しきれ」

結果。私は、奴の言うとおりの存在になった。

簡単に言えば殺人鬼。別の単語を使えば 殺人種 。

私は、もう誰にも捉えられない。でも、もう何を獲る事も叶わな
い……

「……」

気づくと眠っていたみたいだった。

起き上がってベランダに視線を向けると、外はもう既に暗くなっていた。

部屋の電気は点いておらず、辺りには沈黙と闇が混在した空気が漂っていた。空虚な空間。私はしばらく眼を慣らそうと思って再び横になろうとして、

「……？」

ふと、物音が聴こえ、緩慢な動作で身を起こした。……誰か、いるのか。

先程トモが来ていたが、もう帰ったはずだ。では、誰が？ ……思いつかずにその場で茫^{ぼう}、としていると、部屋の扉が開き、光が闇を引き裂いて入ってきた。

人の影。私は逆光で一瞬、誰か分からず、眉間に皺^{シワ}を寄せて呟^{つぶや}いた。

「……誰？」

「起きてたのか」

その声は。

彼の声だった。

何の躊躇^{ちゆうしゆ}も無く部屋に入り込み、電気を点ける流天^{りうてん}に、私は特に考えもせずにその姿を見つめていた。何でいるんだらう。その思考に至るまでにかんりの時差^{ロース}が在った。

流天は片手に抱えた布団を所在無げに見下ろし、小さく嘆息する。それを持って再び部屋を出て行くこととする流天に、私はようやく声を掛けた。

「何で……？」何を聴けばいいのかわからず、そこで声が止まってしまう。

流天は動きを止め、どうしようか思案した間が在り、その後ようやく振り返った。

「……いちゃ、悪いか？」

小さく応じて、流天は部屋を去って行った。

……意味が分からない。流天は、私を拒絶したんじゃないのか……？
なのに、何でここに？

はたと気づく。考えてみれば、当然だ。流天は、私が死ぬ

と一緒に死ぬ。私を守らなければ、自分を守れない。今は、そんな状況なんだ。

納得して頷うなずいていると、流天が部屋に戻ってきた。どこか、居心地が悪そうに私を見据え、それから視線を外して扉を閉める。それから逡巡しゆんしゆんするように視線をあちこちに巡らせると、最終的に私に視線を定め、つかつかと早歩きで歩み寄つて来た。

眼前まで辿り着くと、すとんと胡坐あぐを掻く。私はそれをぼんやりと見つめていた。

「……………その……………だな」

頭をガリガリ掻きむしり、視線を何度も私と自分に行き来させる流天。挙動不審過ぎる。

「……………何がしたいんだ？」

訝いぶかつて尋ねると、流天はその一言にイラツとキたらしく、私を見据えて顔を赤くする。

「俺は」

と言つて固まる流天。再び沈黙が流れ、意味が分からずに私がもう一度問いかけようとすると、流天が顔を真っ赤にして

「おまえが、好き、だ……………」

言つて、大マジメな顔で私の瞳を覗き込んでくる。

私は、何を言ってるのかよく理解できず、小首を傾げた。

「……………それで？」

「それでッ！？ おまッ、俺の今の一言を何だと……………ッ！？」

「流天も、私が好きなのか？」

そう尋ねると、流天は顔を背けようとして背けないまま、私をひたすら見続けて、口をもごもごさせていた。……………何か変な奴だ。

「そ……………そ、うだ」

「……………本当に？」

「本当だッ。……………これ以上は言わねェから、よく聴けよ？ おッ、

俺はッ、キルト、おまえの事が 好きだ！」

「……………うん」

流天の、羞恥しゆうぢで染まった顔を見て、私は小さく肯定の意を告げた。
……でも、それを聴いても、私は幸せにはなれないと、分かって
いた。

分かっていただけ、言った。

「私も、好きだ」

この気持ちは、恥ずかしくない。私は、ただ認めただけだ。彼が、
好きだと。

そして、好きな奴には

「 待て」

顔を近づけたところで、流天が私の額を押さえた。

顔を押さえつけられ、私は不満を表面に浮かべる。

「……何をする？」

「……あのな、俺はおまえがしたい事をするために、あんな小恥こじばず
かしい事言ったんじゃねえんだ」

「……じゃあ、何のために言っただけ？」

「……おまえに俺の想いを聴いてもらいたかった、それだけだ。他
意は無い。……おまえも、いきなりあんな事すんな。ああいうのは
もつと」

「……流天はしたくないのか、私と？」

言葉を呑み込む気配を察する。

流天は一瞬顔を赤らめたが、次の瞬間には切なげな表情を浮かべ
ていた。

私の心を締めつけるような、とても寂しそうな表情を、私に見せ
つける。

「……何だ、それは」

透すかさず不平を告げる。

すると流天は 何も言わずに私を抱き締めた。

確かな温もりと、仄ほかな汗の匂いが漂ってくる。何がしたいのか
分からず、私は漠然と流天の背中に手を回した。

「……流天？」

「……お願いだ、キルト」

静かな、でも確かな意志を持った、重たい声。

私はそれを聴きながらも、ずっと流天の心臓の音を意識していた。ドキドキしている。ずっと、でも心地好い音で、鳴り続けている。生きている、証だ。

「このゲームで、優勝してくれ」

ポツリと零れたその言葉は、

どうしようもなく 胸を苦しくさせた。

「……流天、は」

「……おまえが生き残れ。……俺は、選んだんだ。選んじまった。

……俺は、おまえを優勝させる」

何で。

何でそんな事を、私にさせるんだ？

ふと、思い至る事が在った。

私は 運が良い。

私が死ぬ事は、私の存在（運）が許さない。

つまり 私は、私が存在する限り、死ねないんだ。

きっと、これは流天が望んだ事じゃない。……仮に望んでやって

るとしても、それは私が、私の存在がそうさせたに過ぎない。私の

せいで、流天は自分を投げ打って私を生かそうとする。

それこそが、私の 縛魂ヨクの真骨頂なのかも知れない。私は何を

しても生かされる。私は何をしても許される。私は 、私から

逃れる事ができない。

ああ、と頭の中で納得した。私は、何て運が良いんだろう。良いからこそ 、私は、きっと幸せにはなれない。

私は、きつと……

「……お願いだ」

再び、流天の声が耳元で囁かれた。

懇願するような、切なる願いを孕んだその声は、私の心を易々（やすやす）と抉（えぐ）っていく。

それでも、……それでも、私の想いは変わらない。

「……私は、……」

言葉が続かない。言いたい事が在るはずなのに、それが形を成さずに霧散していく。

流天も、私を強く抱き締めたまま、
体を震わせながらも強

く抱き締めたまま、ただジツと黙って、私の言葉の続きを待っているみたいだった。

「私、は……」

正直なところ、もう生きていたいとは思ってなかった。

ただ、運が良いから今まで生きてこられたに過ぎない。運が無ければ、きつとあの時、既に死んでいた。今もまだ生きてるのは、偏（ひとえ）に私が 極運 だったから。他に理由なんて無い。

でも 流天となら、一緒に生きていてもいいと思う自分を、

私は認めていた。

流天は、とても良い奴だ。……何が良い、とかどこが良い、とかそんな具体的なモノは引き合いに出せないけれど、私の心を動かす程の 何か を、彼は確かに懐（いだ）いていると思う。私は、それに惹かれたんだらう。

だが、このゲームで生き残れるのは、二人じゃない。私と、流天と、トモと、あの男の内の、たったの一人。どう足掻（あが）いても、その事実だけは変わらない。

……奴は、まだ私を試してるんだらう。私の前から消えても、その影だけは一生付き纏う。私は、死ぬまで奴の『運試し』に付き合わなければならぬ。それが、奴と交わした契約。私の運が続く限り終わらない実験。

「……………流天と、一緒がいい」
「っ」

ぎゅ、と更に強く抱き締められる。流天の体が震えているのが、嫌という程、分かった。

彼は、怯えていた。何に、かは分からない。でも、とても怯えている。私にも分かる位に、体を強張らせて、小刻みに震わせて、怯えている。

でも、今の答が私の本心だった。流天が私を好きで、私を生かしたいと願っても、私はそこに流天がいなければ、また昔に逆戻りするような気がしてならなかった。

流天が、分岐点ターニングポイントだったんだと思う。あの時、流天を殺していなければ、きっと、こんな事にはならなかった。私は持ち前の極運でこのゲームを淡々と終わらせようと考え、恐らく途中で絶えていただろう。でも……………、流天の存在が私を変えた。

だけど、それさえもが、私の 極運 の 縛魂 の効果なんだとも気づいていた。運が良いからこそ、生き残るための布石を用意し、それを最大限に活用して、最終的に優勝へと導く。全てが、生き残るための捨て駒に過ぎないんだ。

どれだけ流天を好きになっても、流天と一緒に生き続けたいと願っても、最後にはどう足掻いても、流天は私のために死んでいく。それが既に現実で定められ、状況は整っている。全ては収束点おわりへと向かい続けている。

「……………我儘わがままだつて分かつてる……………分かつてるつもりなんだ……………っ」
流天の震える声。でもそれは、現実を受け入れていない声。子供のように聴き分けの無い、ただの妄言もっげん。

流天は怯えていた。この整い過ぎている磐石の世界ゲーム、現実、に。

私にも分かっていた。私がどれだけ足掻いたところで、恐らくその未来に狂いは無いのだと。

私は生き残る。流天を殺して。流天を使って。流天を 捨て

て。

「俺だつて、おまえと一緒にいたい……っ！」
初めてかも知れない。

流天の、こんな切ない声を聴いたのは。

私も、流天を支えるように、きゅ、と柔らかく抱き締める。

あんなにメチャクチャやってた流天の体が、今はとても小さく見える。傷だらけになって、何度殺されても立ち上がって、それでも尚、敵に向かつて行くその背中が、今じゃ私の腕にすっぽり納まってしまう。

可愛かった。とても、愛おしかった。

「それを 愛 っつ言っんだよ、キルト」

トモの声が不意に脳裏に閃く。

【結殺 貳】 キルト

流天るてんが逃げ去った後にやって来た彼女は、私の話を聴いて驚いていたけど、すぐに柔らかな、聖母マリヤのような微笑を浮かべて、

『そっかあ キルトも、好きな人ができちゃったんだねえ おめでとう、キルト 』

でも、その笑みはどこか儂はかなげで。

どこか 嘲弄ちょうりやうが混ざっていたみたいだった。

私は訊いた。 どうして流天は逃げたんだろう。 やっぱり、

私の事が嫌いなのか？

トモは笑っていた。心底おかしそうに、ケラケラと可愛げの在る笑声を漏もらして。

『そりゃ、いきなりそんな事すれば流天くんだって驚いちゃうよ。

……まあ？ 他の子なら喜んでキルトにむしゃぶりついちゃうかもだけど？ ……流天くんなら、我儘わがままを言ってる位が丁度いいよ

他は、何もしなくていいかにゃー ただ、その気持ちを伝える

だけで、流天くんはとっても嬉しがると思うよ あ、それに偶たまには甘やかしてやるのもいいかも 流天くん、多分そういうのに全然免疫めんえき無いから 』

的確なアドバイスをくれるのが、トモの良い所だ。私は、トモのそういう所がとても好きだった。

でも、彼女もそうなんだ。彼女も 生き残るためには、殺さなければならぬ。

『……それとさっ、ありがとねキルト あたしなんかを生かしておいてくれて。 約束、ちゃんと守ってくれて 』

トモは柔らかなく笑んで、私を見つめた。

約束。一番初めに、このゲームが始まって間もなく交わした契り。それは……

『あたしを最後まで生かす代わりに、最後にキルトの手で殺してほ

しい、って言ったの、ちゃんと守ってくれて、あたしはすっごく嬉しいよつ、キルト」

友達だから　とか、秘密を共有した仲だからとか、今なら何だって後付けで理由を言える。所詮、理由なんてそんなモノに過ぎない。

それでも私は、トモの言う事を聴きたいと感じて、その約束を契った。トモは、最後まで狙わない。でも、ゲームの最後おわりになったら、トモは　私の手で、殺す。

トモは、……このゲームでは恐らく最弱の位置に立ってる人物だ。何せ彼女の縛魂ヨウクは　人を、一切殺せない。

勝てる訳が無かった。殺し合いのゲームで、殺し合う事が叶わぬ者は、どうやったって生き残る事ができるはずが無い。仮に最後まで生き残ったとしても、もう一方の人間に殺されて終わりだ。どの道、最後まで一人も殺さずにゲームが終了するなど、不可能だ。どれだけ逃げ回って生き延びても、最後の最後で確実に一人だけは、その手で殺せねばならない。

……まあ、相手が自殺するなら、話は別だろうけど。

トモはニコニコと立ち去ろうとして、何か思い出したように再び私に視線を向けてきた。

「あ、そうだキルト。最後の一人、見つけたら連絡するね？ あたしじゃ殺せないから……キルトなら、殺せるよね？　そいつはね　」

そう言って、トモはいなくなった。

……皆、私が生き残るために、死んでいく。それは避けられない現実。止めようの無い現象。

「……流天」

その頭を、柔らかく撫でる。震えた流天は、必死に声を殺していた。……泣いても、いいのに。私は、全然構わないのに。

私は、おまえに死んでもらいたくない。おまえは……おまえだけだ、私の事をそこまで気に掛けてくれた奴は。何度と無く、私を助

けに来てくれたのは。……どれも、私のためじゃないと分かっているけど、そう錯覚するじゃないか。例え、おまえが私の命じゃなくて、自分の命のために尽くしてくれたのだとしても、私にとってそれがおまえの全てだったんだ。

おまえは、私に縛られるべきじゃない。私はおまえを縛りつけたけれど、……これ以上すれば、結局未来は変わらない。おまえは死に、私だけが生き残る。

そんな現実には、糞喰らえだった。

私は、……流天、おまえを生かす。今まで私を救ってきたおまえにだからこそ、できる事だ。最後になつたけど、私の恩返しだと思つて……一度で良いから、おまえに報いたい。

「……大丈夫だ、流天。だから……泣くな」
「っ。……泣いて、ねエ……っ」

「私は、ここに居るから……」
ぼんぼん、と背中を摩さすつてやる。流天はまだ何か言いたそうだったけど、無視してあやし続ける。

しばらくそんな時間が過ぎ、……流天が体を離していった。

お別れなんだと、瞬時に悟った。

「……済まねエ、格好悪いトコ見せちまった……」

「……別に。……可愛かったぞ？」

「ッ」

真つ赤になつて何か叫びかけた流天だったが、すぐに俯うつむいてゴニョゴニョと何か咳せきき始める。……まるで子供だな、とか思った。

「……じゃあ、流天。私からも……お願いをして、いいか？」

意地悪な顔をして、そう尋ねかけると、流天は疑り深そうにそりりと顔を持ち上げる。

「……何だよ？ あんまムチャ言つと」

「今日だけは、……何も言わずに、隣にいてくれ」

吐露つひした本心は、どこか温かかった。自分の気持ち柔らかく流れ出していく感覚に、私はちよつとした安らぎさえも覚えていた。

流天は一瞬キョトンとした顔をしたが、徐々（じょじょ）に顔を赤く染めていき　　ようやくぎこちなく頷いた。

「ま、まあ、それ位なら……」

「……ありがとう」

久し振りに、穏やかな微笑を浮かべられた気がした。……久し振り？　……もしかしたら、初めてかも知れない。こんなに気分が晴れやかなのは、本当に……感じた事が、無かったかも知れない。

流天は動揺したように挙動不審だったが、それすらも可愛く映る。……やっぱり、と気づく。私は、彼の事がそんなに好きなんだな、と。

……取り立てて何かをする訳じゃなくて、ただ何と無く一緒にいる時間は、あつと言う間に過ぎ去っていった。

夜を迎え、深夜を過ぎ、やがては黎明へと近づいた頃、私はスカーットのポケットが震えている事に気づいて、眼を覚ました。

携帯電話を取り出すと、液晶画面には『トモ』の二文字。……と　うとうと、その時がやってきたのだと、悟った。

隣で本当に安心しきった顔で眠る流天の額にキスをすると、部屋を出る。玄関から出て、歩きながら電話に出る。

『　彼が待ってるよ〜』

トモの、いつもの惚けた声に、私は「うん」と短く返す。

場所を教えてもらい、別段急ぐでもなく、そこへ向かった。これで……このゲームは終わる。……違うな。

私が、終わるんだ。

夜が明けて間も無い頃。

朝霧が辺りに薄っすらと立ち込める、広い敷地を有した広場の真

ん中に。

彼は いた。

「……待たせたな。……狂木、十式」

「……」

白衣を身に纏った、私よりも年上に見える青年。両の手を白衣のポケットに突っ込んだまま直立不動の姿勢で、私を禍々（まがまが）しい双眸（そうぼう）で睨み据える。その表情は虚ろ（うつろ）と言うか……考えが読めない、無表情に近い貌（モ）だった。

狂木は私の存在を認めたのか、ゆつくりと右手をポケットから抜き去る。手には、ワンタッチナイフが握り込まれている。

「逢魔殺人（おつまキルト）……《殺》を継ぎし者、か。且つ、内には 極運（フォーチュン）を備えし 極運持（フォーチュン）……人鬼（じんぎ）の最高傑作と謳（うた）われるおまえと殺し合えるという事は、俺も 極運 の恩恵が得られたか？」

「 奴を、知ってるのか？」

思わず尋ねていた。まさか、奴の名前が出てくるとは思っていなかった。

驚きを隠せない私を尻目に、狂木は一切の感情を表に出さず、淡々と応じる。

「……俺は《狂》を継ぎし者。且つ、縛魂（トサイター）から解放された 逸（アウ）脱者（トサイター）。……おまえと同じで、奴に世話になった者の一人だ」

「……私と同じ、か」

言って、自嘲的な笑みが浮かんでくる。

ならば 殺してもいい相手じゃないか。

特殊警棒を抜き放ち、一息で伸ばしきる。腕を垂らすように構え、狂木を見定める。

一方、狂木もワンタッチナイフを抜いてはいたが、同じく構えは無いに等しい。ただ、私を見据えて動かない。

朝霧に霞む視界で、狂木が一步 踏み出す。

「…… 謀略将（フレイム） 識沢智（しざくち）を、何故、生かしている？」

不意打ち気味に発せられた声に、私は眉根を寄せる。

トモを生かす理由？ …… そんなものは、無い。

「何故、じゃない。約束したから、殺してないだけ。 …… 最後には、私の手で殺す」

「 …… 奴の怖さを知らないようだな。 奴は 識沢智は、このゲームの優勝者候補の一人だぞ」

「 …… 馬鹿な事言うな。 トモは、人を殺せない 縛魂 を ……
「知ってる。 奴は人を殺せない。 …… だが、それは然して重要な事柄じゃない事に気づけ。 …… 確かに、このゲームは殺し合いが主目的だ。 だが、本質を忘れるな。 このゲームは、最後の一人になるまで生き残れば優勝なんだ。 別に、無理に殺し合う必要は無い」

「 …… 意味が分からない。 最後の一人になるためには、相手を殺す以外に手は無いじゃないか。 なのに …… 無理に殺し合う必要が無いとはどういう事だ？ 」

「 …… それこそが奴が 謀略将 の名を冠する所以だ。 …… まあ、おまえには分からんか。 …… 最後に奴を残すのは気が進まないが、致し方ない。 先におまえを 殺す 」

言っつて、小走りで駆けて来る狂木。

始まつたんだと、悟った。

終わりへの道が、今、築かれる ！

いんツ、と鋼が搗ち合う音が弾け、ナイフと特殊警棒が衝撃に震える。

一度重なり合つた得物同士、衝撃を殺せずに跳ね上げさせると、すぐさま攻撃へ転じるために再度振り下ろされる。 私は右上から叩き下ろし、狂木は斜め下から振り上げる。

凄まじい衝撃が腕を貫く。 思わず一步退き、狂木を見据えながら距離を取る。

「 …… 力は、それ程でもない。 …… はずだった。 狂木の身体を見ても、どう考えても筋肉は大して無いように見える。 いや、恐らく鍛えていまい。 その細い腕や華奢な体つきを見ても明らかだ。」

なのに、この衝撃。 …… あの断花の斬撃に匹敵する程の威力は、

一体どこから生じているのか。

距離を離して観察していると、狂木が急ぐ風でもなく、自然な足取りで歩み寄って来る。ワンタッチナイフは垂らした手に提げられた状態になっていた。

「……流石に 限越侍 を潰しただけの事はあるようだな。……だが、いい加減気づかないと 即死だぞ」

ゆっくりと近づいて来ていたが、すぐに距離は縮まり、狂木の射程圏に接する 私は透かさず特殊警棒を振り上げ、その頭蓋を

擦過音。

風の抜ける音が、意識の遙か遠くで、微かに流れた。

朝霧が、更に霞む。白熱する思考は、やがてそれへと意識を傾ける。

眼前に狂木が立っていた。何の感情も浮かぶ事が無い、冷たい爬虫類のような顔には、今も何の表情も浮かんではいなかった。ただただ冷淡に、私を睨み据えていた。

その更の下 視界を下げていくと、ようやくそれに行き当たる。

心臓に、ナイフが突き立っていた。

「あ」
服が、徐々に赤黒く染まっていく。ナイフを伝って狂木の腕にまで鮮血が伸びていく。

急激な視野狭窄を感じ、次に吐き気を催す程の息苦しさを覚え、足腰から力が霧散していった。

力無く狂木に凭れかかり、荒い息遣いで、私は彼を思い出そうと必死に思考を巡らした。

必死に、必死に。……浮かんでくるのは、地獄のような強運の日々だけ。

もしかしたら 始まるかも知れなかった幸せな世界が訪れる事は、……無くなった。

「……ごめん……っ、るて、ん……」

ずるり、と狂木の体を滑り、……その場に倒れ込む。

……結局、私にできる恩返しは……無かった。在ったかも知れないけど、私はもうそれをする事が……永遠に、失せる。ただ、頭の中は穏やかだった。死を受け入れていたのかと言えばそうじゃないと思う。未練は在ったし、死ぬのはどこかで怖いとずつと感じていた。

でも、それ以上に これが終われる、やっと解放される、という気持ちの方が何倍も強かった。

「……心配するな、 極運持 。奴は ジェノサイダー 進行役 は、道連れにはならない。……今のおまえに理解できるとは思えないが、最後に快く逝け。……俺は 逸脱者 だ、おまえ達の呪いは一切作用しない。俺に 縛魂 は一切通じないからな」

……知ってる。知ってるから……私は、おまえに一对一を望んだ。

こうでもしなきゃ、あいつは私に縛られっ放しだ。……私はそれでも良かったけれど、あいつの事を考えれば、そして、私の意志もそれを拒んだ。

本当に何の柵しがしも無い状態で私は……あいつに、私を好きになっただけだったから。

……もしできる事なら……もう一度、あいつと……逢い、……た、かっ……た……

【結殺 参】 流天

「……キルト？」

ほとんど反射的に、俺は眼を覚ました。何に反応したのかは分からない。でも、嫌な胸騒ぎがしていた。どれだけ振り払っても拭い取れない、最悪の胸騒ぎが生じていた。

隣で眠っていたはずのキルトの姿が無い事に気づくと、俺は刹那に最悪の事態を連想した。思わず舌打ちが走る。今まで何してただ俺はッ！！

素早く起き上がり、部屋を飛び出して姿を探す。どこにも見当たらない。不安が急激に増大し、息苦しさを伴って俺の理性を崩壊させていく。

苛立ちと焦燥で思考が混乱しきっていた。その時。不意打ち気味に軽快な電子音が部屋に鳴り響いた。

驚きを隠せずに辺りを見渡すと、据え置き電話がなっている事に気づいた。液晶画面を見ると、非通知。嫌な予感が一気に増長する。

受話器を持ち上げ、耳元へ滑らせる。「もしもし？」

「あ、流天くん？ やっほー、あたし、可愛いトモちゃんだよ」

「識沢か？ 済まん、今おまえに付き合ってる暇ねエんだ、切るぞ」

「キルトの居場所、知りたくない？」

「即座に言葉が出てこなかった。」

だが、次の瞬間には本能が蘇り、受話器を強く握り締めて返答を寄越す。

「教える。今すぐだ！」

「うふふう セツカチさんだなあ ……行っても、絶望しか待っていないのに」

「いいから教える！」

識沢は渋々という口調だったが、俺にはどう聴いても嬉々として話しているようにしか思えなかった。聴き終わると叩きつけるように受話器を振り下ろす。

気づいた時には駆け出していた。服装も寝癖も一切構わず、ただ朝早い町を疾走する。

間に合え、間に合ってくれ！ ただそれだけを切に願ひ、俺は駆け続けた。

最後に見せた、キルトのあの微笑が、頭から離れない。

「はあっ、はあっ、……はあっ、」

辿り着いた場所には、薄っすらと朝霧が立ち込め、視界はあまり良くなかった。

それでも 分かる。分かりたくないモノが、見えて欲しくないモノが、理解できる。

キルトが、蹲ひざまづっていた。

もう頭は壊れそうな程にキルトの名を連呼し続ける。心臓が間もなく爆発するんじゃないかと思う程の早鐘を打ち続ける。血が、頭から徐々（じょじょ）に失われていくのを感じる。

弱々しい足取りで歩み寄り、その姿を、目前に捉える。

「きる……と？」

「……」

何も返さない、キルト。

その頬に手を添えると、

僅わずかだが、温かかった。

まだ、温かかった。

「 希望を懐いだくな」

背後で、重たく澄んだ声が響く。

振り返るつもりは無かった。その声を脳に届けるだけの、意志を持ちたくなかった。

「もう間に合わん」

「……黙れよ」

重い、鋭い声音で返し、でも視線は青白い顔のキルトに注ぎ続ける。

……もう、間に合わない、だと？ ……だったら、まだ生きてるんだな……ッ！？

だが、と俺もその事実には気づいていた。幾ら俺がここで人工呼吸をしようが、即座に救急車を呼ぼうが、恐らく間に合わない事に今、生きてるだけで、もう目前に死が迫っている事実。

徐々に冷たくなっていくキルトを見つめて、……俺はただただ絶望感に打ちひしがれていた。

「キルト……おまえを優勝させるって、俺、言ったよな……？」

慟哭ようこくのような声。震えて、とてもじゃないが強いとは言えない、弱々しい口調。

「何で……ッこんな……ッ」

ぎゅ、と消え入りそうな熱を懐くその華奢わしやな手を、両手で握り締める。

どれだけ力強く握り締めても、もう返ってこない返答に、俺は胸を詰まらせた。

「キルト……ッ！」

「……………るて、ん…………？」

「！」

微かな、本当に、蚊の鳴くような消え入りそうな弱々しい声が、確かに鼓膜に届いた。

涙で歪む視界を腕で拭いながら、俺は蒼白なキルトの顔を凝視した。

薄っすらと、俺に視線を向けているキルトが、いた。

「キルトッ！ まだ意識が在るんだな！？ 待つてる今、救急車を

」

「……………ごめ、ん……………」

儂げな、力の無い呟き。

それだけで、俺の精神は崩壊寸前に追い込まれていく。

涙で滲む視界にキルトを納めながら、俺は必死に言葉を紡いだ。

「何言ってるんだ！ 今は喋るな！ すぐに……………」

「……………あり、が……………」

瞼が、下りる。

くた、と力を無くした体から、急速に生気が抜けていくのが分かった。

「……………キルト？」

掠れきった自分の声を意識の遠くで聴きながら、俺は茫然とその名を呼んだ。

キルトは、もう何も返さなかった。

「……………おい、ざけんな。返事しろ、おい、キルト！」

肩を揺さ振る。刹那、震動で胸から夥しい量の出血を確認して、俺は思わず動きを止めた。

……………何で、だ？

キルトの、真っ赤に染まった胸元を凝視する。刺傷は心臓にまで達しているのか、悍ましい量の血液が辺りに拡がっていた。……そう、確かにキルトの胸には、刺傷が創られていた。

ならどうして 俺は無傷なんだ!?

「それが、俺の 逸脱者 としての効果だ。」

ジエノサイター
進行役

背後の声が、やけに厳しく聴こえる。

でも、とてもじゃないが振り返る事はできなかった。

どうすればいい!? このままじゃキルトは

『流天。……もし、貴方に本当に大切な人ができたら……その時は

……』

「」

瞬間、理解する。俺は、そのためにここに来たんだ、と。

不意に 口許に微笑が浮かんできた。ああ、そうだったのか。

そのために俺は、今まで生きてきたんだな。

再びキルトの顔を覗き込み、生気の消えゆく頬を、髪を撫でた。

そして、 その頬にキスをした。

口を離し、その耳元に声を掛ける。

「……今まで、ありがとうな、それと、……愛してる。……

じゃあ、な」

言って

俺は、

これで終わる事を、……決意した。

【結殺 肆】 流天

「……別れは済んだか？」

「……」

背後で俺達を見守っていた狂木くるいきをやつと振り返り、俺は忌々（いまいま）しげにその顔を見やった。

殺人を意にも介さずやり遂げるところは、キルトのそれと似通つてると思つた。一切の感情を削除した顔が、そこに佇たずんでいる。

「……俺を殺しに来るか？
進行役ジエノサイダー」

「……ああ。テメエはここで 死ね」

武器なんて、要らなかつた。

あいつにはこれ 拳だけで、充分だ。

「……おまえには、謀略将ブレイン を殺して欲しかったのだがな。……

致し方あるまい。おまえを葬つてからにしよう」

「ほざいてんじゃねエ ツー！！」

踏み込み、刹那的に距離を殺すと、その顔面に拳を叩きつける

直前、何の構えもしていなかつたはずの狂木のナイフが蠢うごめき、俺の腕を切りつけた。擦過音と共に、腕から鮮血が噴き出す。

痛みで鈍つた拳は狂木の顔面を捉える事は叶わず、逆にナイフを持った狂木に懐ふとこに入り込まれる隙を創つてしまった。

咄嗟とつさに身を引くが、その前にナイフが振りきられ、俺の胸を浅く切り裂く。

再び数メートルの距離を離して対峙する頃には、右腕と胸を切り裂かれた状態の俺と、全く無傷の状態で佇む狂木がいた。

「はあ……いつて、くそ……はあ、」

呼吸が乱れたまま直らない。傷も 修復される事は無かつた。

狂木が感情を込めずに呟つぶやく。

「……幾ら 不死 と言えど、逸脱者^{アウトサイダー} には一切通用しない。俺は、何の因果も無視して人を殺せる」

「……つせえな、ンなこたどーだっていい。テメエを殺しゃ済む話だ」

「……自覚しろ。おまえでは 俺には敵わない」

無視して、拳を再び固める。出血で腕が痺れて上手く力が入らない。踏み込む度に、胸の裂傷も疼いた。

「おおおおおおおおおおおおあああああッッ！！！」
咆哮を上げながらの呐喊に、狂木は全く動じず

……俺にだって、分かっていた。

今の俺じゃ、こいつ……狂木十式^{としき}に、敵わない事を。

キルトの仇を、討てない事を。

……でもな。俺がここで朽ちても、……俺は構わないんだ。

俺には、 希望が在る。

ここで俺が死んでも残る、温かな希望が

「 がッ」

喀血^{かっけつ}し、自身に起こった事象を、ゆっくりと認識し、……否応無しに受け入れる。

心臓を一突きにされた俺は、緩やかな睡魔に襲われ、その場に入り込んだ。出血が止まらない。いつもなら痛みを感じつつも、確かな『生』を感じていたが……今回ばかりは、強烈な『死』のイメージが強過ぎて、思考が徐々（じょじょ）に消失していくのが分かった……。

霞む視界に浮かぶ青年は、鮮血を纏ったナイフを戻しつつ、ため息を零していた。

「……さて、忌々しい奴だけが残ったな。

謀略将

識沢智^{しきざわちも}」

吐き捨てるように呟いた青年に、俺はニタリと笑みを浮かべて、無理矢理喉を震わせて言っただけだった。

「はッ、……まだ、だ……ッ、まだ、終わりじゃ、ねエ……ッ」
「……まだ息が在るのか。……存外しぶといな、不死 という奴は」

「へッ、……おま……エはッ、……勝て、……エ、よ……ッ」
狂木の爬虫類のような眼差しを受けても、俺は全く堪えなかった。揺るがない希望ってのは、こんなにも心地が好いモノなのかと、俺は今、初めて知った。

優勝するのは、おまえじゃないんだよ、狂木。生き残るのは
は

銃声が、轟いた。

俺は既に意識だけの状態になっていたが、何と無く状況は掴める。狂木が俺を見据えたまま、固まった。その後、ゆっくりと自身の体を見下ろし

「……………ご、ぼ」

喀血 夥しい量の血液を、口から溢れさせた。

振り返る。その視線の先には

「はあ はあ はあ はあ」

「……………おま……え、は……………」

狂木だけじゃなく、俺も驚愕を覚えていた。

狂木を撃つたのは識沢 ではなく、

「 パパの、仇……ッ！」

華奢な、どこにでもいそうな、高校生の女の子。ボーイッシュな雰囲気纏った、クラスメイト。

「もう終わったんだよチュウ。これで……復讐は、果たされたんだから」

「うん……っ。……ありがと、トモ」

もう一人で大丈夫だから、と言って音澄は歩き出した。……恐らく、出頭するんだろっ。

音澄が広場から消え失せた後、動かない参加者を見下ろして、識沢が笑む。

どうしようもない程に邪悪な色を滲ませた、満面の笑みで。

「やあやあ皆さん、どうもありがとっねっ　お陰でこうし

て優勝できちゃった　本当、一人一人が頑張った努力の賜物だよ

っ　特に　」

禍々（まがまが）しい笑顔を、瞳が虚ろな俺へと向けてくる。

「き・み　流天くんには本当に敢闘賞をあげちゃいたい位だよ

本当、よく頑張ったよね！　このゲームの功績の大半は君無し

じゃあり得なかったよっ　ありがとねっ、流天くんっ

あ、聴こえてないかによっ？　あはははは！　でも、あたしはちゃ

んと言ったはずだよ？　十式くんは最有力候補だつて　だった

ら、彼に敵う奴なんていないって気づかないかによっ？　それでも

立ち向かつちゃうんだよね、君は　何せ君は　進行役　だもんね

　　殺さずにはいられない、か　」

「……い　」

不意に。

微かに漏れ出た声が、ここまで聴こえてきた。

識沢はそれに反応してニコニコとそれ　狂木を見下ろす。

「なあに？　何か言ったかによっ？　十式くんっ　」

「……　逸脱者　は……一切の……　縛魂　を……」

「まあだそんな事言ってるのうっ？　……そだねえ、折角だし、教

えてあげちゃおっか　」

得意満面に、識沢が語り出す。本当に、いつも以上に嬉々として。

「確かにいっ、　逸脱者　には一切の　縛魂　が通じないし、何よ

り、普通の武装は効かない。何故か？ 逸脱者 は名の通りこの世界の法則 縛魂 から逸脱した存在^{モノ}。つうまありい、簡単に言えば世界の法則は通じない。もっと分かり易く言うならあ

普通の人間じゃ傷つける事すら不可能、かにゃ」

指をクルクルと回して、演説染みた口調で識沢は続けた。

「で・も！ 逸脱者 が完全に無敵つて訳じゃないんだにゃ〜これが！ 何故だか分かるう？ ねね、分かるう？」

「……………ま、さか……………」微かな吐息のような声を発する狂木。

「おやあ？ 分かっちゃったあ？ ぼんぴーん！ そう、

逸脱者 は 逸脱者 を殺せるんだね！」

哄笑^{いっしょう}を上げる識沢。楽しくて楽しくて仕方ないと言った様子だ。

もう絶える寸前だろう狂木は、既に何も発さなくなっていた。…

…そろそろ、俺も意識が薄れつつあるのを自覚してきた…………

限界か。 でも、そこには全く後悔なんて無かった。

俺の希望は、まだ潰^{つぶ}えていない。…………いや、まだ始まつても無いんだ。

識沢が哄笑を終える頃、視界の隅で異常を確認した。

刹那 心が安堵して、意識が急速に薄れるのを感じた。

そつだ。俺はここで終わりだけど、おまえはこれからも生き続けるんだ。せめて俺の分まで生きてくれ…………なあ、そうだろ…………母さん。

白熱する視界で、確かにその影は立ち上がり

…………じゃあ、な キルト。

俺は、そこで瞼^{まぶた}を下ろした。

「……………流天？」

その声が届く事は、無かった……………

【結殺 伍】 キルト

……深い深い、意識の底。

私はそこで、幼い少年を見た。

私は宙に浮いていて、少年は深い底にしっかりと足を着いて、私を見上げていた。

どこか切なげな顔をした少年は、私を網膜に焼きつけるかの如く、でも穏やかな表情で見つめていた。

ただ静かに。……そして儂げに。 しかし屹然と。

少年は、私を見つめていた。

じゃあ、な。

少年の声は聴こえなかったが でも、その言葉は確かに、私の胸にまで届いていた。

その声はとても懐かしくて、……温かくて、とても、優しくて……

胸が、苦しくなって、堪らなかった。

少年がどんどん遠ざかっていく。 いや、違う。私が、どんどん上昇していつてるんだ。底に少年を残したまま、私だけが浮かんでいく。

離れたくないと、叫んだ。叫んでも叫んでも、言葉は声にならない。ただ、胸の中で慟哭だけが響いている。

好きだよ キルト。

少年は最後にその言葉を投げかけると

「……流天？」

声が、戻ってくる。

意識が覚醒した瞬間、私は広がる光景に絶句した。
死んでいる。私を殺したはずの狂木も、
た、流天も。 生き残るはずだっ

……死んで、いる？

半開きの瞳に、既に光は無い。濁った双眸に、既に力は感じられ
なかった。

胸から溢れ出た血液は辺りを赤く染め上げ、ひたすら現実感の無
い世界を形成していた。

意味が分からなかった。 刹那、理解する。

私のせいだ。

私が胸を刺されたから と、そこで更に気づく。

……じゃあ、どうして私は死んでいないんだ？

私の負傷を全て共有する流天。私が死ぬ程の負傷を受けたら、流
天も死ぬ程の負傷を共有するのは、理解できる。では、死ぬ程の負
傷を負った私が生き返った場合、流天がどうして一緒に生き返らな
いんだ？

流天を見やる。……動き出す気配は、一切無い。本当に、もう生
き返る事は無い、ただの骸……人間の成れの果てに化している。

「 え？ きる、と……？」

声が聴こえて、私はそちらに視線を向けた。 トモがいた。

驚愕に彩られた顔には、困惑が色濃く滲んでいる。どうして？
とか、何で？ とか、そんな感情が隠しきれていない。

私も何が起こってるのか理解できずにいたが、 不意に思い
至る事が在った。

自分の体を見下ろす。刺傷の痕がアリアリと残っている胸元には、
夥しい量の血液が付着していた。……これだけ流れれば、傷がそう
でなくても、出血多量で死に至るのは間違いない。

傷口に触れる。 傷が、跡形も無く消えていた。痛みも、疼
きすらも感じられない。ただ、健康体の肌が、そこに存在していた。
少しずつ、思考が現実^{うす}に追いついてくる。何が起こって、何が終

わったのかを、徐々（じょじょ）に理解し始める。

まず、流天が死ぬはず無いんだ。あいつは、不死だった。殺しても、すぐに再生する。でも、今のあいつはそんな効果が一切働いていない。本当に、ただの人間に戻っている。

だが、私はどうだ。狂木に刺された傷が、完全に消失している。こんな事、常識的に考えてあり得ない。何かが生じて再生した、と考えるのが現実だ。

信じたくは無い。でも、その結論が一番現実に近いと考えられた。

……流天、おまえは 私に 不死 を移したのか……？

死に掛けていた私に 不死 を転移させる事で、死亡を防いだのか。……でも、そんな事をすればどうなるか位、分からなかったのか……？

動かない流天を見据える。虚ろな眼差しは、もうどこも見えていない。生気の無い顔には、意識が欠片も浮かんでいない。

「……流天、私は」

「えッ!? きつ、キルト!? ちょっと待って!? ナニコレ!

? 意味分かんない!!」

私の声を遮るように響いてきた声に、私は振り返る。……ああ、そうか。私は納得する。

終わらせないといけない。

落ちていた特殊警棒を拾い上げ、ゆっくりとトモに歩み寄る。トモが凛然とした表情で私から後ずさる。

「待つて待つて待つて待つてツツ!? 落ち着いてキルトツ、まずは話し合おう!? ねっ、それが一番だよ、うん間違いな」

「じゃあね、トモ」

「ッ、と頭蓋を搗ち割る音が響き、トモが頭を押さえて数歩後ずさる。痛みで変な声を上げながら、トモは変な事を喚き散らしていた。

「ざッけんア! 何であたしがこんなトコでエッ!」

私は構わず歩み寄り、一撃、二撃、と何度も何度も頭部

に特殊警棒を叩きつけ、少しずつ動かなくさせていった。

何度殴りつけた後だろうか。トモがピクリとも動かなくなった後、私は同じく動かない流天の許へとやって来た。

まだ微かに温もりの残る、でも冷たくなった体。

その体を抱き上げ、その耳元に口を近づける。

「……また、一人になった……な。……どうして、私なんかのために……命を捨てられるんだ、おまえは……っ？」

熱い雫が、頬を伝うのを感じた。

胸が苦しくて、喉がしゃくり上がり、とてもじゃないが平常心でなんかいられなかった。

「応えろ……流天……っ」

もう、声が届く事は無い。

もう二度と……その声を聴く事は無い。

私は　あの時失ったと思っていた涙を、止め処なく流した……

澄み渡る空は朝霧を散らして、　私達を暖かな光で包み込んでいた……

私は、運が良い。

だから、最後まで生き残れる。

だから、何をしても許される。

……私は、運が良い。

でも、幸せを感じる事は、もう

【結 伍】 キルト（後書き）

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございます。

これにて殺戮の宴は終焉と相成りましたが、物語はもう暫らく続きます。言わば後日談的な物語なのですが、最後までお付き合い頂けたらと思います。

【来 終】 千友

……秋晴れの空の下、ボクは穏やかな風を受けて、目的地へと向かっていった。

途中で立ち寄った花屋で買った花束を両手で抱えながら、黙々と足を進める。

車道が一車線の在る歩道を歩いていると、不意にクラクシヨンが響いた。

驚いて視線を巡らせると、白いセダンに乗った夢成さんが片手を振っていた。思わず微笑が漏れて、花束を抱えて駆け寄る。

「乗ってくか？」

サングラスを掛けた夢成さんが、親指で後部座席を指差して尋ねた。ボクはそれに返答せず、構わず助手席に乗り込む。

「じゃ、れっつー！」

「……随分とふてぶてしくなりやがったな、おい」

「えへへえ でも、夢成さんも随分と男前になったね？」

「コラ。年上をからかうモンじゃねえぞ」

ぴんつ、と額を小突かれて、ボクは更に微笑を零す。

夢成さんは車を発進させ、しばらく車内は無言に包まれていた。

「……アレから七年、か」ポツリと夢成さんが零した。

「……うん。もう、七年になるんだよ……」

ボクもシンミリと返して、それきり車内は沈黙が支配した。

あの事件から、今日で七年もの月日が経過していた。色んな事が在り過ぎた、あのたった数日の出来事を、今でも鮮明に思い出せる……

……あの時は、本当に死んでもおかしくない事ばかりが起こった。ボク自身、今も生きているのが不思議な位だ。

「……そんな顔すんなよ、千友ちゃん。……今頃、音澄さんも棺藤さんも、きつと許してくれてるさ」

励ますように、夢成さんが口を開いた。

それが何を意味しているのかは、言わなくても分かっていた。

……ボクはあの日、殺人を犯した。

憎くて憎くて仕方なかった人を、この手で……殺害した。

もちろんそれは犯罪で、許されない事だ。……なのに、ボクが逮捕される事は、無かった。

でも、完全に何の罪も被らなかつた訳じゃない。一応、傷害の罪で裁判所にも出廷したが……結局、有罪にはならず、服役する事もまた、無かった。これと言った罰を受ける事も無く、ボクは再び世間に戻ってくる事ができた。

そこにどんな思惑が在ったのか、ボク自身は、知る由も無い事なだけで……檻瀬さんが手を回したのは自明の理だし、何より事務所の皆が頑張ってくれたのは言うまでも無い。

感謝してもしきれない気持ちで一杯だったけど、それよりも辛い事が在り過ぎて、立ち直る事は絶望的に思えた。

友人が、三人も死んだ。

ボクが警察署に出頭した頃、息を吹き返した狂木十式に、トモが殺害されたと聴かされた時、ボクは意味が分からず何度も聴き返した。そして、更にそれに続く悍ましい内容に、ボクは本気で気を失いかけた。

死体こそ見つからなかつたものの、キルトと流天くんの死亡も追つて説明を受けた。何でも、致死量に達する血液が流れ出ている、とてもじゃないが生きている可能性は無いと言う。だが、死体がそこに無いのは不思議だった。警察の見解では、誰かが死体を持ち去つた可能性が在るらしいが、誰がそんな事をするんだらう？ ボクには皆目見当が付かない。

あと、もちろん狂木十式も死亡が確認された。恐らく、トモを殺害した後力尽きたようで、ボクが与えた銃創以外の外傷は確認できなかつたそうだ。……それでもボクが有罪にならなかつたのは、どこかで巧みに何かが仕組まれていたからだと思う。

そしてトモの死亡が確認された際、その死因が近くに落ちていた特殊警棒で殴られた事に因るモノだと判明し、その時点でようやく七年前の撲殺魔が狂木十式だと分かった、という事だ。

ともあれ、事件はそこで終息を迎えた。異常なまでに死傷者を出した羽月高等学校襲撃事件から始まり、飛島組本家内乱、断花屋敷たちばな爆破事件、そして……撲殺魔の最期。たった三日の間に起こった様々な事件は、ようやく幕を下ろしたのだった。

……ともあれボクは復讐を果たし、晴れて自由の身になったのだが、とてもじゃないが素直に喜べる状態じゃなかった。何より、棺藤さんの死がボクの胸を痛ませた。やっとこれから再び仲好くなれるはずだった、そんな時に唐突に別れを告げられたんだ。遣る瀬無いどころか、どうしようもない消失感で、しばらく何も口にできなかった位だ。

それに、復讐自体、パパがどう思ってるのか、ボクには分からない。……きつと、怒ってると思う。パパの事だ、死んでしまった自分なんかのために人を殺すなんて愚かし過ぎる、って怒鳴ってると思う。……でも、優しいパパの事だ、最後にはボクを抱き締めて、よく頑張った、って認めてくれると思う……

今頃、天国で棺藤さんを叱りつけてるだろうな、って想像するとフツと笑みが零れてしまう。僕の娘になんて事をさせるんだ！ 済まないねえ、オトさん。でも、私はよくやったって褒めてやりたいですよ。……なーんて。

「……何一人で笑ってんの？」

あまりに自分の想像が面白くてクスクス笑っていると、夢成さんが怪訝けげんそうに顔を覗き込んできた。目の前に夢成さんの顔が在って驚き、すぐにその顔に手を当てて押し退ける。

「夢成さん、前っ！ 前を見て！」

「わーっつたよ、分かったから顔を叩くな。鼻が潰れるっ」

ポカポカ叩いて運転に押し戻すと、そっとため息を零す。……もう、ちよっとは意識してよ、ボクの事も。

広大な広場の一角に、そのスペースは設けられていた。

七年前のあの重大事件の際に作られた慰霊碑と、数多くの墓石は、今も綺麗に立ち並んでいて、毎日誰かが来てるんだろう、いつも整理整頓されている。

ボクは慰霊碑の前に花束の一部を捧げて、黙禱した。

隣で夢成さんは余った花束を肩に載せ、感慨深そうに慰霊碑を見上げていた。

……あの事件で亡くなった方は百人を下らないとされている。厳密な数が分からないのは、断花屋敷に放置されていた死体のほとんどが白骨化しており、その数がとてもじゃないが数えきれないんだそう。今でも白骨化した死体が見つかってるそうで、当分あの辺には近寄りたくない。

眼を開けて、夢成さんを振り返ると、夢成さんは嘆息混じりに肩を竦めて、ボクのために道を開けてくれた。

「そだ。ねえねえ夢成さん。魅織さんって今、何してるの？」
目的地へ向かって歩きながら、後ろに振り返って、夢成さんの顔を下から覗き込んだ。

夢成さんは「ん？」と一瞬何を言われたか分からない顔をして、すぐに苦笑を刷いた。

「何も変わってねーよ。今も事務してるぜ？ アニソン聴きながら」

「あはは……じゃあ刻条さんは？」

「そう簡単になると思うか？ 今は保険会社調査中。……背はいつになったら伸びんのかねー、と魅織と言いかう位に全く変わらん」
「それは酷いよー。刻条さんは、小さい方がボクはいいと思うなっ。……それとも、夢成さんは背の高い女の方が好みなの？」

夢成さんよりも背の低いボクじゃ、やっぱり意識されないのかなあ、と思つて尋ねると、何故か夢成さんはしかめっ面。

「……そりゃ、魅織か刻条か選べって言ってるのか？」

「え？ や、そういう訳じゃ……」

「もし二人以外でもってんなら、俺は迷わず千友ちゃんを選ぶぞ」

そう言うてはにかみ笑いを浮かべる夢成さん。

……え、それって……？

期待に胸を膨らませつつ、ボクはもう一人聴いていない人がいるのを思い出して、慌てて問いを再開した。

「ヒーさんは？ ヒーさん、まだ辞めてないよね……？」

「何だそのまるでヒー坊が辞めたいのに辞めさせられないような状況下に置かれているような物言いは」

「ボクそんな風に言った……？」疑問を感じずにはいられない。

「元気だよ。……正直、あの時に辞表を叩きつけられるんじゃないかと、皆して思ってたんだが……あいつ、中々タフネスでな」

何でも、あの後ヒーさん、更に仕事にのめり込んだみたいで、とてもじゃないけど辞める気ねエな、と夢成さんも苦笑するしかなかったそうだ。元気そうで何よりだ、と思う反面、本当に大丈夫なのか、と心配にも思う。

夢成さんも頷きながら応じた。

「確かにな。あいつも若エし、今ならまだ引き返す事だってできるんだらうけど……」

「けど？」

「一度この事務所の良さを知っちゃったら、もう二度と戻れねエか・も・な」

にや、としたり顔で笑みを浮かべる夢成さんに、ボクは思わず噴き出していた。

「あははっ、違くないよっ。……ボクも、もう戻れないな」

「ははは……ん？ 先客、か？」

夢成さんの不思議そうな声を聴きながら、ボクもその子を視界に納めていた。

幼稚園児位の女の子が、お墓の前で手を合わせて座っていた。柔らかな髪は垂らしていて、背中の中程まで伸びている。服装も地味めの、大人しそうな色合いで、あまり目立つような雰囲気じゃなかった。

その小さな子の隣までやってくると、女の子はボク達に気づいたようで、ぴよこんつと立ち上がって、可愛らしくお辞儀をした。

「こんにちはっ」

「こんにちは。……えっと、貴女もお参りに来てくれたの？」

女の子はボクの顔を覗き込んで、「うんっ」と太陽のようにはにかんだ。

可愛らしい　本当に美少女、と呼べるような整った顔立ちで、愛らしさに、どこかやんちゃっぽさが混在していて、雰囲気はボーイッシュな感じもしている。背中越しに見ると大人しそうな趣が在ったが、いざ話してみると寧ろ元氣っぽさの方が先立つ、そんな女の子だった。

どこか懐かしさを感じさせる　誰かを連想するような、そんな独特の空気を持っていた。

だが……一体誰の娘さんだろう？　と思わず考え込んでしまう。

「おねえちゃんたちも、この人のおまいりにきたのっ？」

女の子が無邪気に尋ねてくる。『この人』とは、恐らくお墓の下に眠っている人の事だろう。

ボクはニコツと微笑みながら、「そうだよ」と返した。

女の子はそんなボクに愛らしく笑みながら、再びお辞儀をした。

「ありがとう、おねえちゃん！　わたしのお母さんとお父さんもきつと喜ぶと思うっ」

「そう？　えっと……この人とお母さん達って、どんな関係なの？」

女の子は「うんとね、」と悩む素振りを見せてから、ニパツとはにかんで、

「お母さんもお父さんも、『しんゆう』って言ってた！」

「親友……っ？」

「あつ！ ごめんなさい、おねえちゃん！ わたし、もういかなきゃ！」

もう一度深くお辞儀をして、「ばいばい、おねえちゃんっ」と言
って手を振り、走り去ってしまった。

ボクはそれを半ば茫然と見送って、ようやく我に返る。

「行っちゃった……」

「知り合いの娘さんか？」

夢成さんが隣から顔を出してくる。ボクは小首を傾げた。

「ううん、ボクの知らない娘だったよ。……でも、誰かに似てるよ
うな……」

「確かに、あの危なっかしい感じは、俺も覚えが在るような……」

二人してうんうん考えていると、唐突に何か思い浮かんで、……
その考えを打ち消した。

「まさか、ね……」

でも、と思う。

お墓は、しきりわくとも識沢智 トモのものだ。

七年前、トモの葬儀を行う時、ボクは驚いた。彼女には、親戚が
一切存在しないし、親族と呼べる人は弟しかいなかったのだ。だか
ら、葬儀は弟さんだけで行った。

つまり、今の娘さんは確実にトモの親類じゃない。

では一体……そこで不意に浮かんだ事も、すぐに打ち消した。幾
らなんでも、それはあり得ないと思った。……確かに、雰囲気は似
てるものが在ったけど……

トモに呼び出されて行ったあの時には確実に死んでいたんだ、考
える必要が無い位に、それは、もう……

花束を添えて、再び黙禱を捧げる。

パパのお墓の前で、ボクは静かに眼を瞑る。

……パパのお墓には、棺藤さんの遺骨も一緒に納骨されていた。

棺藤さんもトモと同様に、親戚や家族が誰もいなくて、遺骨の引き取り手がいなかったの、ボクが貰い手になりたいと立候補し、…

…パパと同じ所に眠ってもらおう事にしたのだ。
これで、パパもきつと寂しくないと思う。あれだけ仲が良かったんだもん、きつと天国でも楽しくやってくれていると思う。棺藤さんも、どうにかパパに許してもらえればいいな、とか考えてしまう。きつとあの二人の事だ、すぐに仲直りして次の日にはまた二人一緒に笑い合ってるよね。

…パパ、棺藤さん。ボクは一生懸命生きるから、ずっと見守っててね？ もう二度と、パパや棺藤さんみたいな被害者を出さないように、ボクにできる事を精一杯頑張るから、パパも棺藤さんも心配しないで安らかに…

眼を開けると、夢成さんが感傷に耽ひけった眼差まなびしで、墓石を見つめていた。

儚はかなげで、寂しげで…見ていて、こっちが胸を締めつけられそうな顔をしている夢成さんを見て、思わずボクは声を掛けた。

「パパも棺藤さんも、きつと夢成さんには感謝してると思うよ」

ボクの声に反応して、意識をこっちに向けてきた夢成さんは、どこか澄んだ表情をして、小さく息を吐いた。

それが何故だか落ち込んだ感じに見えて、ボクは更に言葉を重ねてしまう。

「そ、それにきつと怒ってないよ、二人とも。夢成さんは頼りになるし、それに」

「や、違うんだ。俺は今日、音澄さんと棺藤さんに許してもらおうと思ってる」

歯切れ悪く、夢成さんは鼻の頭をポリポリと搔かいて、そんな事を呟つぶやいた。

許してもらおう？ やっぱり…助けられなかった事を、かな？

ボクは励ますように拳を固め、声に力を込めて言葉を返した。

「大丈夫だよ！ 二人とも、絶対に許してくれるに決まってるよ！」

夢成さんは苦笑を浮かべた。それは寂しげじゃなくて　ボクにはどこか嬉しそうに映った。

何か意を決したように息を吸い込んで、夢成さんはボクをまじまじと見つめてきた。

「え？　な、なに、夢成さん……？」

夢成さんは急にボクに身を寄せると、　肩を抱き締めて、お墓に向き直った。

「音澄さん、棺藤さん。無礼を承知でお願いします。千友ちゃんを俺に下さい！」

言って　夢成さんは、ボクの顔を覗き込んだ。真摯しんじな眼差しに、思わずキョトンとしてしまう。それから少しずつ、彼が何を言ったか理解していった……

「……音澄さんと棺藤さん、許してくれそうか？」

「えっ？　えっえっえっ……ええっ!？」

「それとも……やっぱり許してくれないかな……」

ちよつと残念そうに、でも悪戯イタズラっぽく笑む夢成さんは卑怯ひきょうだ。

ボクは顔が赤らむのを自覚しながらも、何とか夢成さんから視線を外さずに、真っ直ぐに告げた。

「　大丈夫だよっ。……二人とも、絶対に許してくれるに、決まってるよっ」

それはとある秋晴れの空の下。

幕を下ろした物語は、こうして再び幕を開けようとしていた

【種明 壱】 流天

俺の母さんは 不死 だった。

死ぬ事の無い彼女は、永遠に時を刻んでいたと思う。何十年も、何百年も、たった一人という孤独に耐えて……

実際、母さんが何十年生き続けたのか、俺には知る由も無く、ただ母さんは歳こそ取るが、並大抵の事じゃ死なない事を、幼い俺でも分かっていた。

母さんは、いつも元気に明るく振舞っていた。……幼い頃の俺にとってはそれが全てだったから、疑う余地も無かったんだが、今にして思えば彼女は 気丈に振舞っていた節が在った。

母さんに俺を宿した親父は、俺が俺を意識する時には既にいなかった。母さんは死んだと言っていた。俺は、疑う気は無かった。母さんが嘘を吐いていたとしても、俺は別に構わなかった。

今が幸せなら、他には何も望まない。それがその時の俺の全てだった。

だが そんな或る日。母さんと立ち寄った片田舎でその事件は起こった。

母さんがボ口を出したんだ。引鉄は憶えていない。ただ、何か事故が遭って、母さんが酷い怪我をしたんだ。そして、村の連中の見守る中、自然と治癒していく光景がそこに広がったんだ。

『 化物だ！ 』

誰かがそう叫んで、それが一気に周囲に伝播し、悪夢が始まった。

悪魔とか、化物とか、異端とか、色んな罵倒をあらん限り受けて、

俺と母さんは暴力の嵐に見舞われた。母さんは俺を庇ってどんな暴力も受けた。その度に傷つき、再生し、死に掛け、再生を繰り返した。

若い俺はただただ泣き叫び、あまりの理不尽に村の連中に罵声を響かせていた。

やめろ！ かあさんをいじめるな！

何度泣き喚いた事だろう。何度制止の声を張り上げただろう。だがしかし、それを聴き入れられる事は一度としてなかった。

その村は、その時は知る由も無かったが、村ぐるみで宗教をやっていたんだと思う。連中にとって母さんは悪魔であり、化物であり、異端であったんだ。故に、それは、抹殺の対象になり得た。たったそれだけの事だったんだ。

「ごが　つ、と。鈍い音がして、鈍い衝撃が走り、俺は意識を昏倒させた。」

頭を叩かれたんだと気づいたのは、その後。恐らく農具で殴られたんだろう。一切の容赦が無い一撃に、俺は自覚こそしなかったが、多分死に掛けたんだと思う。

何も知覚できない時間が過ぎ、気づいたら母さんが蹲っていた。

あちこちから出血し、身動き一つしない母さん。連中は遠巻きにそれを眺め、口々に罵声を囁き合っている。

かあさん？

自分の体の異変に気づいたのは、その時だった。
傷が一つも無い。

あれだけ殴られ、傷つけられたのに、体のどこに触れても痛みを感じない事は無く、また痕も全く残っていなかった。

そして 傷だらけの母さん。いつもなら瞬く間に治癒する体またたが、何の生命反応も返さず、沈黙したまま動かない。

『流天るてん。私は大切な人を亡くしてしまったけど、代わりに大切なモノを受け継いだのよ』

或る日、母さんは言った。

それは、俺がどうして親父がいないのかを聞いた日の事だったと思う。

『……その大切な人は、私に生きろと言ったわ。……そして、こんなに大切なモノを残してくれた』

そう言って、俺の頭をくしゃつと撫でる母さん。

幼い俺には何を言ってるのか理解するのが難しかったが、今思うと……そういう事なのか、と何と無く理解できた。

『だから流天。貴方も大切なモノができた、その時は…… を、受け継がせて』

唐突に、理解する。

彼女は俺に、不死を譲ったんだと。

代々受け継がれた不死を、俺に受け継がせたんだと、気づく。自分よりも大切だったから。

これ以上、傷つくのが怖かったから。何を差し置いても守りたかったから

もう、泣いても叫んでも取り戻せないのは分かった。それでも俺は、もう動く事は無い母さんにすが縋りつき、力の限り泣き続けた。

俺には大切なモノなんてできない！

俺の一番は母さんだったんだ！

俺の大切なモノは母さんだけだったんだ！！

俺は、一生 かあさん不死を離さない！！！！

……そんな事を胸に刻んだあの頃が、とても懐かしい。

母さん、ごめん。俺あの時、母さんを一生離さないって誓ったのに、結局離れ離れになっちまった。

それと ありがとう。母さんのお陰で、俺の大切なモノを守れた。……今なら、母さんの気持ちは何と無く分かるよ。自分を失ってでも守りたいモノが在るって、こんな気持ちなんだな。

……母さんの許へは逝けないと思うけど、……それでも俺はいいと思ってる。それに、きつと母さんの事だ、俺がいなくても寂しくないだろ？ だって、そこには父さんがいるはずなんだから……

……じゃあな、キルト。俺はもういなくなるけど、おまえは……俺の分まで生きて、俺の分まで幸せになれよ。おまえの事だ、俺の事なんてすぐに忘れちゃうさ。……忘れちゃった方が絶対に幸せに

なれるだろうさ。だから、おまえは俺の事なんか構わず、一人で勝手に幸せになっちまえ。

……じゃあ、な……

光を感じた。

まさか天国に逝ける訳は無いと思うけど、……信じられないような気持ちで眼を開ける。

「……………」

ぼんやりと浮かぶ景色は、随分と見覚えの在る光景だった。それはまるで

「……なん、で……？」

掠れた声かすが、漏れたも。

同時に、視界が、熱い雲くもで滲にじんだ。

意味が分からない。何が何だか理解できない。でも 確かにそれは

「……………起きたか」

夢じゃないと、頑かたくなに信じ込みたかった。

この際、夢でも良かった。これが夢なら、俺はどれだけ救われたか。……だけど、そいつは俺を覗き込んで、現実としか思えないような感覚くわんかを伴ともなって、微笑みかけてきた。

「……っでだよ……っ何で、俺は……ッ」

上手く喋しゃべれない。言葉が胸むねに痞つかえて苦しい。嬉しさのあまり声が掠さられきつていた。

キルトが、そこにいる。

それだけで、俺の頭は混乱パニックを起こした。だが、それだけじゃない。どうして俺は生きてるんだ。

あの時、俺は確かに 不死 をキルトに受け継がせ、ただの人間に戻ったはずだ。そんな普通の状態で狂木くるいぎに心臓を一突きにされたんだ、生きてるはずが無い。

なのに……

「……おまえは、運が良かった」

キルトが俺の髪を優しく撫でる。柔らかで確かな手触りに俺は一瞬、あの頃の母さんを連想した。

俺は言われた意味が分からず、見上げる形でキルトの顔を見つめた。以前の彼女からは想像もできない、穏やかで落ち着いた表情に、俺は更に動悸ときを早める。

その整った顔が、不意に不機嫌そうに曇くもった。

「……おまえ、あの時、私に 不死 を移して、勝手に死のうとしたりだろう？」

微かに棘とげのこもった声音に、俺は視線を逸らそうとして ぴ た、と両手で頬を挟まれ、無理矢理キルトの顔に向けさせられる。可愛い顔が、すぐ近くに迫る。

「……しただろう？」

「……あの時は、仕方なかった。おまえを助ける方法はそれしかなかったんだ。……でも俺は」

「勝手に死ぬな」

ぴ、と人差し指で鼻の頭を突かれ、俺は言葉を呑み込みざるを得なかった。

キルトは不機嫌そうにしばらく俺の顔を覗き込んでいたが、やがて許してくれたのか、先程の穏やかな表情に戻った。柔らかな微笑に。

「……私は言ったはずだぞ？ ……流天と一緒にいい、と」

それは あまりに純粋な吐露とろ。

俺の心を易々（やすやす）と砕ききる、爆弾のような言葉だった。

……俺は、胸が狭まるような感覚に襲われ、
でも、何とか返す言葉を探す。

「……俺だって、……俺だってな、おまえと一緒にいたい。ずっと一緒にいたいと思った。……でも、無理だって分かってたから、俺は」

二人一緒に生きられないのなら。
どちらかしか生きていけないのなら。

俺は 躊躇ためらわずに、おまえを生かす道を選ぶ。

胸が張り裂けそうな想いでキルトを見つめると、彼女は変わらぬ微笑で、こっぴど応じた。

「何度も言わせるな。私は、おまえと一緒にがいい。おまえと一緒にいたいんだ」

「だけど……！」

「もし、」

俺が言い募ろうとするのを遮り、キルトは言葉を繋つなげる。

俺が渋々黙り込むのを見下ろすと、キルトは神妙な顔になって先を続けた。

「……仮に、このゲームそのものに 縛魂ヨーク が掛けられていて、私と流天が殺し合うように仕組まれていて、どちらかが死ぬまで続くのだとしても、それがどうした？ ……もし、それを理由にするつもりなら、……見損なつたぞ？ 流天」

「え……？」思わず変な声が喉のどを抜ける。

「私は、……おまえの生きる事に対する純粋な執着が、好きだ。生きるためなら何をいとも厭われない、その在り方が好きだ。そんなおまえが、高がそんな事で死ぬ事を選択するなんて、私は、おまえを誤解していたのか？」

問いかけるその眼差しは、どこまでも純真で、無垢むくだった。まるで疑問になど感じていないような、確信的な眼差し。あくまでこれは 確認だ。端はなから疑ってなんかいないんだ、こいつは。

俺はしばらく真摯しんしな眼差しをマトモに受け続け 不意に嘖ひんき

出した。

ゆつくりと体を起こし、キルトと向かい合うように座り直す。着替えた後なのか、キルトの服にも、そして俺の服にも、血の痕は無かった。

「……はは、キルト、おまえちよつと俺を過大評価し過ぎだ。……俺はそんな奴じゃねえよ。……ただ、生きるだけで精一杯っつーか、俺にはそれしかなかったから、な……」

生きる事こそが、母さんへの罪滅ぼしであり、唯一の親孝行のよくな気がしたんだ。

だから、何が何でも生きた。生き続ける事だけを考えて、今まで歩んできた。

……だからこそ、キルトによつて 不死 をメチャクチャにされた時は、本気で殺意が芽生えた。俺が死ぬ事への恐怖じゃなくて、母さんの思い出が壊された事への怒りの方が、絶対的に強かった。

でも、今はそうでもない。こう考えると変な感じだが……あの時キルトに殺されたからこそ、俺はキルトに出逢え、且つこうして一緒にいたいと思える程に、俺の気持ちが変わったと思う。

……最悪の第一印象の相手が今じゃ、とても愛しい彼女になつてるなんて、あの時の俺には微塵みじんも想像できなかったに違いない。

「……それが、私には凄すごいと思つたんだ、流天」

俺の弱々しい返答に対し、キルトは和やかな雰囲気なごで応じた。

「私は、生きる事へ、同時に死ぬ事への感覚があまりに薄いと、おまえに逢つて自覚した。流天、おまえは何が何でも生きたい、死にたくないと思つて行動しているようだったが、私はその真逆だ。別に、このゲームで優勝しなくていいとか、生き抜かなくてもいいとか思つていた訳じゃないが、おまえ程に生への執着が在ったとは思えない。……正直、いつ死んでも構わない、そう考えていたと思う。……死にたいと願つた訳じゃない、でも生きたいと願つた訳でもない。ただ、一瞬前も生きてるから、今も生きてるだけで、次の瞬間も生きてるとは限らない、そんな生き方をずつとしてきた」

キルトが言うには、それは何の価値も意味も無い人生なんだそうだ。ただ、生きてるから仕方なく生きる事を継続しているだけ。そこには何の指向性も無く、単純に惰性だせいとしての意味合いしかない。その無価値無意味の人生を送るに置いて、暇潰しの意味合い……本当に序ついででしかない、どうせ生きてるならしてみようかな、という位の意味しか持ち合わせない、殺人を習慣的にやってきた。

……価値の無い、意味の無い人生。それを決めるのは、他人ではない。どう歩もうと、最後に決断を下すのは、やっぱり自分だ。自分がどれだけ頑張っても、どれだけ努力しても、成し得なかった事が在っても、自身が「よくやった」と自分を認めてやれば、それだけで意味の在る、価値の在る人生モノになるのだと思う。

「……だからと言って、その生き方を今から変えるつもりは無いし、きつと変えられないと思う。だから　おまえに惹かれるんだ。私には無い要素モノを、おまえは持っている」

そう言って、キルトは微笑んだ。……寂しげな、微笑。どこまで行っても、辿り着く事が無い、遠い場所にいる眼差しを受けて、俺は胸が苦しくなる。

やっと、同じ場所に立てたと思ったのに。

やっと　分かり合えると思ったのに。

「……今は変わらなくても、」

俺は　戯言ざれごとだと自覚しながらも、呟つぶやきを止めなかった。

きつと、今言わないと一生言えない気がする。そう感じて、喉を震わせる。

「……今すぐ変わらなくても、長い時間を掛けて変わっていけばいい。死ぬまで変わらなくても、……それでもいい。おまえが変わりたいと思うそれだけできつと、……変われると思う」

何年でもいい。何十年でもいい。死ぬまで変わらなくても、それでもいい。

俺にとっちゃ、そんな事は些細な事に過ぎない。

ただ　生きてほしい。

生きてさえいれば、変わる必要なんて無い。変わらなくなっただって、生きていけるんだから。

「おまえが変わりたいと願うなら、俺は……おまえが良ければ、いつまでも付き合っただけ。それこそ、死ぬまで、な」

精一杯、笑ってやった。

あの、母さんみたいな温かな笑顔が浮かんだか不安だったけど、俺にできる精一杯の笑顔を、キルトに見せてやった。

それだけで救われたような気持ちにさせる、母さんの笑顔を

キルトは俺を見てキョトンとしていたが、やがて大人びた微笑を浮かべ、

「……ああ。死ぬまで、頼もつかない」

今更のように顔を赤くし、今のがプロポーズだと気づいて、俺は更に顔を赤くさせた。

「てか……一つ訊かせてくれ、キルト。何で俺は生きてるんだ？」

あの時、俺は確かに死んだ。それは、間違いないはずだ。なのに……今こうして、俺は普通にキルトと話している。足も在るから、幽霊じゃない事は確かだ。

疑念が晴れずにそう尋ねると、キルトは平然と、

「何だ、その事か」と何でも無い事のように返した。

「何だ、って……あまりに異常事態が続け様に起こって感覚が狂ってんじゃねエか？」

「おまえは、私に 不死 を移したんだろう？」無視して尋ねるキルト。

「ああ？ ……まあ、そうだな」移したっつーか受け継がせたんだが。

「おまえにできて私にできない道理は無い」

キルトはそう告げると、ふつと口許に笑みを刷いた。

「おまえの傷が、運良く心臓に到達していなかった。それだけだ」
言われて、 やつと気づいた。

「まさか おまえ、自分の 縛魂 を……！？」

「ふん。私が貸しを作ったままにするとと思うか？」

そう言っって意地悪な笑みを浮かべるキルト。

そんな馬鹿な 、自分の 縛魂 を……あの絶大な威力を誇った 縛魂 を、俺に受け継がせたってのか……！？

不意に脱力すると、キルトは含み笑いを浮かべたまま、俺を見つめ続けた。

……この野郎、何が何でも俺には負けねエつもりか、おい。

俺も釣られるように苦笑が浮かんでくる。……ホント、こいつに

は敵わねエ。心底そう思う。

「　　えーと、いちゃついでるトコ済みませんね」

「　　二人して笑い合つてるところへ、不意打ち気味に第三者の音が響き、俺の思考は一瞬で凍りついた。

「　　バツと振り返ると、扉を音も無く開けて、一人の青年が立っていた。

「　　闇色のコートを羽織った、特徴らしい特徴も無い男だ。そいつを見た瞬間、キルトの顔に緊張が走ったのが分かる。自然、俺にも僅かに焦燥に似た感覚が駆け巡る。

「　　青年は俺達を見下ろすと、梳かされていない髪をクシャクシャと掻き混ぜ、どこかぞんざいな口調で話を続けた。

「　　えっと、貴方が柘坂流天くんですよね？」

「　　……だったら、何だっつーんだ？」睨みつけるように、返答を吐き捨てる。

「　　初めまして。僕は当ゲームの観測者オブザーバーを務めてる、在原有一ありはらゆういちという者です。以後よしなに」

「　　……観測者？　　つー事は、おまえがこの狂れたゲームイカの主催者か？」

男　　在原は温厚な態度を表に出したまま、にこやかに頷いた。
「　　ええ、そうですよ」

「　　……なら、テメエに訊きたい事がある。応えろ」
立ち上がると、在原に歩み寄り、その胸倉を掴み上げようとして

在原はそれを片手で制した。

「　　ちよっと落ち着いてください。僕は話をちゃんと聴きますから、

落ち着いて。何より僕にあまり近寄らない方が身のためだと先に警告しときますよー」

ぴた、と動きを止め、在原を睨み据える。……喰えない顔をした野郎は、さつきと変わらぬ落ち着き払った顔で、俺を見据えている。……聴くまでも無い。恐らくは、奴の縛魂エフェクトがそういう効力を持つんだらう。もう既に、そんな会話も今更な感じがした。

在原の目前で立ち止まり、そのままの距離で眼光鋭く睨み据える。「一応聴くが、このゲームは、最後の一人になるまで続くんだな？」

「ええ、そうですね」

「じゃあ……参加者が二人残って、それ以上の死者が出なかった場合は、どうなる？」

在原は考える素振りすら見せず、淡々と返した。

「最後に二人以上残る事態、と判断させてもらって宜しいですよね？」

まあ、現実的に言わせてもらいますと、あり得ません。ゲームの本質と言うか、言うなれば根底に介在する縛魂も少なからず関係しています。何より

進行役ジェノサイダーが生きている限り、参加者が二人以上残る事は断じてあり得ないとだけ言っておきましょうか」

進行役 狂木が言っていた単語。それはそのまま、俺を指す単語だと、俺は認識している。……つまり、何だ。俺が生きている限り、参加者は確実に減らされる事態に在る、そう言いたいのか。だが、俺にはキルトを殺す気など、毛頭無い。……縛魂が働くにしても、俺には通用しない自信が在る。

「……じゃあ、何だ。テメエはいつか俺がキルトを殺すと、そう言いやがるつもりか？」

「へ？……あの、何か勘違いされてませんか？」

在原が怖ず怖ずと尋ねてくる。俺は眉根を寄せて、疑念をそのまま口にする。

「何がだ？ 俺とキルトは参加者で、どっちかが死ぬまでゲームは

「ああ、やっぱり。何を勘違いしてるのかと思えば、そこかあ」
なるほどなるほど、と勝手に納得し出す在原。……こっちは何が
何だか分からない。

俺は苛立ちいらだ紛れまぎに声を飛ばす。

「だから、何の話だ、おい？ さっさと話せコラ」

「えっとですね、まあ、根本的な勘違いですよ。……だからちゃんと説明に来てほしかったのに……」ブツブツとぼやき始める在原。

「だから、何だ？」

「ですから、貴方

柘坂流天さんは、このゲームの参加者じゃないんですよ」

………は？

しばらく、空気が凍っていた。

意味が分からない発言を受けて、俺は本当に思考が白紙化され、言葉も出なかった。

数十秒の空白の間を置いて、俺は何とか声を絞り出す。

「なん だ、って……？」

「ですからね、柘坂さんはこのゲームの参加者じゃないんですよ、
って言ったんです」

「 は？ いや、待て。何言ってんだあんた？ 俺が 参

加者じゃ、無い？」

「ええ、まだお分かり頂けませんか？ 貴方は 」

「待てよ！ は！？ じゃあ、あの手紙は……？ 八人を殺せつて
手紙が、俺の許にも届いたぞ……？ アレは、そういう意味じゃな
いのか……！？」

そう、確かに手紙が届いたんだ。あり得ないと分かっていたが、

それでも確かにあの人の　母さんの筆跡で送られてきた。

内容は、今でも憶えている。指定された場所に八人の男女がいるから、そいつら全員を殺せという簡潔な内容。

それはつまり、参加者の証じゃないのか？

在原はそこでようやく得心したように深く頷いた。穏やかな微笑は一切崩れない。

「手紙の内容は正しいですよ。……僕の言い方では、ちょっと伝わり難かったですかね、済みません。……そうですね。もうゲームは終わってるんですが、どうせなんで説明でもしましょうか。何より、僕は一応そのために来たんでもありますし」

そう言って、在原は小さく咳払いをすると、訥々（とつとつ）と説明を始めた。

「当ゲームは、八人の人間が最後の一人になるまで殺し合うという、単純明快な生存戦サバイバルゲームです。その勝利条件はただ一つ、最後の一人になるまで生き残る。他にルールは一切介在しない、純粋な生き残りを賭したゲームです。

……ただ、ですね。このゲームの性質上、中々ゲームが進行しない事態が多々起こり得ます。参加者同士が警戒し合ったり威嚇いかくし合ったりで徐々（じょじょ）に戦況に均衡バランスが取れてきた場合や、単純に参加者がゲームを放棄してしまう場合ケースです。つまり、優勝者が決まらずにダラダラとゲームだけが続いていくという、最悪の状態ケースですね。それを打開するために、このゲームには参加者とは別枠で組み込まれた存在が介在します。それこそが柊坂さんこと　進行役　です。

進行役　の役割は名の通り、ゲームを速やかに終わらせるために進行させる事に尽きます。即ち、参加者が最後の一人になるまで、ないし全滅するまで、殺し尽くす……それが、このゲームに置いての　進行役　の　縛魂　です」

在原はそこまで言うとお泊置いて、爽やかな微笑さわを浮かべた。

「お分かり頂けましたか？」

「……何と無く、だがな。……つて、待てよ。それなら……」

「ええ。このゲームは既に終了済みなんですよ、柊坂さん」

瞬間　俺の中に在った大きな大きなしこりが霧散する感覚を、これでもかという程に……痛感した。

終わったんだという途轍もない安心感に、思わず頬を熱い雫が伝ったのを感じた。

どこを見ても絶望しか沸かなかった闇の中に、ようやく光明が差し込んだような、そんな錯覚さえ覚える程に……今の俺は、安堵に包まれていた。

在原はそんな俺を意に介さず、キルトへ向き直り、ニコリと微笑みかける。

「優勝、おめでとございます、逢魔キルトさん」

「……嬉しい、と素直に感じない」

そう言うキルトの表情は、確かに晴れないものだった。

俺はどうしてそんな顔してるんだ？ と聴きそうになって、「これで終わりだという保証はどこにも無いだろう？」

キルトの棘トゲの含まれた言葉は確かに在原を刺していたが、何故かその言葉は俺にも向いているような気がして、質問をそのまま呑み込んでしまう。

……考えてみれば、当然の問いだと思う。あれだけ異常なゲームに参加させたんだ、優勝した時点でハイサヨナラ、とは考え難い。その後何らかの事柄に付き合わされそんな雰囲気ではある。

在原はそんな敵意剥き出しのキルトを真正面に見据えると、全く意に介さずに、虫も殺せないような表情で問いに応じた。

「いいえ、これで終わりですよ、逢魔さん」

「信じられる要素が無い」キツパリと告げるキルト。

「まあ、そうですね」応じる在原の顔にも苦笑が滲じんでいた。

うっん、と在原が悩む素振りを見せたのは束の間で、すぐに口を開く。

「そもそも、このゲームは何故行われたと思いますか？」

唐突に掛けられた質問に、俺は何も応えなかった。キルトもしくは
らく逡巡してから、訝しげに応じる。

「……知るか」素っ気無い返答だった。

「あはは、ですよ。……このゲームはですね、単純に 殺人種
という人種を人工的に減らすために周期的に行われている、言わば
雑草の駆除と同じです。何度駆除してもすぐに発生するんですよ、
雑草って。なんで、周期的に行わないと、すぐに一杯になっちゃう
んです。そうならないために、僕達はそういう人種になりそうな者
そしてそうなった者を駆除して回っているんです。ゲームと称して
潰し合わせてね……中には僕達の手を負えないような方もいらつし
やるんで、そういう危険な方には、同じく危険な方を向かわせた方
が効率が良いですから。且つ、どちらが死のうと世間的には良い方
向に向かう。こうした小まめな駆除が、世界の均衡を守っているん
です。ねえ」

どこか嬉々とした声音で語った在原の話の内容に、俺はしばらく
何も言わなかった。

言えなかったのではなく、言わなかった。……馬鹿馬鹿しい、と
内心反吐が出た。

そんな糞下らない事のために、俺は 不死 を失い、見知らぬ連
中を血祭りに上げ、拳句死に掛けたのか。

実に愚かしい事だった。確かに俺は生きるために人を殺してきた
だが、それが、その大本がここまで下賤な事だったなんて 胸
糞悪過ぎる。

俺は在原に喰って掛かるうとしたが、奴は表情を崩さずに話を続
けた。

「優勝した方には、二度とこちらから関与しないと誓います。貴女
はいつもどおりの生活に戻り、このゲームの事は一切忘れて暮らし
てください」

「 テメエ、ざけてんじゃねエぞ！」

殴りかかり それをキルトの手で止められる。

俺は驚いて振り返ったが、キルトは以前見せた無表情に近い顔のまま、在原を見据えていた。

「……まだ聴いてない事が在る」

硬い声音で発するキルトに、在原は微笑のまま応じる。

「八人目は、誰だったんだ？」

【種明 参】 流天

「あ」
すっかり失念していたその存在に、俺は思わず小さな声を漏らした。

「そつだ。俺が参加者に含まれていないとするなら、一体誰が八人目だったんだ？」

「訳も分からず在原ありはらに視線を注ぐと、彼は逆にキョトンと見つめ返してきた。」

「えつと……ほとんどの参加者は、貴方方に殺されているのですが……」

「……私が殺したのは断花土清とトモだけだ」

「……やっぱり、おまえがやったんだな……？」

「親友だと言っていた彼女を、おまえは平然と……殺し尽くしたんだな……」

「少なからぬ感傷を懐いだきながらも、俺も報告を口に載せる。」

「俺は飛島茅夏としまとむなつつて奴を殺した。……話を聴くに、棺藤かんとうも死んだはずだ」

「あの化物……月不見輝夜つきみす かくやも消滅したと聴いている」

「……狂木十式くるぎ としきは、音澄おとすみに射殺された、んだろ？」

「ええ。概ねその通りですね」

「だが、全員で六人しかいない。キルトを含めても七だ。どう考えても一人足りない」

「射殺さんばかりの眼光を込めて尋ねるが、在原は困ったような表情を浮かべるだけだ。」

「一人足りない……と申されました……今話を聴く限りでは、逢魔さん。八人目も貴女が殺しているんですよ」

「キルトの柳眉りゅうまゆが顰ひそめられる。俺も訝いぶかしげに在原を見つめると、そのまま視線をキルトにスライドした。」

「……てーと、あの中にいたのか？」

「……身に覚えが在り過ぎて、特定できないな」

確かにそうだ。仮に俺が殺していたのだとしても、アレだけ殺人を繰り返せば、一体誰が八人目だったかなんて、見当も付かない。それだけの強敵揃いで、誰もが参加者に勝るとも劣らぬ連中ばかりだった。

結局誰か分からずに再び在原へ視線を戻すと、彼は更に小首を傾げて、

「おかしいですねえ？ 確かその場には、つづみか柎坂さんも居合わせているはずなんですが」

「何？」

刹那、俺の脳裏に親友の顔が浮かんで 消えた。

まさか……あいつだったのか？ あいつが……最後の、参加者だったのか……？

キルトも俺を見て驚いたような顔をしていた。……俺が居合わせ、キルトが殺した人物。それは、奴しか思い当たらない。

俺は沈んだ気持ちをそのままに、その名を吐露した。

「……ズー はいざきずいへい灰崎瑞平か……？」

「いえ、違いますが」

あっさりと、キツパリと切り捨てられ、俺は間の抜けた表情をかなりの時間、突き返していた。

「は？ や、待てよコノヤロウ。そいつしかいないだろ？」

実際問題。……他に誰が……」

「……まあ、憶えていませんかねえ。その八人目の方って言うのが、このゲーム始まって以来、最速でお亡くなりになった方ですから」
在原が言うには、このゲームの一番の死者が、その八人目だったらしい。

だが、そんな奴が死んだ話なんて聴いた事も無い。俺とキルトが一番初めに狙われたのは、あの飛島茅夏の軍団であって、他には一切誰とも

いや、待て。俺は何かを見落としていないか？

そう、本当に最初の最初。俺が、奴と遭遇した時

「……思い出しましたか？　　そうです。八人目の参加者は、このゲームが始まって間もなく、何より僕が説明するよりも先に亡くなってしまっただんですねえ」

あの夜。

俺はキルトに出逢ってしまった。その原因は何だった？

奴は　　人を殺していた。何の躊躇も無く、一切の容赦も持ち合わせず、ただ淡々と。

アレが　　奴こそが、最後の参加者であり、最も早く消え失せた参加者だったのか。

俺はしばらく茫然としていた。まるで実感が湧かない。あの男に、一体どんな　縛魂ヨク　が在ったのか、全く想像できない。できるはずも無い。

どうしようもなく、このゲームは終わってしまった。俺なんか、取るに足らない存在だったに違いない。恐らく、いてもいなくても変わらなかっただろう。俺がいなくても、ゲームは全く支障を来たさずに運営され、結果　　キルトではなく、狂木でもなく、識沢しきざわが優勝していただろう。

でも、俺がいた事に因り、キルトは運良く、優勝を納める事ができた。それだけに留まらず、その体に　不死　まで宿して、ゲームは幕を下ろした。恐らく唯一それだけが識沢の誤算だったに違いない。それさえ無ければ、確実に奴が優勝を果たしていた。誰一人として殺さずに、この殺し合いのゲームを生き抜いたに違いなかった。「……じゃあ、本当にキルトが……」

優勝したんだな、と口の中で呟きを漏らした。
もうそこにはただただ感嘆を込める事しかできなかった。おまえは本当に凄い奴だよ。こんな絶望的なゲームで、結局勝ち抜いちまうんだから。

キルトはそれでも硬い表情を崩さず、在原を睨み据えていた。

「……」

「……あの、そんなに睨まないでくださいますか？ 僕、見た通りの
の小心者なんで、今もかなり怯おびえてるんですが」

「 本当に、これで終わりだと誓えるか？」

……多分、キルトが恐れているのは二回戦の存在。これでゲーム
が終わらず、続いて生き残った連中同士の、もしくは新規に用意さ
れた 殺人種 の連中との殺し合いが始まるのではないか、という
事だろう。

もしそうなら、俺だつて見過ごす訳にいかない。確かに、世間的
には良い事かも知れない。将来危険な存在になり得る、もしくはな
る事が決定している連中を潰し合わせるの、明らかに非人道的だ
が、それ以上の被害を出さないためには仕方ない事かも知れない。

だが、俺は倫理りんりがどうか口出しする気は更々ねエが、二
度とこんな騒動に巻き込まれるのは御免だ。勿論、キルトを二度も
あんな眼に遭わせる位なら、相手が何であろうと、ここで ブ
チ殺す。

決意と、そして拳を固めて在原を睨み据えると、奴は肩を竦すくめて
深いため息を零こぼした。

「……何を言つても無駄でしょうが、一応敢あえて説明させて頂きま
すですね、一度このゲームに参加された方には、僕達側サイドからは一
切関知しないという規定が在るんです。ですが、こんな規定も在り
まして。

このゲームを生き抜き、優勝を納めた方には、今後いつでもこの
ゲームに参加する権利が与えられます。参加の是非に就いては僕達
に言ってもらえればいつでも参加できる訳です。且かつ、このゲー
ムにおける殺人は概ね許可が下りていまして、どれだけ死傷者が出
ようと罪には問われない、となつています。

それ以外で僕達は貴女方には一切関与致しませんのでご安心を。

誰にも情報は漏らしませんし、この件に関しての一切の情報は闇に
葬ほうちゆうられると判断していいでしょう。

……最後に。優勝者には取り敢えず十年間は何もしなくても生きていけるだけの賞金が出ますので、後で口座を確認しておいてくださいね。……そんなところですかね、言っておく事は」
在原はそれだけ告げると、扉の方へ向かって歩き出した。
俺はその後姿を眼で追って、……何と無しに口を開いた。
「あんたは……こんな事をして、本当に世の中のためだと思ってるのか？」
当然だと思つて発した疑問に対して、在原は立ち止まったが振り返りもせずになだ一言。

「まさか」

言つて、在原は扉の奥へと消える。

最後に聴こえた鼻で笑うような声は、……何故か苛立ちを感じず、どこか共感できる響きを宿していたように思えた。

ただ、沈黙が下りたのに気づいて、俺はキルトを振り返つた。
ぼんやりと虚空を見つめる彼女を見て、……俺は、生唾を嚙下した。

「キルト」

声を、掛ける。

キルトが、意識を俺に向ける。

視線が絡み合う。心臓が早鐘を打ち、思考が白紙化されるように霧散していく。

舌を動かすのが、酷くもどかしく感じた。

「……何だ？」

酷く素っ気無い応対。でも……どこか温かみの在る声音。

俺は真っ白な頭のまま、告げた。

「……………襲っても、……………いいか……………？」

俺の一世一代の告白に、一瞬驚いたような顔をした彼女は、やがて

「……………ああ」

華やぐような、心を根刮ねこそぎ奪さらってしまうような笑顔を、浮かべた

……………

始まりは、本当に最悪だった。

何の因果か、唐突に殺されて。

俺の魂が勝手に書き換えられて。

いつの間にか変なゲームに巻き込まれて。

生きるために、守るために殺し尽くして。

気づくと、どうしようもなく惚ほれてて。

生きるために、守るために死を選んで。

でも……………そんなの、彼女には全く意味無くて。

彼女は、俺の全てをブチ壊し、塗り替え、上書きして。

……………完全に、嵌はめられていた。

俺は、もう彼女から離れられなかった。

……………いや、違うな。

俺が、彼女を離せなくなってたんだ。

それが、俺と彼女の物語。

もう二度と見る事は無いだろう刹那の輝きは、これにて幕を下ろす

【種明 参】 流天（後書き）

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー（・ー・）ー
次頁にて【八匹の殺人種】は完結致します。
できる事なら、最後の頁までお楽しみ頂けたらと思います。

お母さんとお父さんは、とても仲が好い。

わたしの大好きな人達だ。いつまでもそうあつてほしいと思うし、きつとわたしが願うまでもなく、ずっとそうであるに違いない。

「ばいばい、おねえちゃんっ」

お参りに来てくれていたお姉ちゃんに挨拶アイサツをして、わたしはお墓の間を走つてお母さんとお父さんが待つ場所へと向かった。

お母さんとお父さんの親友で、『トモ』ちゃんつていう人をお参りしてる人は、とつても良い人そうだったつて早く話さなきゃ！そう思つて、パタパタと足を動かす。

墓地から少し離れた所に在る休憩室で、二人揃つてベンチに腰掛けていたのを発見！

わたしがそうつと忍び寄り、驚かそうと近寄ると、お父さんが振り返つて、人差し指を口許に当てて「しい」と小声で呟つぶやいた。更に近づくと お母さんが眠っている事に気づいた。

「んもう、お母さん寝ちゃったのう？」

「まあ、寝かशीてやれ、な？ お母さん、きつと疲れてるんだよ」

お父さんが和なごやかな声で返したのを見て、わたしはぶうと頬を膨らませる。

「折角せっかく『トモ』ちゃんをお参りに来てくれた人がいたのに」

「へえ？ どんな人だったか分かるか？」

お父さんがちよつぴり驚いたような顔をして尋ねるのを見て、わたしは顎あごに指を添えて小首を傾げた。

「うんとね、歳はお母さんとお父さん位に見えたよ。とつても可愛い人だったんだよ？ それにねそれにね、何だか彼氏さんも一緒だったんだよう〜」

「そっか。……あいつも、元気でやってんだな……」

お父さんが感慨深げに呟いたのを見て、わたしは更に小首を傾げる。

「知ってるのう？」

「古い友人、かな。……さて、と。幸留。これからどこに行こうか？」

お父さんが静かにそう尋ねたのを聴いて、ぱあと明るくなるわたし。

「わたしねわたしね！ お母さんとお父さんと三人で遊びたいの！」「……じゃあ、ちょっと可哀想だけど、お母さん起こしてあげないとね」

お父さんはそう言っつて、お母さんの耳元に口を近づける。

「キルト 起きて、キルト」

甘い声を聴いたお母さんが、むにゃむにゃと寝言を言っつて、……薄っすらと瞼を上げる。

「………流天？」

お母さんの胡乱で、でも幸せそうな声に、お父さんがニッコリと微笑んだのが分かった。

それは秋晴れの空の下。

幕を下ろした世界は、再び緩やかに幕を上げ、待ち望んだ幸せは、もうすぐそこに……

【完】

あ、そうそう夢成さん。ボクのところに変な手紙が届い

ただだけど。

変な手紙？ どんな内容だ？ ストーカー関係なら任せとけよ？

ううん、違うの。……えっとね、何か、

七人の人間を殺してほしいって、差出人が棺藤^{かんどう}さんで届いたの

【八匹の殺人種】・・・【了】

【語 尽】 幸留（後書き）

ここまでお読み頂き、誠にありがとうございますー（・ー・）ー
これを以て【八匹の殺人種】シリーズは完結とさせて頂きます。
また、他の作品で出逢う事が在れば、また宜しくお願い致します。
それではこれにて。どこかで再び相見える事を祈りつつ P 琢磨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1963e/>

八匹の殺人種 下巻

2010年10月8日12時02分発行